

田畑平之丞殿
市来正之丞殿

園田彦左衛門

(朱)
「甲子五月十八日」

(黒紙)

長防当分の形行承合申候処、去ル十五日より当廿日比迄
ニ相掛、外国人申合幕府并御国様より之征兵多人数乗合、
軍艦廿七艘程差向可相成との由、長崎又は対州江兼而手
付相成候者共より、去十日比より追々早打を以注進相成、
夫故山口表之人数下之関江出張、神社之旗或は町家之昇
都而取揚、右は異船襲来候節谷合等江相建、多人数群
集之姿ニ奇術を用、右近辺江地雷火数多取拵、陸戦之用
意は勿論、昼夜台場等江出張、且町家之儀は病人老若は
勿論、家財等も当用之品迄残置、其余は都而遠村江為持
運、左候而元山崎江も当分台場築立最中ニ而國中備向日
々敵重相成、一統今哉遅しと待設候由、専取沙汰仕候得
共、只今迄は其儀も無之、然共長崎表之模様も有之、決

而近々可致侵入は相違無之向ニ承得申候間、此段御届申
上候、以上、

(有馬廣領)

但小倉領大里江先年より久留米様御船囲場地面御借入相
成、同所江去夏時分正親町殿御来着之砌より炮台等取
拵、久留米より上下へ式百人余出張、追々致交代、近

比ニ至り百五拾人程出勢相成候処、去十二日より同十
七日迄ニ相掛都而曳私、然ニ是迄備付之大炮凡十二三

挺有之、右は如何様俄ニ取除候儀不相叶欵、一旦預置
との事ニ而未其俣有之、左候而当分以前之通御屋敷在

番一人頭役ニ而、御船番人等より末々水夫共之家部纒
二拾軒程も有之候半、身軽者共と相見得申候、依而は

此節柄引取相成候趣意、何様候欵、旁之次第未相分不
申候、

子五月十八日
小倉滞在
園田彦左衛門

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三二二号
文書ト同文ナリ〕

1011 出水郷横目土岐新兵衛ヨリ藩庁裁許掛へ

肥後肥前長州諸藩ノ情況報告

當時

御国体を相伺候者は無之哉、且諸藩之動静取沙汰等之形勢密ニ相窺、殊ニ御領天草表之儀、浦々手広出入船等余多有之、人込之場所柄ニ而、何様子細等數者潜リ居候儀茂難計、端々迄も致探索候処、同所鬼之池と申所江去々成九月比より年凡四拾七八之者、士体ニ而差越、宿借受居候付、不審等數見受候者茂為有之由、然処去秋比一旦国元江立帰、致剃髪無程短刀沓本ニ而又々差越、当分名前を大道と相唱、同所ニ而妻を迎へ、同浦之中田と申所兼々材木類等致商売候場所ニ而、同所江折々差越板類等長崎辺江積送り致生計候由、尤最初より素生等不申聞由候得共、長州萩より差越居候者と、右妻より近憐之者共江密々為申聞候処より、尚更人々相疑、僻者等數致内

評候者茂有之由、外ニ長州より三拾四五歳と相見得候眼科、天草大宮地村と申所江差越居候付、手付置申候、

一肥後藩之儀、旅人等稠敷取締候由、基は六部体之者多年居付候由、然ニ子細は不相分候得共、追放相成候節、南之関と申所ニ而荷物等相改候処、肥後領分都而絵図面ニ写取、委敷書記致所持居候処より嫌疑を起シ、旅僧又は物質体は勿論、数年居付之旅人迄愆而追放相成候処、過半は天草又は長崎辺江差越候向ニ致取沙汰候由、殊更産物之他出を禁シ、就中穀物類は一切積出方等不相成様致津留等候由、

一肥前佐賀藩之儀、近比より大砲調練方毎日有之、間ニは大身家之面々甲冑騎馬ニ而、右城下より七里計之所江練兵之為遠馬有之、都合五百人計同装束ニ而、曉七ツ時より乗切、朝四ツ時は城内江馳戻リ候事之由、殊更人先ニ馳付候者江は褒美等之沙汰有之由、尤敵敷旅人を取締市中其外より城内江通融之橋々數ヶ所為有之由候処、右為取締外堀通融之橋々筋ツ、相残シ、其余

は都而取除、辻々江は番所相立候由、尤領内之穀物類等下料ニ而産物等他郡江売出シ候儀不苦由、殊ニ石炭焼物等は長崎江致運送取捌相成候由、

一長藩之儀、諸浪人を召抱暴議ニ募居候儀は世評通ニ而今ニ不相変由、然ニ未実否は分り兼候得共、大藩之大名六ヶ国位は同意合体之御方有之哉ニ取沙汰も有之由殊ニ去月廿日比松平下野守様(黒田慶賢)ニは御下国掛、長藩山口城近辺小郡と申所江御泊リニ而、長門守様江御面会之儀は実説之向ニ相聞得申候、

右通承得申候間、旅人等取締向之儀は、尚亦海陸共無手拔様嚴重申渡置、何扁無間断手付置申候間、為御見合此段申上候、已上、

子五月廿四日

琉球産物方掛

御裁許掛衆

文書原寸 縦一六・五糎 横二四三・七糎

出水方限諸所
旅人取締横目

土岐新兵衛

○1021 日本貿易新聞ノ幕府外交批評

二通

1022 下之関戦争記事

虚説

(朱)
「甲子」

五月廿六日下ノ関戦争

一五ツ時過西之方より上方を向阿蘭陀船小倉沖通船仕、凡六拾間計リ之大船軍艦共見請候程之船ニ御座候、此船下ノ関沖へ繫船仕、此船より大炮打立、凡式拾四発ニおよひ、(毛利慶親)長州様御台場より打立相成、双方大混乱仕荒増左ニ、

阿蘭陀船より打放候大炮下ノ関へ当り場左ニ、

一亀山宮之拜殿打抜、一同所下之御番所石垣打崩、

一南部之町綿屋某之土蔵打抜、一同所近辺之浜蔵二ヶ

所程打抜、一同所油屋某之家宅打抜、

一入江之丁山高キ寺有之、其寺へ打込申候、

一米千石程積居候松前船之由、此船之中程を打抜通し

申候、

一長州様御手船異国作之船下之関へ相廻り居候内老艘
打通申候、

右は何れも六貫目玉位之由承り申候、

一長州様御台場々々より打立ニ相成候大炮数発右之船
ニ当り候得共、格別之損所不見候、彼是と申内瀬戸
越申候時、檀之浦御台場より又々打放、是は余程大
成大炮之由、右之船へ当り候得共、船少々廻り候而
其内瀬戸越本山辺ニ繫船仕居候由承申候、

右之通誠ニ下ノ関大騒動、商家過半逃去申候、去廿三
日晝ニ阿蘭陀船江戸より下り掛ケ、下ノ関より大炮ニ
而打放、損所有之候哉其内長崎之方へ下り申候、毎々
其船之本船共ニ而は有之間敷哉と、とかくの風説不穩
何分事迫り氣遣敷時宜ニ御座候、此段御知らせ申候、

五月廿六日付

六月朔日之件

一六月朔日英吉利大船軍艦老艘下ノ関へ参り、戦争ニ及
ひ、左ニ荒増申上候、

一英吉利軍艦朔日八ツ時比上方之方より下ノ関へ参り

長州様御手船異国船造式艘繫船之所、両船之間ニ乘
付、両船よりも数々相放、英吉利船より数発相放シ
三ツ玉杯にて打立、長州様式艘之内庚申丸は入水柱
計見へ申候、老艘は蒸気船之由、供より打込、竈を打
破り散々之大破、過半入水、怪我人も数多有之由、

但し長州若殿様先日より下ノ関へ御滞留、昨日御
(毛利氏封)

乗船にて三田尻へ御出之筈ニ而、御船鏑付有之候
ニ付、此御船目当ニ打立候様相見へ、此許船陸路
之方へ逃候処追掛ケ追打数々打放、無事事大ニ破
損ニ御座候、若殿様ニは昨日陸路直ニ御通行ニ相
成候よし、

右之通にて、夫より英吉利船下ノ関地方へ寄セ打続ケ
にて、ノロシを揚ケ又々上方差而逃去申候、自然近海
ニ類船参居不申哉噂仕候、

一 下ノ関陣中より筑前様(黒田慶賢)・久留米様(有馬慶頼)へ長州様より御使

者、昨夜小倉大早打ニ而通行御座候、尤人数五人計

ニ而御座候、陣中胴着之俣白八巻ニ而通行ニ御座候、

右人数之内兩人は筑後水天狗(巻)之社家牧和泉守同類之

人ニ御座候、

一 小倉様(小笠原忠幹)ニは異国船通行ニは御構無之、強而妨仕候節

は打立ニ相成申候筈ニ御座候、右荒増御注進申上候、

引続大變、此末如何成行可申哉と案勞仕候事ニ御座

候、

六月二日

六月五日之件

一 六月五日辰刻過、仏蘭西軍艦式艘渡来、折節檀之浦御

台場目当ニ大炮打放シ候ニ付、御台場よりも数炮打出

し候得共、異炮烈敷、長州様勢セキ留難相成、追々操

引ニ相成、随而御台場ニ人勢無之を軍艦より見請、ハ

ツテラ八艘へ式百人余之異人乗込、筒類積入ハツテラ

より敵敷打立、追々地方へ乗付、前田村と申脇手ニ而

暫ク長州様勢と筒難合有之候処、長州様勢難叶引色ニ

相成、尚又長州勢少し色メキハツテラへ乍引打放し候、

玉引ニ当り候哉、ハツテラ四五町引退しヲ彼軍艦より

見請、俄ニ旗ヲ引上ケ長州勢ハツテラへ打放し候、筒

先目当ニ山間礮之間厭ヒナク軍艦より打立、長州勢數

多怪我有之不利、又陸戦之方ハ長州勢負色ニ成、長府

之方へ引退ク其跡へ異人共前田村江上陸、人家処々へ

火を指或は火矢を成、寺院一ヶ寺、四五十軒之処八軒

残候計、跡は焼失ニ相及び、尚又御台場江も異人乗込

御陣屋へ火を掛ケ焼失相成、丸三時余り戦争ニ有之、

異人大勝利ニ而小倉領田之浦沖へ暫時休息致し、夕八

ツ半時比迄周防灘之方へ引退候、灘中へ碇泊致し、尚

明日下ノ関へ仕掛ケ可申候由ニ御座候、双方共怪我人

少々有之、未相分り不申、尤長州勢よりハハツテラよ

り軍艦へ異人乗移之節、横合よりネライ打ニ異人三人

程打倒し申候事ニ御座候、誠ニ市中大心配申計不成、

差急荒々注進申上候、


六月廿六日出

尚々、今度異国之玉如図、

△目方式拾貫目程

〇

○ 此品ネシニテ中ニ小玉多ク入

右之通玉又日本同様之玉も相交り打付申候へ共、何分十六貫目より式拾貫目位迄之大筒、長州勢ハ六七貫目位之事故、異船へ玉当り候而も更ニ受付不申、又陸付ニ而異船より打候玉はニ而誠ニ短筒ニ而一発致し候へは五十程ツ、玉散乱致ス、所詮筒雑合ニ而は長州勢難及、扱々彼国之銘炮中々恐怖候事ニ御座候、

六月五日夜小倉出を以長崎表へ申遣し、長崎十日出書状写

六月五日辰刻比周防灘へ異国船式艘相見へ候趣、長府外浦より相図打有之、無程フランス軍艦式艘小倉領田之浦碇ヲ卸シ、内巻艘フレカット船と申候事、

一五日辰刻比田之浦沖合へ碇卸、無程田之浦へ両三人上陸いたし、同所方へ向放発不致候ニ付安氣致候様、長府先頃不意ニ打方被致候ニ付彼地へ軍艦差向候段田之浦之者へ申聞候趣、同日辰下刻比瀬戸内へ乗込不申、瀬戸より上へ上檀之浦御台場其外杉谷御台場へ目当放発致し候趣、尤檀之浦御台場より拾発計も放発致候船よりも数十発打出し之趣、檀之浦御台場長州勢足留り難相成、追而操引ニ相成候趣、随而御台場人勢無之趣軍艦より見請候哉、無程ハツテラ八艘へ式百人異人乗込、筒類ヲ積込ハツテラより打出し、追々地方へ押付上陸致候処、長州勢陸戦出陣、双方小筒ニ而前田村と申所脇手暫時筒争相成候処、長州引色ニ相成候趣、尚又ハツテラニも異人乗込居候を大砲ニ而放発致し候処ハツテラニ当り候趣、不叶ハツテラ五六丁も上へ引退候処、軍艦より是を見受候哉、軍艦俄ニ旗ヲ上長州よりハツテラへ打出し候筒先ヲ目当大砲打出し候処、長州勢も是ニ当り候趣、其外山々谷々より長州打出し候

筒先軍艦より目当ニ打出し候、陸戦の方ハ長州引色、

異国勢も引取候折柄、又々異国人助勢行逢、又一同ニ

相成取而返し、長州勢へ打掛ケ候、長州勢又引色、長

府方へ引取申候内、前田村人家異人共火ヲさし焼立、寺

老ケ所其外人家十五六軒も焼失、御台場へも異人乗込

御陣家へ火をさし是も焼失致し、凡二時計も戦争ニテ

異人ハハツテラへ乗組引取候節、長州下ノ関固メ之勢

横合より鉄炮打出し、四五人打通し候処ニ御座候、扱

又異人軍艦へ引取田之浦沖へ罷在、子刻比周防灘の方

へ引退、沖へ碇留メ致居申候、双方とも戦死之ものい

また人数不相分候、委細は後便申上候、已上、

六月五日夜

大虚説ニ付信スルニ不足

六月廿六日

長州赤間関湊へフランス軍艦三艘渡来争戦ニ及び候処、

長州侯よりも人数等差向発炮致し、右三艘之内二艘打取、

斬首三百級計、生擒八十人計有之由、一艘北去、長軍勝
利愉快之事ニ御座候、

七月三日

冊子原寸 縦二七糎 横一八糎 六枚

勤王誠義輩ヨリ尹宮へノ建白書

尊公御英傑を以

主上之柱石となし、薩長を羽翼とし、即今攘夷被行而は

幕府危事墨卵之如し、夫故様々奇計を以薩長を離間シ、

殊更(公知)姉小路の横死、統而誠義(美美)三条公初落京仕抔、誠ニ幕

府の幸ひ

主上ニは手足を御裁チ被遊たる同前、実以歎ケ敷、世上

挙而令感痛、尤長州之義先代輝元以来代々 勤王家筋、

当時猶更忠勇義胆之輩余多有之、幕府何様手を付而も少

も志を翻す者逆ハ無、乍然長之義御採用無之様申立、内

密一橋等相結度奸謀最中之由、一橋之義昨春攘夷御勅書

御受ニ而関東江下り、終ニ

叡慮通攘夷之義不相調、剩此節再上京、種々奸計を以長州を内密相結仕抹、言語同断之仕形、無此上重大之罪甚敷者ニ候、薩之義ハ

(寄敷)

尊公とハ分而御親ミ之事ゆへ、幕府奸計ヲ以二条閑白殿下其外役人等江莫大之金子賄ひ、終ニ此節島津不快ニ而帰国之由、薩は綿交易杯の振舞有之、富国強兵之術とは乍申、民之膏ヲ煎し候訳ニ而甚敷悪行、併一昨年幕府暴政盛候時節、諸侯江先登上京建白等いたし、將軍上洛ハ勿論、当時諸侯上京之義も専ら島津計ひニ而、爰に至らんや、且昨年国許戦争之砌、士氣盛ル事誠ニ日本之意地も顯シ候次第ニ付、勤王攘夷之義は少も不可疑、尊公も義士等か因循と雖唱、井伊掃部頭幕政之時節、相國寺江御囲ミ、世の人知る所何様申触シ而も、勤王攘夷之御志シ無疑、右様銘々現事顯れ候を幕府奸吏等か為ニいたされ、離間ニ及候次第、不遠又々五六ヶ年以前通攘夷ハ基り
主上ヲ始尊君ニも奉困上は案中、其期ニいたり御後悔無

是非、願ハ其処能々御熟考被遊、薩長両藩御親ニ、幕府

奸吏等遠け、即今攘夷之勅一日も早日相下り、奉安

宸襟候様御賢慮被遊度、伏而奉仰願候、幕府攘夷之義何

様唱候而も全く其志は無之、現然為相知訳ニも只今之機

会失ひ、武備充実之上杯との御所置ニ而は、天下雄士致

沸騰、終ニ御身之大変可致到来は案中、何卒篤と御勘考

被下度奉仰願候、

元治元年五月

勤王誠義輩

文書原寸 縦一五・五糎 横一四七・八糎

108x 備前少将茂政ヨリ朝廷へノ上申

太平山屯集田丸稻之衛門等ノ趣意書相添

一〇四六ノ一

備前少将

微臣茂政再拝頓首謹而奉歎願候、今般野州太平山江屯居仕候者共より封書差越、則披見仕候処、間々触忌諱候義

も相見申候得共、積年攘夷之

叡慮深々奉恐察、且

神州生氣之衰替と醜夷猖獗之侮慢を痛憤悲歎之余、不得止之情実より相発候義も被察申候、若事不背之茂政是非得失も不相解候得共、実父齊昭存生中兼々教示仕候尊王攘夷之大体ニ於てハ、少く耳底ニ存居申候故、昨年来上京之都度々々愚意献言仕、幕府江も屢意衷申述候義ニ御座候、然ル処於幕府無余義意味も御座候歟、

叡慮御貫徹之実効只今迄敵然天下ニ不相願、物議紛々、人心不服之趣ニ御座候、乍去当春大樹上洛之節、横浜鎖港之義猶又被仰出も有之、一橋中納言より御請も申上居候事ニ御座候得は、早々実効相立可申様取計候義と奉存候、折柄今度大平山之者共より申立候趣も御座候得は、此機会ニ乘し幕議も弥早急ニ相決可申候間、何卒彼等志願之通、

勅許被為成、幕府江 御沙汰被為成下候様奉懇願候、素より彼等草莽鄙野之小人ニ御座候得共、志情之切実ニ至

候而は大邦君子ニも不可恥義と不堪感激奉存候間、何卒彼等微衷之程 御哀憐被為垂被下候ハ、

朝恩深々奉感戴候義ニ御座候、依之右勅書相添此段奉歎願候、宜御執奏希入候、恐惶謹言、

五月

(池田茂政)

一〇四六ノ二

再拜稽首奉歎願、

(池田茂政)

侍従備前候閣下候小臣等草莽巖穴之小人分位を超過し

天下之御大計彼是奉申上候は、其罪不軽と奉存候得共(藤川齊昭)先烈公之教余に薰陶致、尊 王攘夷之大義と、 神州

ニ生れ候者ハ奴隸鬼僕ニ至る迄此大義を固持し、須臾も不可失墜之所以は、聊知覚仕候、苟も士林ニ列候者

乱危急之時勢を傍觀仕候事、実ニ志士之所愧ニ御座候、併抑当今天下之大勢を傍觀仕候ニ、日淪月沈滔々趨下

流候勢と奉存候、去年八月薩会之二藩設奸謀、(毛利慶親)長門宰相を陥れ、七卿を追

廟堂之正議を奉拒隔候罪、実ニ陷天之大悪ニ御座候、天

下之人同口ニ薩賊会奸と相唱、賊奸之名已ニ定候者

輦轂之下ニ横行仕、

廟堂之御大政ニ系縁仕候事不可解之一事ニ御座候、去年

来攘夷之

詔令數々御布告ニ相成候得共、今以横浜一港之鎖閉も不

相立及遷延、因循事不可解之二事ニ御座候、於幕府

君臣之大道御正し被遊、恭順之誠意御立被遊と御申立

ニ御座候得共、恐多も奉迫

玉体候、堀田備中守・安藤对馬守等誅戮削封之御沙汰も

無御座、高厦大屋ニ安座致居候事、所謂君臣之大道恭

順之誠意名実相叶候事理ニは無御座候、此不可解之三

事ニ御座候、右三事ハ天下之大倫大勢ニ関係仕候事ニ

御座候、是則天下之大勢日淪月沈浴々趨下流候事ニ御

座候、小臣等固より

廟堂之御大計を所奉伺得筋無御座候得とも、当今之形勢

ニ而は唯々

先烈公之遺訓、所謂尊王攘夷之道、地ニ落候事奉存

候、草莽巖穴之小人

廟堂之御大計を彼是奉申上儀は無御座候得共、

先烈公之遺訓地ニ落候と奉存候得は、焦心裂腸所難耐

御座候、乍然小臣等如何様苦心仕候共、单身微力を以

先烈公之遺訓を継述仕候儀ハ固より其任ニも無御座、

其人ニも無御座候、只々臍腹存込候ハ一身之進退出就

先烈公之遺訓を失墜不仕候様仕度奉存候、就而は一死

之外無他事覚悟仕候、何分此上ハ攘夷之先鋒と罷成、

勢力横擧、醜夷之陣營ニ討入奮死仕、忠義之雄鬼と罷

成、奉拝謝

先烈公在天之靈候事、小臣等之分ニ御座候、随而同志

之者相謀、為攘夷祈願、日光山

東照公之御廟前ニ参籠仕罷在候、乍然叩動干戈檀ニ為

私闘之所業ニ落入候而は、於大義上嫌然不仕候間、何

卒攘夷先鋒之

勅許之奉捧度、懇願ニ御座候得共、

九重之天攀外ニ路なく、空しく巖穴之下ニ愁泣仕候而已

ニ御座候、伏惟

閣下は我

先烈公之御血統ニ被為入、且大邦ニ君臨被為有、大義

天下ニ顯明致東西奉湯仰候、就中於小臣等乍恐我 君

公同様奉仰候より、誠に唐突之至ニ御座候得共、不願

非分冒鉄鉞之誅奉願候、何卒

閣下之御不棄を以攘夷先鋒之

勅許を奉捧候様御周旋被遊候様、万死奉懇願候、小臣等

固より草莽巖穴之小人、非分之願請罪無所容候得共、

先烈公之遺訓地ニ落候と奉存候得は、只々憤慨愁悶、

神乱氣錯、非分之事も忘却仕、

先烈公遺訓之片端も奉伸度心腸而已ニ御座候、伏而願

くハ

閣下小臣等之重罪を御寛有被遊候、微忠小志を御^(懇之)懃察

被遊候、攘夷先鋒之

勅許御願請御周旋被遊候得は、千謝万感不堪鉛草之思候、

冒万死奉待罪日光山之

廟前候、誠惶誠恐謹白、

元治元甲子四月日

田丸稻之衛門

直允

藤田小四郎

信

竹内百太郎

延秀

岩谷敬一郎

信成

岩 立 忠 叔

侍從備前侯閣下

冊子原寸 縦二七・六釐 横二〇釐 八枚

1014 重野厚之丞探索雜記

長藩、岩国、芸藩、長崎、筑前、熊本、幕府

因州、津和野等

〔表紙〕
〔雜記〕

長藩

(実表)

一 四月三日、前田台場ニ於て而発砲操練有之、三条卿以下之公卿方中山侍從下之閣越し相成前月下句より五、私卿下之閣御滞在

義当日田之浦ニ罷在、芽刈明神之山上ニ登り見物仕候処、公卿方は赤色之御装束、騎馬ニ而御往来、兵士も多勢有之、下之関辺より見物人群集、発砲之形図面之通、

一 三月廿八日にハ檀浦台場発砲為有之也、其砌も五卿御越し相成候、檀浦より放ち候砲丸芽刈明神山之小倉台場ニ当り、土手をしたゝか打崩し有之候跡一見仕候、

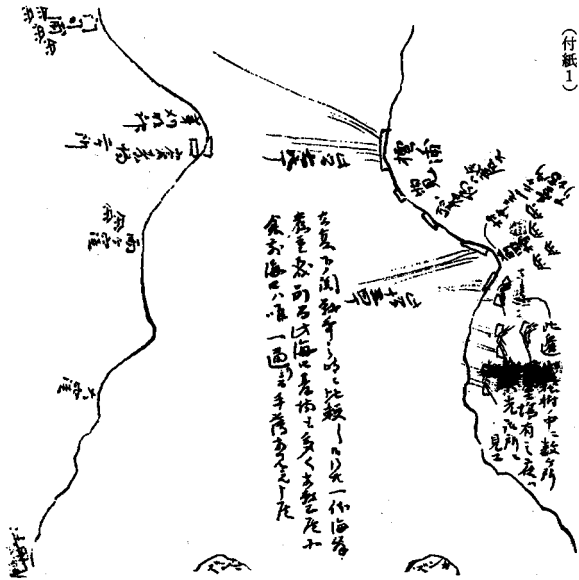
一 四月中旬比ニも候哉、檀浦より豊前地門司浦人家江向ひ大炮を放発し、大弾老ツ民家之築山ニ打込候処、長藩より為何挨拶も無之、小倉よりも咎め不得、其假打置候由、

(真木外記)

一 三月中旬比、筑前周旋方白水 白・北岡秋平・戸川惣右衛門之三人、岩国を通行ニ而長藩江罷越、致説破候趣、我々式国家之大事を彼是致口入咎ニ無之候得共、

聊愚見之主意も有之、殊ニ此節一橋公より内々御申合め之義も承知仕、態々罷出候、前年已来長藩勤王攘夷之事件一々感服仕事ニ候処、昨秋大和行幸 御親征之儀長藩より建白為有之由、右一事計り一統合点不参、万乗之 至尊を奉動揺、 叡慮不被為安而已ならず、錦旗を翻し違勅之罪を問之御企も為有之由、左候へは攘夷ニ而は無之、攘幕と可申欤、方今外夷之事緊要之折柄、内変を醸出し候而は、勤王之主意ニも相当問敷其地長藩過暴之事件は抑小事ニ而、不足深咎事と存候得共、右大和行幸并攘幕之両条は長藩之御失挙ニ而は無之哉、左あれハ此節御召ニ被為応速ニ御上京有之、天幕江可然様御詫義之当然たるへき旨 一橋公よりも御内沙汰ニ候段相演候処、其節長藩応対之者何某これ藩人、其難渡し、最初より逐一承届一言もいらへ無之、低頭平身如何にも承服之体ニ而、篤と致承知候、一同申談し候上可及御答段申述候ニ付、三人は仕済したりと内心悦喜罷在候処、翌日右応対ニ出候者又々面会、此節

(付紙一)



は打替り横柄之為体ニ而、頭を擡げ声を荒らかにし、全体真の 叡慮を蒙り候へ、幕府と長藩と孰れか多少あると被相心得候哉、大和行幸之企は欲する所ニ無之候得共、天下之因循奥の手に不出候而は夢さめ不申、

尤攘幕など申事は差而無之事ニ候趣一通り申演、座を立引入候ニ付、三人の者も無致方罷帰り、再び岩国江通り、右之仔細相晰候由、

(付紙二)

「山口城ハ凡十町四方之経営ニ而、四方土手を築き、

其上ニ四方台場構相成、建物ハ漸二歩方位調、其余中々急ニハ調不申趣、城中ニは宰相様御父子御夫婦迄之御住居、御家中は城外江追々邸造ニ相成筈、六卿之内三条卿ハ別館を建御住居、其余ハ寺御住居之由、

右四月十二三日比芸藩より津和野并山口江為忍候町人広島江罷帰相届候趣を、芸藩宮田権三郎より為知来候ニ付、致拔萃置候、尤其時日迄ハ山口辺差而為相変義も無之由、」

(黒田勝賢)

一筑前世子君御事、四月十七日広島御通行ニ而、廿日市と申所御一泊、芸藩年寄役辻将曹於御泊拜謁、十八日岩国御通り吉川より本家御周旋之段礼謝有之、猶又可然御取成被頼入候由、私事廿一日岩国江差越、大草終吉

(幸徳)

致面会候処、今日は本家下野守様と御面談之日積り候得共、前条三士遊説之始妹を以致推考候ニ、迎も御説論行れ候義は無覚束と終吉噺居候、

一 四月廿一日、長門守様小郡江御出張ニ而、下野守様江(毛利広封)

御面会御懇話被為有之、廿二日にハ六卿之内御老人三条

卿ニ而ハ、御逢相成、下野守様ニは小郡江兩日御滞在廿四日小倉御通行、御帰国被為有候、右兩日之御面談色地

未相弁り不申候、

一 筑前世子君小倉御通行之砌ハ、彼方重役之人小倉藩重役江面会いたすへぎとの義、御行列先より前広為知有之、小倉藩ニて其用意ニ而御通行相待居候処、当日ニ至り為何沙汰も無之、御通行相成候段、長藩への聞えを御憚り之故欵、若も小郡御応対為差訳も無之候ニ付他藩面会御取止共ニ而は無之欵と、小倉藩寺社町奉行上条八兵衛噺、

一 下野守様姫路御泊之日、御国元一変、牧一内被殺害候(真木和泉)飛報到着ニ而、兩日位同所御滞在、始は姫路より舟行

之御手当之処、変改ニ而陸路御通行と相成、御荷物は船ニ而御身すがら御兼行、黒田山城は世子君より一日前罷通り、御帰途は御供之由、牧一内嫡子何某并白水白なとハ姫路より船ニ而帰国、白水ハ一内実弟之由ニ候、

一 下野守様岩国御通り之折、吉川より被申入候ハ、当分不穩時節御道中念悪敷奉候ニ付、当所より御舟行可然欵、若必陸路之御手当ニ候ハ、当家筑前様(黒田齊博)とハ旧来御別懇之御事ニ付、乍不及当家人数差出し御行列之末ニ相加り候様仕度旨被相伺候処、其義は御断相成候得共、それより御行列嚴重相成、切火繩実丸ニ而長州路御通り、御帰国迄同断之由、

一 昨年来長藩之士大夫異論を挟ミ候迎居被申付候もの誠ニ多人数之由(惣而彈正処)、依之唯今ニ至り候而は一藩服従之姿ニは候得共、胸中は于今十分ハ参兼候と岩国家中内話、

一 長門守様は御英資とハ不被伺候得共、益田彈正などよ

り申出候義を無闇ミに御信用、直様御発行相成候ニ付
今日之事態ニ成立候向御座候、

一益田弾正人品格別才略逆は無之候得共、一体胆力強く
堅忍不拔之氣象有之、終日終夜致端座、幾日ニ而も人
と応対いたし勞倦之体不相見由、其他福原越後等は全
ク庸才凡童と岩国人嘶し、

一英国龍嶺江長藩より五人昨年密々差遣置候段、於岩国
高杉新作長藩暴論直咄しいたし由、

一長人柳井謙蔵(御井之)山県謙蔵ともいふ長崎表江大炮買求方として、先達
而より差越居、久く致滞崎候由、外ニ青木軍兵衛是も
長州より入れ置、此者ハ混と夷館江致出入候由、笹山
藩小野田悌弼寒院江多
年罷在候者咄し、

一備後鞆津江罷越候処、同所辺へも長藩より探索人入れ
置、先日迄ハ早船之船頭ニ而致往来候者、遽カニ帶刀
ニ而罷越居候と土地之者共咄合居候、就右相考候ニ諸
湊之探索ハ専ら船頭類之ものを相用ひ候義と被相察候
一長藩ニ於て角力取を兵隊ニ召入れ、力士隊と唱へ候、

右之者共先達而京撰江多人數罷登り候由、就右京師御
邸中江致出入候角力取之内、監察を不被為加候而は相
叶間鋪と或人頻ニ掛念仕候、

一奇兵隊之給分、近来尅ヶ月長州札尅奴八
拾文替ニ而三拾奴ニ
減少相成候由、於小倉上条八兵衛より承及候、

但最初は式両宛ニ候処、其後漸々減少ニ而尅両尅部当三月比
位ニ相成居候処、長州札三拾奴ニ而は余り減し過
候様相聞得候得共、小倉は近隣之場所、殊ニ役筋

之者儘成直咄ニ付録之、

一長藩人小倉江罷越、小倉城下新築之台場致一見度申入
候ニ付、未大砲も居へ付不申候間、惣成就之上はおの
つから可掛御目段相答差返し候由、何そニ事寄セ小倉
ニ踏入り、御国之動靜を伺察之向候と小倉藩人嘶し、
一長藩対州と親交之義は、小倉辺ニ而も専ら取沙汰承及、
先日御届書ニも申上置候通、兩藩互ニ声援を成ス而已
之事と相考候処、芸藩役筋之人々用人金子
徳之助孫嘶ニ、長藩
ハ朝鮮国を攻取根拠之地といたすへき之内存有之、別

而対州と相結候と申事ニ候、全体芸藩より対州へ御入相成候御婦人様、江戸表より御引取掛芸藩江被為入候処、長州道不通行ニ付当分広島江御滞留相成、御付之対州人も罷居候由、左候へは右朝鮮国を攻取之説は対州人より相洩れ候義ニ而は有之間敷哉と愚存ニ御座候一越後長岡之処士長谷川鉄之進江戸町儒者朝川善庵門人ニ而古学者ニ候処、此已前岩国江参り候事有之、其節は専ら經濟を主とし、幕府を称賛いたし候処、去冬十一月比讃岐之処士兩人召列れ、再び岩国江差越し、此度打替り慷慨勤王を唱へ、岩国本藩と不和熟之義口を極め忠告いたし候ニ付、岩国家中義理も当然ニ服し候体ニ持成し、内心にて前後持論之格別相変候段不審罷居候処、三人はそれより長藩江差越、奇兵隊ニ入り候由聞及候処、当正月ニ奇兵隊脱走之触れ有之、長谷川三人之姓名相見得候ニ付、扱こそと手を拍候、幕府間牒之手段は驚入事ニ而、猶此外今ニ茂相残居候半と岩国藩士致笑話候、

但此等之話頭口氣を以相察候而も、岩国本家と異論之義は相知れ可申欵と愚案ニ御座候、

岩国

一岩国家中大草終吉先年江戸昌平館ニ而存知之もの候処当分君側相勤、侍読を兼候而頗る寵遇を得候由、四月廿一日私広島より岩国江差越、終吉江面会之義申入れ候処、即主人之聴ニ達し、終吉を呼出し本家一条ニ付可承仔細も候ハ、聞届可置段申達し、当夜岩国城下江一泊相許し、翌日は新湊迄終吉見送り、同所江一夜同宿、これも主命之由、全体城下へハ旅人一宿たり共不相成藩法之由、

一前条通内々主人申付ニ依り、本家一条岩国如何可致処置哉と頻ニ終吉尋問いたし候ニ付、兎角本末之御分際有之上は本家江反覆御忠言、天幕江可然御周旋義之当然たるへき欵と相答候処、其義は逆も出来不申、天幕江少しニ而も手を入れ候へは、則本家之機嫌ニ逆

ひ咎目を得候振合にて、中々意見忠告など申事ハ夢にも行れ不申、昨年九月監物京師より引取掛本藩江差越其節は自身ニも供いたし候処、一日宰相殿監物旅宿へ被參熟話有之、其節主人監物ニも少々いたされ候事柄有之、此義は他藩之御方へは難致口外、借其後段々監物を呼候得共一度も不罷越、使者差遣候而も不致直対候、尤唯今天幕江致周旋候ハ、いつれ之筋是迄之罪過を申謝する之外有之間鋪候処、罪過を謝する之一義則本家之主意ニ無之候へは、迎も本藩之事ニ就而は岩国いたし方無之と、終吉ニも致歎息候、

一旧冬末比福原越後外ニ兩人、いつれも八家之内執政之輩ニ而、用人前田何某も一所岩国江差越、其節は監物対面有之、本家より申込候にハ、此度人数八万人召連れ登京いたし度心組候間、岩国ニも供可被致との趣ニ付、いつ何時ニ而も御供可仕段監物即答ニ而、素より本家之虚喝心中ニは篤と欽込候間、彼是右三人を愚弄し差返し候由、

一年内より長藩人数岩国城下へ差越居致町宿、長々不罷歸候処、当春二月中旬比惣而引取候由、滞留中宿屋ニ掛置候高張挑灯を岩国家中切倒し、或ハ玄喚前之飾筒を岩国家中之者共通り掛、売物ならんと直段を聞候事共有之、始終本家を圧倒するの氣象候由、広島河野金藏嘶しニ候、右金藏は芸藩より岩国江時々探索として差遣すものニ御座候、

一吉川監物人柄余程英明之聞得有之段致称賛候処、英之字ハ無覚束候得共、明之一字ハ不足有之間鋪と終吉返答ニ候、監物年輩当年卅六歳、身体は少し虚弱之方ニ候間、養生ニ射術可宜と存し候付、折角射芸相勧め候と終吉嘶し、

一岩国より一手之人数下之関出張被申付、四月初旬差越候由、用人老人・物頭老人・士分拾人余、足輕三拾人上下惣而六七拾人と申事ニ候、右は吉川家本藩之事ニ付、全く不都合寂然罷居候ニ付、何欵な一トゆすり動かし、塩味を試るの手段ならんと吉川相心得、早速申

付之如く人数繰出し候由、

一幕府より吉川御会釈近来ニ到り訳而御丁寧ニ而、板倉防州氏よりハ時々御内達之趣も有之由、長藩よりは是迄全ク陪臣之会釈候処、是も昨年来三末藩清末・徳山・長府に準

し候取扱ニ而、事柄ニ依り候而は三藩之格より一等上ニ出候義も有之候、其外芸藩近日別而御懇心之由、筑前

家ニ於ては旧睦之故を以諸事互ニ御引合相成由ニ候、

一岩国全国西は柳井長州領之境より東は芸州堺迄、凡拾貳三

里、拾六七万石は可有之との見積り之由、其内柳井六万石、平地多く頗繁榮之場所ニ而、柳井縞とて木綿之

名産を出し、諸方商人入込居候、此処は長州領室津江接近し、長州人不断入来いたし候向ニ而、私滞宿中も

奇兵隊と申様之もの数人酒店ハ参り合候を見請申候、

一大草終吉嘶ニ、僕之志願ハ何卒三拾万石位之領国を得、

十分政事取扱度、何分小藩ニ而は致方無之と、段々致

歎息候、右は全ク席上之笑話ニ候得共、此口氣ニ而岩

国之趣向可致推察と、内心領得仕候、終吉外ニ藩士両

三人面会、其内森脇(栗田)一郎右衛門と申者なとハ、門閥ニ

而用人位相勤候家筋之由、いづれも持論は同様ニ御座候、

芸藩

一芸藩ニ而は金子徳之助旧知之事ニ候間、先此人を相尋

候処、当分用人勤ニ而学館を惣裁し、老儒之事ニ而君侯初め一藩尊信之様子ニ御座候、徳之助嘶ニ、当藩之

義是迄長藩と致一味候哉ニ専ら幕府之御嫌疑を受、甚迷惑之事ニ候処、近日ニ至り其御疑稍々相晴れ候哉ニ

被相伺、仕合之義ニ候と相咄し候、

一金子宅ニ於て彼藩小姓組と申役人数輩致出会候、右小

姓組は政府之書役ニ而、先ニは專權之職ニ候処、近年君侯御親政と相成、君側より執政被申付候ニ付、小姓

組之權威薄く相成候由、

一芸藩役順

一家老三人世禄より相勤

一中老二人軍事を惣裁ス

一番頭軍事を支配ス

一年寄七人 一用人 一側用人 一側頭

右之内家老・中老は門閥ニ而政事之権無之、番頭も同様之由、年寄を執政と唱へ、拔擢ニ而相勤、是迄ハ用人より経上り候義旧例ニ候処、近来君側より出格登庸之者も有之、君侯親政と申処より右様相変し候義と申事ニ候、

一芸藩当侯は先温厚之御性質、世子君余程之御英才と岩国辺ニ而茂専ら称誉仕候、

但山陽道ニ而因侯(池田慶徳)・芸の世子君(吉川経幹)・岩国領主、三人之

明主と風評承得候、

一芸侯御実父右京大夫君、竹の丸様と申ハ先侯之御叔父(浅野長訓)

ニ被為当候、右竹之丸様ニ四人之御子有之、第一当侯(浅野慶徳)

第二内記君、第三式部君、これ当世子君之御実父、第(浅野慈昭)

四美濃君中老、世子君は当侯之御姪ニ被為当候、世子

君御実弟も中老職御勤候由、都而竹之丸様御血筋ニ候、

猪竹之丸様事御正嫡ニは不被為成候得共、芸藩一統帰服仕候御方ニ而、当侯御幼少之砌、御家嫡ニ被成御成

或時御遠馬之途中藍葉を刈干し有之候を何と申ものそと御尋あり、藍葉とて衣服を染め候草ニ而、百姓共別して骨折作立候と御答申上候処、然らハ行列中踏荒さゝる様可罷通と命令為有之ことを、御実父竹之丸様御聽ニ入り、かりてほす藍よりいてゝあいよりも猶色ふかし君かめくみハと御詠吟為有之由、

一芸藩政体是迄別而散漫無紀律と申様候処、当侯御代ニ

相成頗引締候方ニ相赴く模様と、岩国ニ而取沙汰仕候、

一金子徳之助斬ニ、当藩之義は四通五達之地形ニ而、余

り便利過ぎ、兎角士氣遊惰ニ趣き易く込入事ニ候と致

歎息候、一体上下酒色ニ耽り、遊楽ニ日を送り、終ニ

困窮ニ至り候向と相見得、町人之権重く、士大夫腰を

折て商賈を拜する之勢、町家豪富之族も先年紙幣之崩

れより大損耗(耗カ)ニ及び、上下今日之困窮と成立候様子ニ

御座候、

一芸藩御国と御交易一条ニ付、暴論之輩種々雑説取拵、

弥交易不取止ニ於てハ、尾の道・御手洗之両港可焼払

と於大坂致張紙候段相聞え、芸藩ニも内実恐怖之人も有之哉ニ被相伺候、

長崎

一勝麟太郎氏事、四月四日長崎発程、六日方ニ熊本城下
通行、手付坂(坂本龍馬)下り了馬を以熊本藩横井平四郎方江立寄らせ
せ長崎江差越之節も、於長崎夷人応接相済、長州江軍艦
差向候義は今二ヶ月差扣候様熟談相遂、勝氏ニは関東
御用ニ付出京之上、東下之賦候段申述候由、

一前文通勝氏説ニは二ヶ月猶予之筋候得共、長崎通詞三
島末太郎より熊本藩役筋への届書左之通、

四月九日長崎仕出し三島末太郎より熊本への届
書、同十三日熊本江達ス、

和蘭軍艦一隊日本海江出張、右三艘之内メデユサ艦
昨秋下ノ関通行之折同所炮台より無故炮弹を発し、

船中所々打破候故、水夫等手負或は及即死候間、今
般我国出張之船々申合、一先江府へ罷越、夫より一

同下関江進発遂一戦、同所江和蘭国旗相立候旨、メ
デユサ船将デカーセンプロート名、ジャンピー船将
ペーアーファンレース名申出、メデユサ船は当月四
日、ジャンピー船ハ一昨七日当湊退帆仕候、

右通ニ候へは勝氏説とハ全ク相違いたし候と相見得、
唯今比は横浜表談判最中ニ候半、勝氏東下之命ハ、右
談判のため共ニ無之哉と被相察候、且右文面ニ下之関
江和蘭国旗相立との文言を以致熟察候ニ、馬関を攻破
候上は其地を埔頭と定め永住之心組ニ無之哉と、横井
平四郎晰し、

但下ノ関ニ互市場相開き度との義は、先年三港御免
許之比夷人より願出候事有之、右旁々を以推計い
たし候ニ、彼地は素より夷人所望之場所ニ候へは
国旗を立るの文言は決而仔細あることならんと申
事ニ候、

一二月三日長崎表より芸藩江届書之内ニ、兵庫開港為催
促喚国士官十五人蒸気船より当港江参着、直様横浜江

向け致出帆候由相見え候得共、其後如何成行候哉絶而不承及候、

筑前

一 牧一内逢殺害候一条は、先日御届書ニ申上置候通御座候処、其後之次第猶又承合候ニ、一内義は専ら黒田山城同党之者ニ而、頗ル才智有之候得共、威柄ニ募り新政を行ひ、在々村々に郡代之外ニ監察様の役人を入置名目は仁政之唱えニ而実は聚斂措克百姓を妨害致し候処より、一統不気受相成、其余憎怨を招く之事共種々有之、終ニ右次第ニ及候由、偕同人被殺候後も福岡城下ニ毎夜張紙有之、奸党之役人名指しニ而掃除之事書記し為有之由、左すれハ一内を殺し牢屋を破り候党類等は城下ニ残り居候と相見え候段、福岡人より承之、

熊本藩

一 熊本亮之助公子ハ、藩中末々迄称誉仕候、当時二之丸江

御兄弟様被為入候、此節御帰京之義も全ク 御国様思召御同意ニ而、御暇等御都合相成候と、藩士共密ニ申合居候、忽而熊本藩ニハ 御国様江心服之情態と見請申候、

一 熊本君侯中将御任官、筑前様宰相、下野守様少将御昇進之由、奉承知候、筑前御父子様御任官之義は、下野守様御着城之当日飛報御到来之由、

幕府

一 和宮様御事、御懐妊ニ而近々京師江御越し被遊之風説、広島辺ニ而専ら取沙汰仕候、

一 大樹公此際御下問無之、江戸城御経営も暫時御見合被仰越候なと世評ニ御座候、

一 外国奉行池田筑後守・河田伊豆守・御目付河野撰津守

之諸国江被差向、当早春支那上海江滞在、先達而芸人長尾浩策と申洋字を支那より罷帰、右幕役方愈彼地被

罷居候と直話承得候、

一 四月二日、(酒井忠徳)雅楽頭殿御渡し、

大御目付江

真田信濃守家来

佐久間修理

海陸御備向掛り手伝御雇被仰付、御雇中御扶持方

式拾人扶持御手当金拾五兩被下候、

一日田御代官窪田治部右衛門氏事、全体熊本藩江戸定府

江口弁蔵と申者ニ而、代々柔術師範之家ニ候処、同人

実兄罪ありて藩法ニ被処、家内暇ニ相成、弁蔵にも邸

中を立除き、川路左衛門尉親類ニ付此人江手寄り、幕

士之株を買致出身候由、然処或時閣老板倉防州・水治部野泉州之内

右衛門を御召しにて、極内被仰含候へ、其方事御当家

のため身命を抛御奉公可申上、兼而素志有之由聞及候、

愈左ニ候哉との義ニ付治部右衛門事新き仰事無申上迄

事ニ候段及返答候処、其義ニ於ては当時新徴組之巨魁

清河八郎、浮浪之頭取として官家を妨る者候ニ付、其

方手を以相除き候手段有之間敷哉との義ニ付、治部右

衛門御請申上、無程八郎逢暗殺候、仔細今般熊本藩士

より承及申候、全体窪田氏は熊本素生之仁ニ而、当分

幕役と致出頭候ニ付而は、本藩ニ而悪様ニ申成すも人

情之常、虚実は如何と被存候得共、いかにも仔細明了

ニ而、全ク巷説とも難申、殊更日田は御領内傍近之場

所柄旁御見合ニも可罷成と奉愚存、承得候俣相記し申

候、

一 右治部右衛門氏先日天草巡見有之、島中頭立之者共を

召寄、当島は肥薩之間ニ挟まり、要枢之地形候間、万

事其心得ニ而可相励、尤当秋迄ニ壮士五拾人精選いた

し、血誓為致可召仕と申論し候由、天草ニ而は未曾有

之号令ニ而、皆々恐愕罷在候由、

因藩

甲子正月松平相模守様御建白

一 微臣慶徳去冬奉蒙 勅命候ニ付、就而は速ニ登京可仕

答ニ候得共、伝奏迄及言上候通り、痛所今以在苒罷在、迎も旅行仕兼出京延引仕候段恐入奉存候、折柄御下問も無之儀猥ニ及建言候段、其罪不輕候得共、昨夏上京已来実ニ蒙非常之 恩寵、段々 朝 御直命をも畏候義、尚更日夜 九重之御儀不堪杞憂、区々之愚慮寢食をも不安、尚又申上候、抑去秋已来何迄も億兆之心朝議御動揺被為在候様、奉疑模様無之共難申、於臣慶徳は 朝議今更御動揺無之御事とハ奉存候、其訳は先達而在京之砌、参 朝之節度々大臣両卿江茂親ク奉伺候処、於攘夷は 叡慮確然無御撓趣、尚一橋中納言江八月十八日已前御沙汰之通、攘夷之義精々尽力之様可申通旨、以伝奏被 仰出之趣も奉畏、且勤王之諸藩憤発不待幕命可及掃攘等之 勅命も蒙り、其後阿波侍從等^{（繪須眞茂也）}詰合之諸藩江毎々東下攘夷之義尚又御催促之御沙汰も有之、引統有栖川帥宮御下向之御内意も有之候得共、其内於閩東攘夷之談判取掛之趣言上相成ルニ就而は、暫時其義も被止之趣、幸老中酒井雅樂頭上京ニ付而ハ

尚又嚴重之御沙汰ニも相成候欤ニも奉伺、一橋中納言登京之儀被仰下候節も攘夷談判之模様被為 聞食度との御趣意、且又大樹上洛被仰下候節も、万一留守中鎖港攘夷之談判相弛ミ候而ハ、以之外之義ニ被思召候ニ付、可然人体ニ委任致置キ、攘夷之 叡慮ハ必貫徹被遊度様御沙汰之趣茂奉伺候得共、 叡慮御動揺無之義は深奉畏候、然ル処、前文之通御動揺被為在候様、紛々伝聞仕候、是全不知実者之妄言とハ奉存候得共、万一右等聊ニ而も 朝議御動揺御座候而は、自然天下之士民 九重之深淺を窺解体仕、既疑者益疑を生し、遂ニ不信 朝命様可罷成、畢竟列藩より草莽之士ニ至ル迄踊躍奮発仕候義も、 至尊之 聖徳を奉感戴、補相之賢徳ニ鼓動セラレ候義ニ御座候処、此節ニ至り攘夷變而若シ開港と相成候様有之候而ハ、乍恐天下之銳氣此より相撓ミ候事と、深恐入奉存候、是迄毎々言上仕候義、改而申上候ニ茂不及候得共、民無信不立、一旦攘夷之義期限迄茂布告ニ相成、加茂八幡江行

幸御祈願被為在候程之義、且攘夷之義被 仰出候以來、
入水火踏白刃其為ニ殞命者幾千人ニ及へり、左スレハ
万一 叡慮御動揺ニ相成候ハ、神怒り鬼怨ミ、随而間
闕流離之者も亦愠可申、迺も人心居合候期有御座間敷
奉存候間、何卒攘夷之 叡慮御貫徹ニ相成、天下之人
心一和一致仕候様不堪至願候、人心一致仕候得ハ武備
不整御座候共 神州之御大事ニ付、何卒御心を被為留
度奉存候、且三条家始七人并ニ長州家、蒙 勅勘候義
ニハ可有之候得共、攘夷 叡慮遵奉苦心仕、既ニ掃攘
之魁をも仕候程之義、若シ寛大之御所置ニ不相成候而
ハ、攘夷之先鋒たる長州すら御蔽罰を蒙るニ至り、唯
因循姑息之優るニ不如と、人々の存込ミ、天下之銳氣
相撓ミ可申欵、尤家来之者共ニ於てハ、粗暴過激之振
舞も有之哉ニも相聞え候得共、畢竟父子攘夷決心仕候
より領内之人民相化シ、奮勵決死中ニ茂少年客氣之輩
間闕流離之徒ニ至候而ハ、粗暴之所行ニも相及候義欵
と奉存候、勿論其罪可有之候得共、前文申上候次第旁

書狀之始末弁疏之為め、此頃家老近畿迄差出候得共、
入京堅御差留之趣ニ而、進退実ニ極候趣承及候、右等
之御所置ニ相成候而ハ、大膳大夫父子ハ恐入候而も、
領内之人民痛憤難黙止、少年若年之輩間闕流離之徒如
何様之變動相起候義も難計、自然及紛乱候而ハ御取鎮
も中々不容易、且内地之變動夷賊は素より待処ニ御座
候得ハ、求而彼か術中ニ陥、神州をして渠か有となら
しむる理ニ当り可申欵と憂慮仕候、乍恐万一 皇國中
内乱起り候而ハ、攘夷之一条如何可相成哉、攘夷之義
より事起り、却而攘夷之妨と相成候而已ならず、益
皇威之御衰微ト可相成候間、三条家以下勝手ニ出奔之
罪、長州之藩過激之科ハ一応御正シ被遊候共、何卒攘
夷先鋒之功ヲ以被免候者ハ人心居合可申欵と奉存候、
右言上之趣必シモ曲テ彼等を相救候ニハ毛頭無之候得
共、実ニ天下安危之機と奉存候ニ付、難黙止不顧不肖
言上仕候、臣慶徳前文之次第不幸病褥ニ罷在、上京難
仕、無抛以書取奉申上候、微忠之旨御採酌之上、可然

執奏奉希候、恐惶頓首頓首謹言呈、

正月十日

慶徳

先鋒之功を以、寛大之御処置ニ相成、三条家已下帰京
長州入京を被免候ハ、人心居合可申候、

右は去秋已來第三度目之御上書と申事ニ御座候、

一 因藩土肥健蔵於京師正議会を創め、人数を会し発問等
を出し、論策を相集め候、正議会一名は攘夷会とも申
す由、水戸・加州・備前・因州・筑前・藤堂・津和野
等之人数初会より出席之由、

津和野藩

一 亀井家藩中江示之写

甲子四月

方今天下之形勢深く御苦心被遊候ニ付、御存念之趣公
武江御建白可被遊旨、先般被仰出候処、当節 皇都之
御模様鎖国之御治定相成居候得共、拒絶之次第は相立
兼候趣、夫を被差置 御邦内鎖々之御評議専ニ相成候
故、攘夷之御実行は益遅々に被為及、積年之 叡慮不

致貫徹、物価沸騰、万民之困苦相重り、 皇国疲弊之

極ニ至るへくと、日夜被遊御慷慨候折柄、從 朝廷長

州御末家并御家臣等を浪華迄被召寄、猶從幕府も御同
様之御沙汰有之候趣、依而は御糺問之上御評決之趣ニ

寄候而ハ、忽擾乱を醸し 皇国御大事之場合ニも至り

可申ニ付、長州御末家始弥御発途之趣被遊御承知候得
共、急速被為遊御上書、御寛大之御所置ニ相成候様相成
丈可被遊御周旋思召ニ被為在候処、於長州度々被蒙
勅使候段御恐縮之廉を以、此度御父子之内御上京之義
御歎願有之趣、就而は此上 御沙汰之御模様ニ寄候而

は、天下之争乱内憂差起候義は眼前之事と、実ニ不被

安御寢食被遊御苦心候、聊被為尽御忠志も此時之御義

と被思召、 公武江何卒御包容之 御沙汰被為在候様

被遊御懇願度、依而は長州江公然と御使節を以、右御

主意被仰遣、彼御方御承服之上は、速ニ御家老を御使

節として被差登、御建白書被差出、御尽力御周旋被遊

御存念ニ被為在候、尤右之段は芸州浜田へも被為仰遣

候思召ニ有之候、太守様御登京之御機会無之、一応鬼波半藏被召登、其趣ニ寄り早く被遊御登京候御舍ニ被為在候、元來御藩中一和ニ無之候而は、諸事難被行候ニ付、前件之御次第猶此度御建白書写拜見被仰付候間、御主意夫々篤と恐察可有之候、已上、

四月

多胡淡路

公辺江建言書

方今不穩之形勢、外夷一条而已ニ無御座、殆御邦内切迫之姿ニ相成、何共恐入候御時節と奉存候、乍不及苦心仕候、此節長州末家并重役之者浪華迄被為召登、勅使可被遣旨御沙汰御座候由之処、於彼方大膳大夫父子之内入京之義歎願仕置候処、右願之通被仰付候得は、無此上御義ニ御座候へ共、若左様難相成、終ニ差鍾候節は、天下争乱之基と相成、不容易事と奉存候、長州之儀は私隣国ニ御座候故、強而申上候而ハ恐入候次第ニ奉存候得共、万一天下之御一大事と相成候而ハ奉恐入候間、何卒寛大之御処置被仰付度奉存候、元來於長州は励精之

廉不少候得共、或ハ烈ニ過龜ニ涉候義も可有之、就而は彼方赤心被遊御尋候義ニ御座候へ、乍不及相成丈私より承可奉申上、左候上は格別之以思召既往之事は御棄捨被仰付、去年八月十八日後も從朝廷被仰出候通攘夷之事等御委任被仰付候へ、於大膳大夫父子難有奉存、為御礼上京可仕と奉存候、其上ニ而三条家始下向之堂上方も從朝廷御扱方被仰付候へ、御邦内安寧、万民之大幸不過之義と奉存候、猶近來物価弥沸騰、一同難渡之場合ニ候へは、外夷御攘斥之御処置不被為在候而は不相濟折柄ニ付、海内之御堅治第一之御義と奉存候間、前件之次第只管奉懇願候、依而別紙之通奉伺候間、御沙汰之程奉待候、以浅見斯申上候段、深奉恐入候得共、燕芹之微忠と奉存、愚存不包奉申上候、猶兼而由緒も御座候間、二条殿下迄も御内々申上置候、小藩之義此上為對事は難仕、旁心付候廉奉申上候、彼是之処宜御憐察伏而奉希上候、已上、

別紙

一松平大膳大夫父子赤心之義は尊攘之外無他事訊ニは可有之候得共、為念其旨誓神明候而之一書、朝廷江差出候義ニ而は、如何可有御座哉、

但何分既往之事ハ御棄捨被 仰付度、強而家臣等

之罪被遊御求候而は、却而擾乱之恐不少、且又

攘夷之義茂相弛不申様被 仰付度、聊ニ而も

神州之正氣相撓候而は相濟不申、其上彼藩ニ寄

合候有志輩之動止ニも抱り候、旁此等之義は小

藩之私論方力ニ及候訊ニ而も無御座、第一御為

筋ニも不相成義と奉存候間、如此奉窺候、

右之趣奉窺候、已上、

朝廷江建白書

臣実名不願恐懼言上仕候、方今不穩形勢、根は外夷一条

之訊ニ御座候得共、殆 御邦内切迫之姿ニ相成、乍恐

宸襟之程奉遙察、苦心ニ罷在候義御座候、先以長州御取

扱之義、此節末家并重役之者共浪華迄被為召登、勅使

可被為遣之旨 御沙汰之処、於彼方は宰相父子入京之義

歎願仕置候由、右長州之義は、臣隣国ニ付強而言上仕候

而は恐懼之至ニ候得共、情相考候ニ、右願通被 仰付候

得は無此上義ニ御座候得共、若左様難相成終差纏ニ相成

候而は 聖代之御大事と奉存候間、不得止事以愚見奉窺

度、元來彼家之義は是迄励精之廉不少、去秋八月十八日

後と雖、猶攘夷之義御依頼之 御沙汰之段被為在候通ニ

御座候へは、何分ニも御寛大之御所置被 仰付度奉存候、

併烈ニ過僞ニ涉候との 御見込被為在候哉ニ承候得は、

若宰相父子之赤心不被為 聞食候而は、御不安心ニ被

為 思召候訊共ニ御座候へ、乍不及成丈之義は承取可

奉達 御聽奉存候、左候上ニ而既往之 御見込被遊御棄

捨被下度候上、宰相父子之内御礼上京等 御免被 仰付

攘夷尽力且諸有志鎮撫之事等被遊御依頼候へ、御重

恩之程奉感服候義と奉存候、猶其上は三条家始下向之堂

上御扱をも被 仰付候へ、海内御静謐之御所置ニ相成

万民之大幸不可過義と奉存候、猶近來物価弥沸騰、一同

相困候義ニ御座候へは、殊更從來之 聖慮通外夷掃攘御

差急可被為在義、旁別而 御邦内堅治之基本被為建度御義と奉存候へは、前段長州之一条品克被 仰付度奉懇祈候、猶以別紙奉窺候間、 聖諭之程謹而奉待候、何分鄙情難黙止次第哀察奉仰冀候、誠恐誠恐頓首敬白、

別紙

一長州父子赤心之義は、尊攘之外無他事訳ニは可有之候得共、為念其旨誓神明候而之一書差出候義ニ而は如何可有御座哉、

但何分既往之 御見込は被為遊御棄捨度、強而家臣等之罪を被遊御求候而は、却而擾乱之恐不少、且又攘夷之義も相弛ミ不申様被 仰付度、聊ニ而も神州之正氣相撓候而は相濟不申、其上彼藩ニ寄居候有志輩之動止ニも拘候、旁此等之義ハ小藩之臣等論方力之及候訳ニも無御座、第一御為筋も不宜義と奉存候、仍而如斯奉窺候、

右御窺奉申上候、敬白、

四月十三日長州より津和野江返翰

方今時勢御同様御苦心之義申も疎ニ存候、然は今般朝廷幕府より弊藩江 御沙汰之趣ニ付、御高議之趣朝廷幕府江御建言被成度御相談として委細御使者を以被仰下候趣、具ニ致敬承候御建言之写をも熟覽仕候処、聊氣付候筋無御座、貴藩御精忠之程不始于今、深致銘肝罷在候、

皇国之御為とハ乍申、弊藩之義ニ付斯迄被配貴慮御尽力被成下候段、不堪感謝候、猶御使者へ申含候、

右は先日御届書ニも申上置候通、当分各国之形勢事情差越候場所々々ニ而承得候低筆記仕、間ニは虚説妄伝も可有御座、或ハ無用之事件も不少候半、此等之儀は万御汲取被下、御一覽之上宜御取捨被成下度奉存候、

甲子夏五月

重野厚之丞

冊子原寸 縦二九種 横二・三種 二三枚

久光公ヨリ近衛貞姫へノ書翰草案

左近衛中将推任叙報告其他ノ件

三月十八日之御文有難く拜見申上まいらせ候、まつく日に増し暑ニ向ひまいらせ候得共、御まえ様ニも益御機けん能入らせられ、めて度そんし上まいらせ候、私ニも先月初旬願之通帰国御暇被仰出、十一日ニ御暇之参内被仰付、

龍願を拜し奉り、

天盃頂戴、御扇子一箱、御晒五反拜領仰付られ、其上段々之功勞御賞普迄被為在候而、従四位上左近衛権中将御推任叙仰付られ、重畳冥加しこく恐入有難く存上まいらせ候、公方様よりも御小納戸御使にて、御餞別として御脇元腰御三所物御袴地、御菓子等拜領被仰付、別而難有存上まいらせ候、実いか様ニ有難く承知仕候義、先度も申上候通、只恐入奉り候外無御座候、就而同十八日京都発足、去ル八日爰許へ帰着仕、何も無事ニ罷在候まゝ、乍憚御心安くおほしめし下されく願奉存候、扱先度は、短

尺掛一箱

御肴料

御まえ様へ進上いたし候所、是又御挨拶仰下され、重疊御肴料有難くそんし上まいらせ候、其節千代岡江下され候やうにと金子差上候所、右御挨拶御委しく仰下され、御念入らせられ候御事と、有難く承知いたしまいらせ候、しかし御肴料之義、御わかり不被為在候よし仰下され候、あれハ、御まえ様へ進上之考ニ御座候、右ノ吹聴所々様へ之所御尋仰遣され、承知いたしまいらせ候、至極之内分之事ニ御座候間、いつ方へも御吹てうニは及び不申候半さやう仰聞られ下されたくそんし上まいらせ候、おつなさまよりも御肴料被下、有難く御礼よろしく御願ひ申上まいらせ候、まつく右御礼御返事旁、着際大取込故略義なから一紙ニ申上候まゝ、偏ニ御有免ねかひ上まいらせ候、めてたくかしこ、

文書原寸 縦一六・八糎 横五五糎

1068 久光公ヨリ近衛忠房卿へ？草案

京都岡崎調練ノ件其他

尊翰被成下難有拜見仕候、先以炎暑之砌御座候処、益御機嫌能被為成御座、恐悅御儀奉存候、然は在京中は繁々御懇命奉蒙、拜領物等被仰付、別而難有仕合奉存候、扱其後は其地之形勢、追而転換之模様細々被仰下、悦喜之至奉存候、且於岡崎調練御覽被下候由、一同之勉勵ニも罷成、難有奉存候、其外續々被仰下候趣、委細奉承知候先は右御礼申上度——

再白、炎熱之節、乍恐為天下御保養被成下度、万々

奉存候、愚息備後ニも最早出京仕候義と相考申候、

田舎者乍恐御教示被成下度奉伏願候、以上、

文書原寸 縦一六・八極 横二四・八極

1069 將軍ヨリ久光公へ下賜ノ鞍置馬覚書

1070 朝廷ヨリ久光公へ下賜ノ鞍置馬覚書

1071 長崎ヨリノ下之関砲撃報告

(編纂書) 朱
「一」甲子」

長崎より申来候書付ニ而六月廿二日長崎より到来」

六月朔日小倉表江、先月廿六日出之京都町御奉行御兩名ニ而、当地鎮台江之御用状相達、即刻継送候添状一同申来候、同日下之関戦争一件書面昨三日九ツ時茂到来、

六月朔日巳中刻より午刻迄之内、於下之関異国船打払候事、

一 今朔日巳中刻比、上方筋より異国船老艘罷下候処、長府城下外浦より合図打有之、無間茂右船瀬戸口より下之関阿弥陀寺之地方近く寄せ、下之関外浜沖より鍋沖迄ニ罷在候長州御船高神丸并蒸気船式艘、都合三艘より炮放いたし、并亀山台場其外台場よりも教放打出候処、此度ハ右異船下ノ関地方を乗通り候調ニ付、台場より炮放ハ異国船之上を玉飛越、空敷海中ニ落込形、長州御船より打出候玉十四五放も乗船へ打当候へ共、

異国船ハ損無之由、外ニ異国船瀬戸口より乗込候候、長州御船高神丸・蒸気船之間を近く乗通り、長州御船より数放打出候迄異国船炮放不致、少々行過長州御船打方間合有之と思敷折柄、異国船より誠ニ美々敷数放打出候処、(毛利慶親)長州侯御船高神丸ハ打崩れ、海中へ沈形、柱艫(柱カ)少々相見申候、其外長州蒸気船式艘之内壱艘は湯釜を被打破、十四五ヶ所も打抜れ、又壱艘ハ垣廻り外囲之事散々被打破、不致用立、右異国船其假船間を乗通り、十丁計も行過又々跡へ引返し、此度ハ龜山其外台場へ向炮放いたし、中ニはボンベン有之蔵三ヶ所、居宅少々焼失、其外数ヶ所人家へ玉打込、誠ニ難尽言語御座候、夫より異国船は又々上筋之様ニ罷帰申候、類船も有之候風聞ニは候へ共如何哉、尤フランスと申事ニ御座候、

一 長州御船ニ而死人・怪我人凡百人計も有之由、併其余不相分、右損人之内誠ニ惣身赤く相成候人有之候趣、右之湯釜ニ懸り候哉、又は毒焰ニ候哉、跡計追々可申上候

一 下ノ関市中之者は怪我人無之趣、尤是ハ過日より壱人も居宅不致、何れも立退明家まゝ御座候、

一 右異国船壱艘姫島之方を向、今日未刻比罷通申候趣、下り船之もの新泊沖より見掛申候趣御座候、

一 長州侯ニも御台場も大損、御船も三艘共損し、此後ハ戦争之手尺候趣風聞御座候、尚追々可申上候、以上、

六月朔日

(甲子トアルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一六・四種 横一四一・五種

○一〇三 久光公官位推任叙ニ付安房奉書

一〇三 有馬中務大輔より島津久光公へ

久留米藩内訂ノ件

(包紙ウツ書)
 一 島津大隅守様 有馬中務大輔
 貴答

緘 (貼紙)
 一 黒田嘉右衛門被遣

二三六

仲夏念五筭之華翰、忝拜誦仕候、甚暑之節御座候所、益御堅剛可被成御座奉敬賀候、然ハ先般御懇諭之義、近来變事出来候而猶予仕候段御聞被成、御驚駭之由ニ而、御家臣黒田嘉右衛門又々御差越被下、委細は直々承候様御念書之趣拜承仕、御厚情之程別而忝、実ニ難尺紙毫候、然所折悪敷眼氣ニ相惱、何為ニも御高論直ニ承兼、不得止失敬相働、遺誠之至ニ御座候、尤側役之者ヲ以御高論具ニ伝承仕候、右ニ付愚意之趣ハ其節申述候都合ニ御座候、右御挨拶旁今度家来北川亘・松岡伝十郎差出候、委細其筋江可申達候、万縷同人共江託置候ニ付文略仕候、右は拜答取束如此御座候、頓首、

六月初四

(有馬慶頼)
中務大輔

大隅守様

二白、御端書之趣忝猶自愛專一ニ奉存候、乍末筆皆々様江も御序之節、御伝声奉希候、本文之通眼氣之所、頃日漸少々克快罷成候間、乍心外奉復延引仕候、御仁免可被下候、扱別紙は大垣家来之談話聞書

之由ニ御座候、元より誤聞僻見も不少哉ニ御座候得共、珍書之由ニ而極密手ニ入申候、最早御覽ニ相成候哉も難計候得共、任幸便備電覽申候、不備、

文書原寸 縦一七・五種 包紙原寸 縦三三・一種

横一五七・五種 横 四四種

一〇五 下之関戦争報告

(端裏書)朱
「一甲子六月五日」

長崎より申来候書付ニ而六月廿二日長崎より到来」

六月五日辰刻比、周防灘江異国船式艘相見得候趣、長府外浦より合図打有之、無程フランス軍艦式艘小倉領田ノ浦江淀卸、内巻艘ハフレカツト船と申事、一五辰刻比田浦沖合江淀卸、無程田浦江兩人異国人上陸いたし、同所地方江向決而放発不致候付安氣致候様長州は先比不意ニ打方被致候ニ付、彼地江軍艦差向候段田浦之者江申聞候趣、同日辰下刻瀬戸より内江は乗込不申、瀬戸外より段之浦御台場其外杉谷御台場ヲ目

当放発致、尤檀ノ浦御台場よりは拾放計も放発致候、船よりハ数十放打出し候処、杉谷・檀ノ浦御台場長州勢足留り難相成、追々操引ニ相成候趣、随而御台場江人勢無之趣軍艦より見受候哉、無程ハツテイラ八艘江式百人計異人乗込、筒類を積込ハツテイラより打出し、追々地方江押付上陸致候処、長州勢陸戦出陣双方小簡ニ而前田村と申所脇手暫時筒雜り相成候処、長州勢引色ニ相成候趣、尚又ハツテイラニも異人乗込居候を大砲ニ而放発致し候処、ハツテイラ迄当り候趣、不叶哉ハツテイラ五六丁も上へ引退候処、軍艦より是を見請候哉、軍艦俄ニ旗ヲ引上、長州勢よりハツテイラ江打出候筒元ヲ目当ニ大砲数放打出し候処、長州勢も是ニ当り候趣、其外山々谷々より長州勢打出候筒元軍艦より目当ニ打出候、陸戦之方ハ長州勢引色、異国勢も式三丁引取候折から亦々異国人助勢ニ行逢、又々一同ニ相成取て返し、長州勢江打掛候、長州亦々引色、長府方江引取申候、其内前田村人家江異国人共所々江相分レ

火をさし又ハ火矢等打掛焼申候、寺ヶケ所其外人家十五六軒も焼失致候、杉谷御台場江も異国人乗込、御陣屋江も火をさし是も焼失いたし、凡二時計之戦争ニ而異国人ハハツテイラ乗込申候而軍艦江引取申候、右ハツテイラ乗込候節、長州勢下ノ関固メ勢近打、横合よりねらひ打出し、四五人も異国人ヲたをし候趣御座候、猶又異人軍艦引取田ノ浦冲江暫時罷在、又々夕刻周防灘之方江引返、灘中江碇泊致居申候、亦々明日下ノ関方江仕掛来ル風説ニ御座候、双方共戦死之者有之候趣ニ御座候得共、未人数相分り不申候、

六月五日夜

右は小倉中原屋より津吉正助方江六月八日到着書状之写、

(甲子トアルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一四・四糎 横一八〇・五糎

10天 大島吉之助ヨリ大久保一蔵へ

京都ニ於ケル會長ノ軋轢

暑氣相募候得共、

御兩殿様益御機嫌能被遊御座、恐悅之御儀奉存候、次ニ
貴兄御無異之筈と珍重奉存候、陳ハ当月初方ニは

(島津珍彦)

公子御着坂之御模様と承居候故、御迎として去ル四日出

立ニて五日着坂いたし、直様兵庫之様參る賦、是ハ楠公
社之一条ニ付地面沙汰、幕より大坂御留守方江申立候儀

御座候間、伊地知正治・吉井幸輔三人一緒ニ參居候処、

(友亮)

いまた御着も不相分候付、兵庫江差越賦ニて大坂御留守

居同道いたし、伊丹迄差越申候、伊丹之儀ハ薩摩定宿と
申儀を

陽明殿江願出、定宿之札相掛置候得は、浮浪士之暴を免
候由ニて、彼御方より被仰遣候付、定宿之札相記し候場

ニ罷成候処、一度は薩摩人一宿いたし呉候得は別而宜敷

段申事故、兵庫江參掛一宿いたし居候処、五日夜之会藩

(政風)

等浪人捕方之一件、内田仲之助方より申来、鶏鳴相達、

披見之央、京地之方火烟相見得候付、実ニ驚駭いたし、

早々罷帰候次第ニ御座候、然処委敷相尋申候処、出火之
儀ハ着火等之向ニ無之、長州人探索ハ今ニ不忘、昨夜も

兩三人ハ召捕候向ニ被相聞申候、畢竟何等之処より如此
始抹ニ相及候哉、委敷不相分候得共、先日も長州援兵各

國より不差出様との御沙汰被成下候様、朝廷江御願候

儀も有之、又ハ浪人取締之為守衛之者嚴重ニ相迫、手ニ
余り候ハ、切捨不苦、人間違ニ而も不苦儀御達相成候間、

一橋より頻ニ草稿迄相認申出候処、無御抛御沙汰ニ出候
由ニ御座候、是等之儀前以相発し候次第ニ御座候へハ、

決而長州之本國を異人を以相破らせ、京地ハ悉ク相除
之含ニ而御座候哉、又ハ暴令相発候付、長州より忍兼候

而暴発可致之謀相洩候而ケ様之始抹ニ及候哉、突留候廉
もいまた不相知候得共、長州人を相探候儀昼夜甚敷もの

ニ御座候由、長人ハ是ニ而氣を被挫候欤、又ハ激候哉ハ

不相分候得共、昨日迄ニ三度程國元江飛脚を差立候由、

いまた長之廷中ニハ攻掛不申、途中又ハ宿屋等之者計ニ

手を掛候由ニ御座候、水野和泉守^(志輔)昨朝御当地出立、伏見江參、直様乗船之由、是ハ大坂より早々関東江帰国之向ニ被相聞申候、家中之者旅宿いたし居候亭主之物語ニ、此度ハ危きニ逢ふ筈之処、からき命を助り帰国いたす訳と被相咄候由承申候、さすれハ何欵相企居候半欵とも被相察申候、ともあれか^つもあれ、此末如何形行可申哉、長州も只々此居候事ニも無之、大破ニ相成欵、又ハ大挙して発り立申欵ニ可有御座候、只今ハ薩州之処双方より望を被懸候模様ニ御座候得共、確乎して動き不申、禁裏御守衛を一筋ニ相守居候事ニ御座候処、各国之心配ハ露程も不存、安気なものニ御座候、御遙察可被下候、御当地戰場と相成模様も御座候ハ、直様早打を以御注進可申上候間、左様御得心可被下候、今朝帰京仕荒々形行申上越候、恐々謹言、

大島吉之助

六月八日

文書原寸 縦一六・七種 横一四一・二種

1057 下之関戦争報告

^(端裏書)朱
「甲子六月十一日」

下之関より申来候由ニ而夫を長崎表より申来候書付ニ而産
物方江差出候事」

下之関合戦

当月五日辰刻周防沖よりフランス船軍艦式艘下之関之瀬戸口田之浦湊江走り込、同所江四五人上陸、当地江は何茂乱妨不致候間、驚間敷候哉申候、此間中下之関よりフランス船江砲発いたし候意趣返しニ参着いたし候段申たる由、然るニ同刻兩艘共下之関江乗り出、此度は下之関江は不乗込、下之関上ノ手檀之浦と申所江台場有之、右江砲発、其所より少し脇手江杉ヶ谷と申所江も台場有之、右兩所江兩艘より砲発、長州方よりも右兩台場より砲発互ニ打合、合戦相始、長州方少し引色、足だまりこらへかたく、然るニ壱艘よりパツテイラ八艘ニ鉄砲積入上陸凡式百人、右兩陣江相掛候処、たまり兼長州方前田村迄引退キ、彼所より双方小筒を以暫ク合戦、是亦長州方引

色、既ニ両台場は勿論、前田陣所迄乗取、前田在郷江諸

所火矢打込焼打、或百人ノ異人列ヲ正しく引、ハツテイ

ラニ而帰船仕候処ニ下之関之助勢參、又候合戦、此節は

蒸気船より砲発いたし、下之関勢ヲ打ちらし為申由、夫

故無事ニハツテイラ本船江帰候、異人四五人死亡之由

ニも承候へ共、いまた不相分、下之関方多分死亡有之由

大敗軍見苦敷次第と申事ニ而候、右合戦五日辰刻より已

刻過キわつか忒時之合戦、其夜迄田之浦口江両軍艦滞船

夜半何方江欽行衛不相分、

右実説追々御聞及候筈候へ共、此段念のため申上候、

六月十一日

高崎
申拜

浜崎様

右御存知なくハ、五代様江御咄し可被下候、

(甲子トアルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一七・二種 横一五四・五種

二六 江戸久木山泰蔵探索書

二通

開鎖問題、野州浪士ノ件

江戸新納嘉藤ニヨリ大久保一蔵へ

開鎖問題及中浜万次郎雇入ノ件

一〇五八ノ一

水戸

京師より川越ニ被命候ニは、鎖港之事水府ニ專任故可問

合、碇と一定可致被仰、夫故川越可問合、追々鎖港之方

相決候所、当月朔日水府登城之節、忽開港之論ニ相変、

大ニ陳論被致、諸老若一同同意之体ニ有之候、○是より

先水戸封より開国論之徒余程小石川屋敷ニ出参り、中納

言公ニ大ニ説論有之、終ニ其論ニ定、猶他諸侯諸有司開

港方も多分応援有之候様子

竹田耕雲翁其他鎖攘家両三輩押込、
候位之事故、開港家之勢当今甚盛

川越

元来京師より先般之御請故一々水府と問合、断然鎖攘之

論ニ決候故、諸老若衆内実ハ不服ニハ候得共、外ハ同意

ニ相見可所、朔日之議より一同水府ニ同意之事故、当今

鎖港家川越一人ニ相成、無是非前日断然可被遊鎖港と数

ヶ条書立献策致置、幕府御評定御決答迄ハ引込、其上出
勤次第其方ニ片付可申事と相定、頗銳意之様子、尤川藩
諸士挙而碌々家老山田太郎右衛門其外公用人様ノ者二人
名専ら翼賛致候、○先達御達野州浪士追捕之義、全く老
中よりニ而、川越更ニ預リ不申、尤其節迄ハ川越専ら鎖港

議論ニ掛り、御廟算一定之義折角幕府ニ御勸申上候折柄
幕府至極御決着ニ相成候事故、是一決ニ相成候ハ、浪士
共名と可致事無之、不追捕而自ら消散可致、不然是仮令
追捕有之共浜ノ真砂古と申議故と是迄ハカク詰候を水府、
為一朝ニ罷崩候由

板倉

京師より之御請鎖攘之所ニ候得共、無謀ニハ不仕、国是
一定之上追々其方ニ運ひ可付と申事故、断然鎖港之義始
より不承知故、今日迄別段其手数と不相見、矢張此節ハ
諸老若同様外鎖内開と被存候、

井河州

始ハ鎖港一辺、中ハ外鎖内開ニ而、一家中不服、若断然
鎖港之論ニ御決定無之は、家中不殘引込可申と申張、先

達而は一人不殘引込候故、他方より使者参候而も取次者
も無之、甚困り被迫、不得止攘鎖之論ニ決心、此節出動
被致、夫故此節川越へ御使者御文通頻ニ参候由此節川越と
同意へ先河
州而、

野浪士

大平山より追々近辺剽掠致、既ニ去五日夜より六日朝ニ
掛、栃木ニ而宇津ノ宮戸田・吹上有馬日州
陣屋アリ両家之勢打と小
セリ合有之、尤死傷ハ格別無之様子、沼田之被奪候事ハ
全ク虚説、○浪士川越始之所置振は、諸藩より出候者ハ
其藩ニ引渡し、渡場無之者ハ本庄番丁浪士組ニも可入置
取計之模様故、追捕とハ大ニ異議、

幕府

一昨十日御居間ニ而御自分御政事御評議有之候由、

礫川邸

水府より馳集候魁首ハ朝稻弥三郎・斎藤凶書、是ハ皆結
城寅(寿之)十余党、武田耕雲斎へ賜死候得共、武田党類數十人
起り、右檢使参り節打果覚悟、夫故右之議止、水府公ハ

太田道準^(辭)へ事々相談、夫故太田毎日礫邸^(水戸邸)へ出入、

右事情探索仕申上候、以上、

六月十三日

久木山泰蔵

岩下佐次右衛門様

新納加藤二様

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三二五号

文書ト同文ナリ〕

冊子原寸 縦二四種 横一七・三種 三枚

一〇五八ノ二

〔包紙ウツ書〕

御国元

大久保一蔵様

江戸
新納嘉藤二

〔朱〕
「甲子六月十四日」

〔端裏朱書〕
「甲子六月十四日」

尚々、細島一件之事、大概道付候而、田中清之進今日

帰京いたし、小松家より致承知来候事故、右江申上

候上其御許ニは委數御問合ニ相成可申候、いつれ清

之進直ニ不罷下候而ハ能分兼可申、多分清之進被差

下事ト察申候、尤其後格別かわりたる儀も無御座候

間、別段不申上候、

一筆啓上仕候、

太守様益御機嫌好被遊御座、

中將様ニも益御機嫌好被遊御下着、恐悦之御儀奉存候、

次ニ貴所様御從駕御安着被成、愈御壯健御精勤可被成、

奉欣賀候、随而私ニも無異相勤申候間、乍憚御休意思召

可被下候、然は当地之形勢其後ハ別紙^(巻紙)久木山聞合書通ニ

御座候、野州屯集之浮浪輩戸田長門守陣屋江金作之強談

ニ来候而、終ニ炮発、少々せり合有之候得共、手負等一

無之程之事、先日松右京亮様・牧野越中守様江討手御達

ニ相成、小頭聞合ニ出候処、両所共其翌々朝御発足之御

賦之事、近辺之大名江も大形討手被命候儀、大目付書役

より通候事、筋々江首尾いたし候間、其筋より申上ニ可

相成候、戸田家と浪士輩炮発之事、将討手被仰付候事な

と事々敷ハ聞ヘ候得共、為指儀ニ而も無之候半欵、横浜鎖港之事も此内ハ涯々敷聞得候得共、至頃日聞合通路明事とも不被察候、板倉侯杯先達而より登城無之候処、昨日より出仕候筋ニ見得申候、攘夷ても開国ても一方ニ片付、死力ヲ抛所置有之候ハ、神明之愛護も可有之候得共、左様ニも参兼候と見得、歎息之至ニ候、攘夷ヲせよ、無謀之攘夷ハするなどのこと、

朝命と承事候得共、当春一同御出会之御大策瓦解と相成候而は、方今ニ至り有謀之攘夷といふはいかなる名将も可施道可有之とも不被考候、此上ハ行形ニまかせて打破れ申外有之ましく欵、打破々々とは是迄きめ／＼しく為申面々も、今ニ至り而は即決と申場ニも至兼候半欵と考申候、さてハかく中ニ下りたる様之姿ニ而、暫は時日を経可申候、

中浜万次郎事、先ニ申上候通、海江田(信義)よりも委敷申上候半、其后勝阿波守殿江茂壮士衆より頼被申候処、鯨取ニ長崎より万次郎ヲ望ニ来候由、さてハ双方争勝之様ニ相

成候而は如何、拙者今三十日程経候而帰府いたし候間、其上程よく世話可致候間、夫迄待候而は如何と被申候由、依而可待や如何と今吟味仕事ニ候、若鯨取之方ニ取付られ候上はいたし方無之候間、其内成丈手ヲ付候方可然哉と考申候、いつれ近日決議可仕候、此儀無口能ハ参かね、聊心配仕候、先達而奥御右筆久野氏分上之所(口カ)なと最初よりちと六かしうハあるまいかとおもふたと被申候、何之訳ニ而御勘定方なと拒申やさたかニ分かね、折角其元筋ヲ探申事ニ御座候、白川福村事、先達而御断ニ相成候事ハ、其御口上書なと其筋より御問合ニ可相成候、夫形ニ而聞候も不心得事候間、今朝又御留守居へ面会寛座いたし篤と申込候、是ハ此上いやと申事候ハ、もうハ私手前ニ而はいたし方無御座候、此節は三ヶ月計滞在、教示方いたし被具候様申置候、かく迄事を分而申候ヲ多聞いやとの御返答ハ有之ましく被考申候、今日井上直左衛門急ニ而出立候間、右方々形行申上候、以上、

六月十四日

新納嘉藤二

大久保一藏様

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三一八号

文書下同文ナリ)

文書原寸 縦 一六・六糎 包紙原寸 縦二五・五糎

横 二六八・三糎 横 三八糎

一〇五九ノ一 小松帯刀ヨリ在藩ノ家老へ 合六通

筑波山事件

長州ト外国トノ談判問題

横浜鎖港ノ件

一〇五九ノ一

上意振

横浜鎖港之儀は、兼而決定ニ而申出置候処、猶今般

叡旨之趣も有之、旁以是非成功ニ不相成候而ハ難成儀

ニ候、就而は一同ニも格別奮発致し、武備厚可心掛候、

鎖港之用向は^(松平重克)大和守江委任申付候事ニ付、一同ニも見

込之品茂候ハ、大和守江可申聞候、

五月廿八日

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三一七号
文書ノ一部下同文ナリ)

文書原寸 縦一三・二糎 横二八・四糎

一〇五九ノ二

長州表江軍艦相廻候哉之風聞有之候付、聞合仕候処、

還御前去年月中旬着御年寄松平縫殿頭様其外御役々応接有^(大給乗談)

之、其節長州一条追々御取扱之儀茂有之候得共、諸侯方

未一致不致、何分急速御返答被成兼候趣御申聞相成候哉

之由御座候、其後下田応接有之候得共、未御模様相知レ

不申分兼候得共、軍艦長州表へ相廻候儀は於

公辺御差留相成候儀ニ有之由御座候、尤去月廿八日迄ニ

長州一条延日相成居候由御座候処、前条去月中旬下旬頃

応接有之候付、軍艦相廻候儀は有之間敷哉ニ風聞御座候、

横浜表英国并和蘭国軍艦三四艘程参り居候由、長州一条

は和蘭国より敵敷申立居候哉ニも風聞御座候、

右之通風聞承合申候間、此段申上候、別紙五月廿八日

可被 仰渡御座候、

上意書写考通相添申上候、以上、

子六月朔日

文書原寸 縦一三・九種 横六〇・五種

一〇五九ノ三

(端裏付箋)

一五月廿八日御廻達」

(端裏朱書)

一井上河内守殿御渡」

(端裏銘)

一「大目付江」

今般野州大平山并常州筑波山ニ集屯罷在候浪人共取鎮方

(藤川慶篤)

水戸殿江相達、其余異形之体ニ而横行又は無宿悪党金錢

押借いたし候もの差押方等之儀相触候付而は、御代官之

儀も支配所ニ取締敵重申渡、場所ニ寄出張廻村致し、夫

々打合、尤右警衛等ニ付人数入用之節は最寄領主江通達

いたし候筈ニ候間、其節は諸事申達次第可被取計候、

右之通関八州并越後・信濃・駿河国村々領分有之面々江

可被相触候、

五月

文書原寸 縦一五・五種 横八三・四種

一〇五九ノ四

(端裏朱書)

一河内守殿御渡」

(端裏銘)

一「大目付江」

浮浪之徒取締方之儀ニ付、関八州・越後・信濃国領分知

行有之向江、今般相触候趣も有之候付而は、右大平山筑

波等ニ罷在候もの共所々江散乱致し、先々於て又は何様

之挙動可致も難計候間、右国々之外も右之趣ニ相心得、

銘々領分知行限家来差出時々見廻り、敵重取締方致し、

関所等有之向は別而心付、往来人相改、尤水戸殿御家来

ニ而用向等有之、上方筋其外所々江旅行致し候者は、其

段道中奉行より相達候筈ニ候間、一ト通御同家印鑑而已

持參致し候分は差止通行為致間敷、若押而可罷通と仕成

候もの有之候へ、差押可被申立、万一手向等致し候も

のも有之候へ、討捨候とも不苦候、

但水戸殿御家来当節京都江罷越居候ものも有之候間、

右帰国之分は是迄之通印鑑を以相改可相通候、

右之趣関八州外領分知行有之面々江、不洩様可被相触候、

五月

文書原寸 縦一五・二糎 横一〇二・二糎

一〇五九ノ五

(端裏貼紙)

「五月廿五日御廻達」

(端裏朱書)

「板倉周防守殿御渡」

(端裏銘)

「大目付江」

浮浪之徒取締ニ付而は、追々相触候趣も有之候処、先達
 而以來、野州大平山・常州筑波等ニ多人數集屯罷在、所
 々横行致候、右は水戸殿御家来并御領分之者共重ニ而、
(徳川齊昭)
 既ニ贈大納言殿之遺志を継候杯と申唱候由ニ相聞、難捨
 置筋ニ候得共、水戸殿ニ於て御手限ニ而御取鎮被成度趣
 被仰立も有之候間、御任せ被置候処、追々増長、此程ニ
 至而は右場所而已ニも不罷在、異形之体いたし、式三拾
 位宛群り、歩行中ニは無宿悪党者も相加り、金錢押借等致
 し、百姓共難渋不少、依之大平山・筑波等ニ罷在候者共
 速ニ水戸殿御領内江引取候様可罷成、其余異形之体ニ而

徘徊致し、軍用杯と唱へ押而金子為差出候類は勿論之儀、
 都而旧臘相触候趣を以て往来相改、浪人体ニ而怪敷見受候
 分は、仮令水戸殿御名目相唱候とも召捕、手向等致し候
 類は切殺候とも打殺候とも可致旨敵敷相触候段、水戸殿
 江相達置候間、右之趣相心得、銘々領分知行限家来差出
 時々為見廻、万一不法者有之候へ、搦取又は討取、多人
 數之節は隣領申合相互ニ助合、差掛り候分は村々之者共
 申合搦取候様ニも致し、尤手余り候へ、是又打殺候とも
 不苦、御料寺社領小給所等ニ而家来詰合無之分は、最寄
 領主地頭ニ而別而心得、注進次第早速人數差出、浮浪之
 者之ため村々難儀不致様厚く世話可致候、
 但關所取締出役廻村之節は、相互ニ打合候様可致候、
 右之趣關八州并越後国・信濃国領分知行有之面々江不洩
 様可被相触様、

五月

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三一九号
 文書ノ一部ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・二糎 横一六〇・五糎

一〇五九ノ六

(端裏朱書)
「甲子六月十四日

京より

小松」

筑波山浪士御取締等之儀付、別紙五通之通差越候条、

太守様

中将様被達

貴聞候儀は、何分も可被取計候、以上、

子六月十四日

小松帯刀

島津丹波殿

(久高)

喜入撰津殿

(久通)

川上但馬殿

(久美)

川上式部殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三二九号

文書ノ一部ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一四・五種 横六〇・二種

1050 小松帯刀ヨリ桂右衛門へ?

定府ノ件

一新納嘉藤二一往定府之事、度々承申候間、相成丈はと

ふか被仰付度御座候間、御吟味可被成候、肥後七左衛

門も同断願之由、是ハ子共も召列罷登り居候間、被仰

付候而も何ぞ訳合有之間敷と相考申候、何分宜敷御吟

味可被成候、此段申越候、已上、

六月十四日

小松帯刀

文書原寸 縦一六種 横三三・八種

1051 長崎養田伝兵衛ヨリ新納次郎四郎等へ

連合艦隊下之関砲撃ニ付六月朔日、二日、五

日、九日ノ情報及六月四日仏国提督ノ公文

五通添合六通

一〇六一ノ一

(端裏書)
「養田伝兵衛」

下之関戦争之一条、最早下之関詰唐物締横目等より委細

御届相成候儀と奉存候得共、爰元江相分り候丈別紙四通

之通御座候間、相添此段御届申上候、以上、

但此節便御家老衆等江は別段不申上候、

甲子

六月十五日

長崎

養田伝兵衛

新納次郎四郎殿

御軍賦役衆

(甲子トアルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一四・三種 横五〇・五種

一〇六一ノ二

本文書ハ一〇五二号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一六種 横九七種

一〇六一ノ三

(株)「甲子六月二日」

一イキリス軍艦壹艘、六月朔日八ツ頃上方の方より参り
 下之関江繫船仕、尤長州様之御手船異国作り之船式艘
 繫船之処、両艘之間ニ乗付双方より大炮打立戦相(ツマ)ニ相
 及、大乱、イキリス舟より打出シ候玉薬三ツ玉杯相用
 長州様御手船庚申丸は底を打抜入水、柱計見へ居申候
 壹艘之蒸氣船之方は友(カ)より打込、蒸氣之竈を打抜、七

分通入水散々之大破、怪我人拾余人之由、

此御手配蒸氣船は長州様之若殿様(毛利玄對)、先日下之関へ御

乗廻シ、昨日御乗船ニ而三田尻へ御越被遊候賦ニ而

御仕構御飾立ニ相成候ニ付、御本陣と見請候哉、別

而此之船ニ打放候故、此之船伊崎之様逃候処、追か

けて追打ニ数発相放候間、右之仕合ニ御座候由、

依之細江丁竹崎之辺ニ玉数々打込、破損所多ク御座

候、若殿様は昨日陸路御通行被遊候由、

一イキリスより打放候玉数之儀下之関へ当り、家宅破損

多ク、壹式ケ所焼出申候、

一イキリス船数々打放、下之関之西方ニ寄テ続打ニ相放、

左候而ノロシを揚ケ上方の方をさして罷通候ニ付、近

海へ類船参居申候而は有之間敷哉と風音仕候、勝時を

揚ケ逃去趣ニ御座候、

先日以来四度ニ及、いつれも下之関目当ニ参候、大騒

動仕候、下之関江は宿内家宅皆々近在へ逃去、漸々壹

軒ニ壹人位ツ、居申候、

一先達以来下之関江御滞留被成候中山殿御二男、昨日飛

船ニ而御帰京被遊候由、

一長州様より昨秋久留米様(有馬慶親)・筑前様へ下之関より御使御

差立、五人程大早打ニ而御通行御座候、此人数之内式

人は久留米水天狗之社家牧和泉守之同類之浪人有之候

由承申候、

右之通昨日之次第荒増御内々御注進申上候、先日より最

早四度ニ及、此末之処如何哉と案勞仕候、イキリス地方

ニ於テ打放候故、下之関之山手之御台場より打放之玉ハ

船を越海中ニ入申候、前断之次第御注進申上候、以上、

六月二日

村上銀右衛門

尚々、小倉様ニは通船之異船ニは少シ茂御構無之、

自然妨仕候時は其御用意ニ相成申候、

(甲子トアルモ文久三年ノ誤リカ)

文書原寸 縦一六・六種 横一一五・五種

一〇六一ノ四

本文書ハ一〇五五号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦二四種 横三三種 二枚

一〇六一ノ五

一去ル朔日昼九ツ時分、長州様御領海江大炮之音相聞得

候付、直様遠見之者差出候処、上筋より異国蒸気船老

艘、赤地ニ上ノ角黒キ模様之船印を建乗入候処、御同

所様台場数ヶ所より大炮打立候処、異船は下之関之方

江乗付、萩様御製造異国形之船三艘繋船いたし居候脇

を乗通候処、御同所様台場より大炮打立、猶又御手船よ

りも数発打候得共、異船は放発不致下之関亀山(南郡前)・鍋前

乗入、岸柳島脇(巖流島)ニ而乗戻し候上、右御手船三艘前江乘

参候節、異船より御手船江向ヶ放発いたし、双方暫時

打合候而下之関之方江猶放発いたし候上揚矢いたし、

其仮上筋之様乗行申候、尤異船江茂矢玉数々中り候様

子ニ候へ共、格別之損しも無之体ニ相見得、萩様御手

船庚申丸と申船を異船より打技候哉、次第ニ沈船ニ及

ひ橋計相見得候、

一去ル五日期五ツ時頃、異国蒸気船式艘上筋より下筋江

向ヶ乗参り、領海部崎沖江相見得候処、次第ニ乗入田

野浦沖江繫船いたし候付、直ニ物見船差出候処、フラス船之旗印建居申候旨、尤老艘は軍艦ニ而有之由申出候、然ル処長府様(毛利元周)台場并異船より双方大炮打合候内、前田村人家を焼立候哉、追々大火ニおよび、其内ハツテイラ七八艘江異人乗組、領方田野浦江致上陸、村役之者宅江参り候付、同所在番鎌田六左衛門右異人江面会いたし候処、片仮名之書簡差出候間、此地ハ領分違之段申聞ケ承知いたし候体ニ而、左候へは、貴国豊前江対し聊遺根無之、決而炮発不致候、依之貴国之人民安着いたし罷在候様旁申置、猶又長州は勝敗之模様ニ寄教艘差向可申段申聞、本船之様引返申候、引続長州様より志司久米之丞・長崎久之丞・山本伝兵衛と申者外ニ凡百五拾人程召連参り、右異人致上陸候哉、何れ江参り候哉之段相尋候付、上陸之上直ニ本船江引取候旨申聞ケ候、右ニ付即刻人数等相揃、嚴重ニ手当方内輪ニ出張為致置申候、右異船申之刻頃上筋江向ケ乗行申候、就右即刻式拾四時限り早打を以御届申上候様、同

役山内矢柄江被申付、去ル六日小倉出立、昨八日四ツ時爰許着仕、今日服部長門守様江右之趣御届、同人相勤申候、以上、

亥六月九日

右之通爰許詰小倉様聞役より廻状を以為知申来候事、

(年代ハ文久三年カ)

文書原寸 縦一六糎 横一一・五糎

一〇六一ノ六

ナカトシウノスミビトニ

フランス タイシヲテイトクヨリツゲシラサレタリ、ロ

ノコロナカトシウノトノサマ、マツグイラダイセンノダ(タ)(毛利慶親)

イフーモウサル、ヲ、タイシヨウヨリフランスコクノハ

タヲタツ、フネヲオウズツニテウタサレタルトコロ、コ

レヲワカクニ、タイシテオウイナルケイベツトソンシテ

イマワレシキトノサマヲタ、スニマエルケレトモ、ワレ

ニムカワス、ツミナキナカトシウチウノスミビトヲマタ

ソノツマコトモウチナトモウチカイス、コ、ロナカルユ

エニソノナカトシウチウノスミビトニオイテワ、スコシ
 モオトロクニオヨヒマセス、カエリテモシ十二ヨウシア
 リテカワカフネニノルヒトアラハ、モトヨリノトウリ、
 ムツバラフランステイコクトニツボンテイコクト

ア カ イ	シ ロ ト	ル リ イ ロ
-------------	-------------	------------------

フランスハタ

コンシンノシヤウクムスバレシトキヨリ、イママテノト
 ウリヨクノコンセツニトリアツクワレルヘシ、ハタマ
 タシヨクモツラワカフネニモツテマエルヒトアラハ、ソ
 ウオフノネタンニテハラワレマス、ミキラヲコンシンヲ
 モツテツケシラサル、コト、カクノゴトクニサムラフ、
 キンケン、

ニツホン文久三亥年六月四日

フランス千八百六十三年七月十九日

セヨシトス

文書原寸 縦二六・五種 横四〇種

○1021 久光公官位昇進ニ付女房奉書

1022 和蘭ヨリ福地源一郎ノ書信

敵父へ

〔表紙〕
 「西洋より来書翰之写」

任幸便寸簡奉拜啓候、其御地は酷暑之節ニ可有御座候
 処、益御機嫌能北堂初メ諸姻戚一統御無異奉遙賀候、
 次ニ兎儀無事精細罷在候間、乍憚御安意奉願候、

一二月廿一日紅海之暮蘇尼灣ニ入港、同日午後陸路蒸氣
スニー(スエズ)

車ニ而、夕六ツ時エデット(カイロ)日多該録御当着、翌日より同所高

名之寺院・古跡等見物此際は渾而沙漠なれハ蘇尼より該録まで
 野に青草なし、往々駱駝之往来するのミ

仕候、同所ハ旧昔文物盛明之地なりしニ、今ハ往々廢

毀し瓦石とものミニ御座候、同廿四日同所を出て蒸氣

車ニ而黄昏亞力山太達尤出立之頃ハ、
 午後二時位也、此際は前と相反し

大ニ草木等繁茂せり、同夜英國蒸氣軍艦ヒマヤラ長サ
 七十

二三間、人數四千人を七に乘込、翌廿五日開帆、廿八日地中
載新造ニして極花廳

海之島馬兒太ニ投錨す、同所江上陸し英仏何れ江先渡

可致之論ニテ、殊之外滞留相成、三月二日開帆、同五

日仏国(ブルセイユ)ニルセイユ港江無滯入津、翌六日使節一統上陸、

此地は貿易繁昌之地ニして人煙稠密、名勝等見物、同

七日九時蒸氣車ニ而出立、踰山渡谷地中ニ孔ありて其

中暗黒、一瞬時間ニ経過し、其間三四五里もありと云

其蒸氣車之駄迅飛鳥も後江飛ぶ様相見へ申候、此ニテ

御察可被下候、同日六時仏国「リオン」府江着、同所ハ

我邦之摂府とも可申処ニ御座候而、市街繁昌、八日ハ

其地江滞留、九日八時同地を出夕六時仏都把理斯江着

せり、此際仏国ニは田園いかにも齊整、寸壤尺地も荒

蕪し地なれハ、実ニ可驚事ニ御座候、○蒸氣車之迅速

ハ愚筆之尽す処ニ無御座候、時表ニテ算シ候ニ、一分

時間一里を行申候、

一 把理斯パリヌハ周廻方二里、市都之美、文物之備ハ欧邏巴第

一之地と申事、いかにも左様被存候、既ニ使節一行之

旅宿ハ同所第二之家と申一町四方之間、一間にて部屋

数千室ニ余り、食事之間ハ三千人を食せしむるニ足可
申候、

一 三月十四日、仏皇帝ナポレオン那破倫第三世江謁見仕、使節目

見以上之役々、次ニ私まで拜謁仕候、王宮之美装驚目

申候、同帝ハ方今西州第一之英雄にして、彼高名之第

一世之姪なれハ、さも有之へき事ニ御座候而、成程其

容貌ニ而も相しれ申候、

一 文事武備一も相欠候事無御座、就中陸軍ハ六十万と申

実ニ往処として兵之備らざる地なし、驚申候、

一 其余ハ御察奉願上候、

一 四月朔日把理斯出立七時、二時同国カレイ港江着、翌

日仏国之軍艦コルス船半ニテトール峡を過、十二時英

之海岸「ドーフル」江着仕、直様蒸氣車江乗、夕六時倫

敦江着仕申候、

一 倫敦府ハ方九里一里ハ我、十八丁、其人煙之盛なる、坤輿第一と

も可申カ、成程洋人之説も尤ニ御座候、但し其市街ハ

把理斯之如く清潔ならされども、人氣と云、繁昌と云

ひ、どこやら我江戸ニ彷彿いたし候、猶把理斯と倫敦
 ハ京師と江都之違之如し、同所にてハ女王江ハ謁見不
 仕候、是ハ女王之配偶此程殂せられ候故衷中なれハ
 也、使節一統夫故女王之宮ニハ参り不申候、展觀場之
 盛なるハ実ニ驚異仕候、これハ世界中之奇物珍品其余
 産物何品ニ由らず集め、人をして從觀せしめ候事ニ御
 座候、十年一挙諸国之もの之を看んとて集り候ゆへ、
 当年ハ別して倫敦江旅人入込候よし、其場長サ二町、
 巾准之、天井ハ玻璃にいたし、其中ニ陣列し居申候、
 私も処々見物ニ参り申候、朝より夕まで見詰ニいたし
 十分之一も見切り不申候、是にて御察可被下候、尤場
 を開申候日ハ四月三日にて、彼方之五月一日也、六ヶ
 月之間從觀せしむと云、此外諸機械製造所其外之処多
 く、実ニ日々出行仕候ハ日々奇巧珍事ノミニて、昼間
 之事を日記ニ認候事すら出来不申、鉄橋・墜道・水晶
 宮など申候名勝之多きニハ驚申候、

就中尤驚候ハ「ウールウツケ」此地ハ倫敦より達迷斯河水一帯を隔て緑威之天文台ニ隣候

地ニ御座候、猶江戸之本所之製砲所ニ御座候、是ハ近年発
深川とも可申地ニ御座候
 明之砲アルムストングゴンと申螺線(旋)を孔中に付け、後
 込之砲にて鉄を巻て製候大砲、其製造所周囲一里余、
 其盛なる洋之製造所中之巨擘と申事ニ御座候、
グレンウィック緑威之海軍局觀象台此台より航海圖之程度を立候処等も驚目候程之地ニ
 御座候、

其余博物館・武庫・文庫・禽獸園・草木園・養院・病
 院・学校・兵校或ハ育院・狂院・孤院・聾啞院等一々
 見物仕候而、我邦之政度之不具ニハ嘆息仕候、
 英仏とも夜ハ家々煤氣を焼き、市街昼之如し、其煤氣
 を製するの所、倫敦ニハ十四ヶ所有之、其究大之仕掛
 ニハ驚申候、

騎・歩・炮之三兵調練を見物仕候、其地ハ倫敦より三
 十里有之オルトルススコットと申陸軍を養候地ニ而、其
 日之人数ハ二万人ニ而、踰山過谷渡水入林実地之調練
 ニて或ハ掩襲隊或ハ防禦隊等变化自在、大炮を発ち小
 銃を発ち、其間馬を走ル中ニ大將軍之号令明カニ相守

申候是ニ而其熟練せる事相知れ申候、

四月十九日英國外国事務執政へ談判として、三使ニ隨行し罷越候処、同人申聞候ニハ、江戸在留之英國公使アールコック此度森山多吉郎と共に帰国いたし、既ニ蘇尼マテ罷越候様昨日伝信理表にて申越候旨申立候間相驚申候、

其後五月朔日森山及ヒ外国方調役並御勘定格測刃徳藏殿兩人着仕候、不取敢江戸表之形勢消息等を得、一統大ニ相喜申候、是ハ兵庫・新潟之両港、江戸・大坂之両都を開候之期を延引候談判ニ而、別段之御差図にて渡来仕候事、尤右之兩人ハ二月十四日、我邦を出候旨夫にて江戸表執政江乱防人等之消息承知いたし、先安心仕候、

右談判向も殊之外纏り、五月十五日倫敦を一時ニ去、互得路橋より蒸氣車ニ而ウールウツチにいたり、同所より荷蘭軍艦アルシューイと申船に乗込、翌十六日開帆、此日ハ雨甚しく激浪如山、殊之外荒候得共、順風

ニ而一瞬十里、翌十七日阿蘭陀^{オランダ}之ヘルフトスルイス

と申地ニ着し、其地よりマース河之支流を國王自乘し小蒸氣船ニ而入、十二時ロットルダマへ着し、殊之外國人ども相悦ひ、方々江我紅日旗を建て祝し申候、

四時同所より蒸氣車ニ而夕六時國都海牙ニいたり申候六月五日五時、國王江謁見、これも我罷越不量謁見之御用相勸申候、夫より皇妣・太子・皇子其余王族之人々江も對顔仕候、同國ハ何と申ても旧來之懇親ゆへ、取扱振格別力を尽し、大ニ得意ニ御座候、乍併アムストルダム初め國中一体ニ水涯にて、山なく、氣候悪しく余程之下國ニ御座候、且一体之事も英仏之兩國ニ比すれハ諸事田舎めき申候、乍併海陸軍とも随分可なり國ニ準ずれハ盛大之事ニ御座候、

当地にて談判向墓取不申、殊之外長在留と相成候処、^{フロイゼン}普魯社より頻りと発足を促候ゆへ、先明十九日出足之積、^{ロシヤ}普魯社より魯西亞、夫より当地江は再渡之上談判仕候積治定いたし、何れ帰國ハ今年十一月之頃ニも

相成可申と奉存候、

一 西洋近来之時勢目撃仕候処、近来英国は随分人氣も静り候得共、仏国ハ兎角佗邦ニ兵を出し候事のミ相考候よし、既ニ墨利可^{アメリカ}ニも兵を送り、此程は朝鮮江兵を出し候由、実ニ注意すへき事ニ御座候、其余拵角之勢等或ハ政度・法律等、英之巴力門・上院・下院等目撃仕候、随分面白き御国ニ御座候、

一 写真鏡之図ニ葉奉獻呈候、これハ当地ニて写し候図ニ御座候、長川先生江茂御序之節可然御鶴声奉願上候、且後藤又次郎殿・山本物次郎殿・栗崎君杯へ可然奉願上候、

一 只相困候ハ、当地ハ殊之外日永く、朝ハ三時半よりあるく相成、夜ハ十時ニ而日没し申候、乍然夜中猶明るく、随分人顔位ハ相弁可申候、五十度以上之地ハかくあるものと兼而聞及候処、此程初而実地ニて経験仕候、

一 唯今之時候ニて私なとハ薄着の方ニて、小袖一枚ニて

朝夕ハ羽織仕度様、天氣宜敷節は昼頃のミ衿を着用仕位ニ御座候、且雨天のミニ而快晴ハ一週間一日位之ものニ御座候、一体当年ハ暑氣薄き方と洋人ども皆申居候、

猶後便申上度、先は此段御伺旁申上度、恐惶謹言、

六月十八日

福地源一郎

敵君慈帷下

(年代ハ文久二年カ)

冊子原寸 縦二四・二種 横一八種 一三枚

1076 大島吉之助ヨリ大久保一藏へ

島津備後殿ノ着京 京師ノ状況 薩藩交易ノ悪評等

暑氣相迫候得共

御両殿様益御機嫌能御座被遊、恐悦之御儀奉存候、陳ハ去ル十五日より打立、伏見一泊ニて、十六日着坂いたし御待申上居候処、十七日昼過 御着被為在、兩日御滞坂

ニ而、十九日川御登ニ而伏見御一宿、廿日(京都薩摩邸)二本松御屋敷

江御着被為在、御着掛御花園御屋敷江被為入、首尾能御

着被為成候御儀、御互恐悅之御事ニ御座候、

(久光)中將様御儀、指宿御湯治被為入候段承知仕、御相応被遊

候御事、大慶之御儀と奉存候、扱御当地之形勢ニおひて

日々変乱ニ傾候次第ニ而、致方もなき世態とハ罷成申候、

一橋廷ニも内乱到来いたし候向ニて、(内四郎)平岡并原市之進逢

切害候由、廷中之事ニ候得は、何様之訳ニ而如此場ニ相

及候哉、委敷始末不相分事ニ御座候、(二橋家)独木ニ而ハ皆烏合

之兵ニ而御座候処、内乱到来ニ而ハ定而暴威を振候も六

ヶ數可有御座欵、天下之人心ハ相離、逆も意気込通暴權

を握られ候儀も相調申間敷欵、此末之処如何形行候欵と

相考居申候、会津之儀も独木之助と相成、一向暴を助居

候処、土佐人間違ニ而槍突候より土人頻ニ憤り、兩三日

跡ニも会人を五六人切捨候由、右等大混雜と罷成候付、

今ニ而ハ会人もあくミ果たる由ニ被相聞申候、(伊東)〇い東方

次郎長州辺聞合方として被差出候処罷帰候処、唐物締土

持方より御国元江御届相成候向と格別相変候儀も無之、

(後ノ桐野利秋)中村半次郎と申者も先度申上越候通、是非長州江入込り

候様申付候而差出候処、境目ニおひて決而不入込候由ニ

而、是以立帰申候、第一売船ニ手を付候而大坂江相廻候

船ニハ決而不洩由ニ御座候、右ニ付御国元より上坂之商

人共、茶買円候聞得有之、大坂江聞合方問越置候処、別

紙之通申出候間、無往来之商人ハ都而差下候様相達、蒸

氣船江ハ茶等之品物積入不致候様、蒸氣船方役々江相達

置申候、商人手本ニ而取扱候儀も悉ク御名目ニ相拘、実

ニ込入候次第ニ御座候付、屹と御取締向相達相成候様御

計可被下候、勿論御物之御船ニ無往来之者便船被仰付御

儀、甚以不相濟儀ニ御座候間、深く取調候様蒸氣船方掛

御役々江も御達置可被下候、いづれ此形勢逆も暴論通鎮

国いたし候儀ハ相調申間敷候間、自然開国之勢ニ相成可

申と相考居申候、其節ハ茶・生蠟等之品ハ余程御益相成

可申事ニ而、商人共江被任置候品ニてハ有之間敷候付、

只今之処敵敷取締置、公然と相成候節、御国産御売出相

成候様思召被下候而、此涯之処深く御締向被成下候様御
 願ニ御座候、異人交易一条ニ付而ハ色々悪評共有之候得
 共、委敷ハ不申上越候間、御察可被下候、只今外ニ何も
 御評判申上事も無之候得共、交易一条而已悪評申触候事
 ニ御座候間、暫御取締向有御座度儀と奉存候、○大夫御(小松藩)
 帰国之一条も来月廿日より内ニハ御出立之合ニ御座候間
 左様御納得可被下候、左候而蒸氣船御遣之処被申越候由
 相聞れ申候付、夫等之御都合被成下度、小倉辺江御着共
 相成候而ハ懸念之訳も有之候、其内汐掛之場所も悉不宜
 事ニ御座候間、宜敷御計可被下候、右ニ付先便申上越置
 候、岩下氏跡ニ被相居候処御願申上置候間、何卒相運候
 様御都合被成下度、私老人ニ而ハ実ニ氣細く、
 公子も被為在候付而ハ、旁案勞仕居候付、何分早々御申
 遣可被下候、若御返答不相達内京着相成候ハ、引止置
 御返答相待候様可致候間、左様御納得可被下候、此旨
 公子御着之御祝儀迄如此御座候、恐々謹言、

大島吉之助

六月廿一日

文書原寸 縦一六・三釐 横三三七・八釐

105 山川 指宿 穎娃 調練人数帳

指宿荻野流砲術者人名扣 一通

御褒美扣 一通

山川港付近台場地図 一通

以上八通

一〇六五ノ一

(表紙)

元治元年子六月

御備組調練人数帳

山川

物主代

大迫十郎左衛門

談合役代

野間口助

昇預り

日高専齊

昇持
五代 造 助

貝役
日高五郎左衛門

太鼓役
紀善五左衛門

什長
菱田彦太郎

伍長
大迫瀨左衛門

日高誠一郎

富岡善左衛門

丸山覚右衛門

大保休左衛門

伍長

日高源五右衛門

米北与兵衛

大迫清七郎

丸山円右衛門

内田強左衛門

什長
内田次郎右衛門

伍長
有馬甚吉

野間口半藏

有馬勘兵衛

日高城左衛門

大迫八左衛門

伍長

菱田佐五左衛門

五代新右衛門

二渡勇之進

肥後十兵衛

富岡源五左衛門

什長

内田倫左衛門

伍長

野間口隆左衛門

内田斉左衛門

五百目野戦筒

目付	右同	玉薬方	右同	賄方	伍長				
内田宗偏	紀助次郎	浜崎彦左衛門	村山庄兵衛	紀方 播磨	肥後休右衛門	大迫源左衛門	菱田市左衛門	鮫島正五左衛門	
					永山喜左衛門				
					米北雄右衛門				
					浜崎喜之助				
					大山平左衛門				

子六月廿四日

横帳原寸 縦一三・八種 横四〇・三種 五枚

一〇六五ノ二

〔表紙〕

一 元治元年子六月

調練人数帳

指宿」

物主代

園田宇左衛門

談合役代

玉竿

山口九左衛門

打役

五代郷右衛門

口薬

内田甚五右衛門

玉薬

大迫仙次郎

寺田清太左衛門

昇持

黒木仲太夫

昇預

馬場幸兵衛

貝役

小田養福院

太鼓役

凶師与左衛門

什長

田中仲五郎

福島伊左衛門

是枝為兵衛

平嶺尚之進

坂本助右衛門

鎌田六郎左衛門

山口善兵衛

湯地市郎左衛門

伍長戰兵

前田幸太郎

山下次左衛門

黒木八之丞

日高藤市郎

湯地弥藤次

伍長戰兵

寺田新次郎

黒木正助

中村八郎太

佐土原雄左衛門

上野藤市

伍長戰兵

上山嘉左衛門

宮内藤一

園田宇之助

上山善五左衛門

小田清兵衛

伍長戰兵

園田弥七郎

北原七右衛門

横山吉左衛門

日高吉常坊

佐土原新太郎

伍長戰兵

徳永善左衛門

有馬嘉左衛門

坂本休次郎

有馬善兵衛

須賀清右衛門

伍長戰兵

凶師与兵衛

久本金藏

前田彦左衛門

吉富藤四郎

山下覚矢

伍長戰兵

味坂良庵

瀬戸口本乘院

馬場八之助

黒木喜格

山崎宗左衛門

伍長戰兵

小田壮左衛門

宮里養賢

永田円寿院

園田良之進

浜田良吉

伍長戰兵

脇田七郎

坂本八郎兵衛

有馬喜藤太

前田善六郎

古川辰次郎

伍長戰兵

北原万之助

入部強兵衛

鬼塚十右衛門

山下平右衛門

生駒市左衛門

伍長戦兵

竹内嘉太夫

木場八郎

前田熊助

小田出右衛門

山本五左衛門

伍長戦兵

野村用助

有馬龜次郎

野村奎之進

堀内両二

岩切治左衛門

伍長戦兵

堀内笑太夫

竹内袈裟助

野村清左衛門

永田荘右衛門

竹内与七郎

伍長戦兵

野村相助

山本勘兵衛

坂本十郎左衛門

黒木繁右衛門

上山勘太郎

伍長戦兵

園田荘助

山下休藏

山下嘉太夫

生駒五次郎

丸尾矢四郎

伍長戦兵

鎌田源五左衛門

染川宇右衛門

永山林左衛門

鎌田藤助

平嶺八郎右衛門

野戦筒七百目

坂本六弥

市来八郎次

永山新兵衛

田実龍左衛門

折田八郎右衛門

野戦筒五百目

生駒伝左衛門

有馬孫太郎

黒木勘右衛門

永池吉之進

吉富仲太夫

玉葉方
有馬太左衛門

右同
上山作次郎

兵糧方
馬場八郎兵衛

右同
永田勘左衛門

医師
尾辻養源

子六月廿四日

横帳原寸 縦一三・八種 横四〇・三種 六枚

一〇六五ノ三

〔表紙〕
元治元年子六月

調練人数并野戦筒方人数名書帳

「穎娃」

物主代 蜂須賀六矢太

談合役 樋渡次郎左衛門

昇預	有馬覚兵衛
太鼓役	小山源十郎
貝役	都外川伝諸院
医師	鮫島玄齊
昇持	兼元覚右衛門
賄方	松田笑太夫
玉藥方	山内喜左衛門
什長	園田甚左衛門
伍長	海江田八十八
右同	齊藤小市郎
戦兵	赤崎平右衛門
	鮫島仲左衛門
	上野甚右衛門
	小磯松右衛門
	都外川喜兵衛
	押領司源助
	齊藤八郎右衛門

昇預	蜂須賀新左衛門
太鼓役	鮫島九郎兵衛
貝役	齊藤覚市
医師	有留八右衛門
昇持	種子田新助
賄方	種子田善弥
玉藥方	蜂須賀權十郎
什長	小磯源左衛門
伍長	鎌田覚右衛門
右同	柴正右衛門
戦兵	吉峯龍右衛門
	赤崎源四郎
	蜂須賀十郎兵衛
	山内次左衛門
	鎌田覚太夫
	池田助左衛門
	上野鑑次郎

鎌田藤右衛門

伍長

鮫島清左衛門

蜂須賀仲右衛門

右同

上野七郎太

都外川六兵衛

戰兵

羽牟弥九郎

羽牟幸左衛門

齊藤勘左衛門

西牟田次兵衛

阿万袈裟右衛門

什長

有馬新兵衛

郡山源次兵衛

伍長

谷口孫二郎

井上利右衛門

右同

上野七兵衛

小礪武右衛門

戰兵

羽牟佐太郎

当病氣

桑畑平次郎

木佐貫十助

什長

川辺次右衛門

成尾甚五郎

右同

樋渡正藏

都外川伊右衛門

伍長

羽牟弥十郎

田口甚五郎

戰兵

園田五之丞

山下六之助

永井龍左衛門

小礪直助

上原六右衛門

什長

山元善之進

西牟田直左衛門

中島仲左衛門

郡山徳左衛門

山下喜八

一〇六五ノ四

桑畑源之助

覚

当病気

鮫島善太夫

荻野流砲術

野戦筒与

池田八次郎

池田源左衛門

田中伊右衛門

羽牟敬斎

阿万龍右衛門

右同

有馬八兵衛

児玉休省

羽牟嘉左衛門

上野堅助

上野源蔵

横帳原寸 縦一三・八種 横四〇・三種 一〇枚

指宿

前田幸太郎

山下藤之丞

山崎藤之進

堀内藤八

寺田新次郎

日高藤一郎

黒木八之丞

山下次左衛門

上山嘉左衛門

佐土原雄左衛門

入部強兵衛

野村奎之進

日高吉常坊

北原七右衛門

子六月廿四日

上野 藤市
 黒木 正助
 永山林 左衛門
 中村 八郎太
 園田 弥七郎
 園田 莊助
 堀内 笑太夫
 湯地 弥藤次
 味坂 良庵
 凶師 与兵衛
 四本 喜左衛門
 上山 善五左衛門
 小田 壯左衛門
 徳永 善左衛門
 石嶺 忠右衛門
 田中 仲五郎

文書原寸 縦一八・五糎 横七六・七糎

一〇六五ノ五

覚

山川

大迫 瀨左衛門
 日高 源五右衛門
 丸山 円右衛門
 日高 誠一郎
 丸山 覚右衛門
 菱田 佐五左衛門
 有馬 甚吉
 鮫島 正五左衛門
 内田 倫左衛門
 菱田 彦太郎

子六月廿四日

文書原寸 縦一五・八糎 横三七・五糎

一〇六五ノ六

一金千疋宛

一金七百疋

一金三百疋

一金貳百疋

文書原寸 縦一五・八種 横三七・五種

一〇六五ノ七
(包紙ウツ書)
「上」

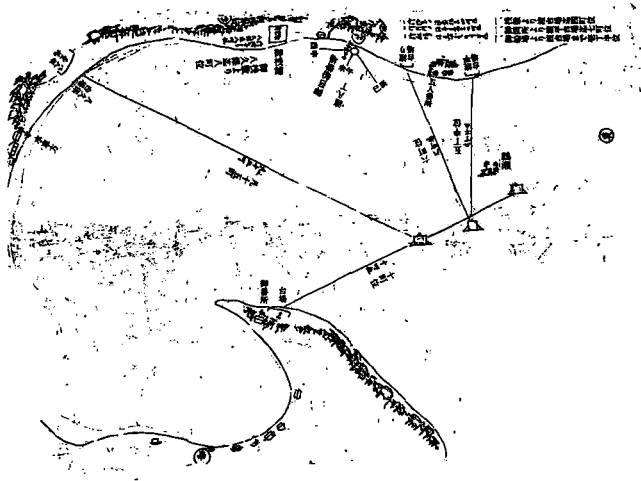
指宿

穎娃

山川

町田内膳

東郷吉左衛門



地図原寸

縦五七種

包紙原寸

縦二七種

横八四種

横三九・五種

1036 小松帯刀ヨリ在藩ノ家老へ

京都へ出兵ノ件

長州人多人数出坂、不容易形勢可成立と之趣は、一昨廿五日極々急飛脚を以申越置通ニ候処、今日ニ相成殊之外洛中騒立、夫々諸侯御固人数も被差出、只今ニ而も異変到来可致も難計と之形勢ニ而、当春被召残候人数も有之候得共、何分手薄訳ニも有之候付、早々諸郷人数之内五組、

御城下よりは一組被差越候様、其為翔鳳丸被差返、委細之趣は、井上直左衛門・川上助八郎江申含差遣候間、右翔鳳丸乗船ニ而可被差越、尤諸郷之儀は、当春長州一件之儀付

御城下江出張調練等いたし、熟郷之内より被差越可然と存候間、此段御内用を以申越候条、

太守様

中将様被達

貴聞、何分急速可被取計候、以上、

但右人数之儀は、大坂辺迄被差越候所ニ而被仰付候様有之度、此段も申越候、

子六月廿七日

小松帯刀

島津丹波殿

喜入摂津殿

川上龍衛殿

川上但馬殿

川上式部殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三三三号
文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一四・三釐 横一八〇・七釐

1037 小松帯刀ヨリ在藩ノ家老連名宛 合三通

長州哀訴状ノ件

一〇六七ノ一

以廻状致啓上候、然は長藩脱走候面々、八幡辺罷登候由ニ而、入江九一始より当方伏見屋敷迄、今朝別紙差越候付、御廻達申度則持廻申付候、尤長文ニ付御一覽済、早

々使江御渡可被下候、当方江写し取御座候間、被仰聞候
得は御廻し可申候、急此段得貴意候、以上、

六月廿五日

因州

山部隼太

宛書別紙之通ニ付略ス、

文書原寸 縦一七・六極 横四四・二極

一〇六七ノ二

私共僻在之微臣ニ而、威敵を不奉憚持参仕候義、誠以恐

多候得共、宰相父子并三条殿以下、從來攘夷之

叡慮一意ニ被致遵奉、不凶茂被蒙

勅勘、尔後数月、国方ニ而憂惶謹慎被罷在候模様、如何

に茂臣子之身分、痛苦悶惋之至ニ不堪、此上は、

聖慈皇天后土号泣愁訴仕候外有之間敷、別書一通書綴候

得共、致入京候義恐多候間、閣老(正形)稻葉公江

天朝江上達之義願出置候、猶亦君侯様方に茂、何卒三条

殿已下、宰相父子心事御洞察、御手筋を以可然様御執成

被成下度、則右書面写差出候間、宜敷御取計可被下候、

尤多人數罷出候得共、頭立候者より十分鎮靜相加申候間、

聊茂疎放之義は不仕候、其段は無御懸念、私共鄙情を茂

御愍憐被下、御周旋之程各様より宜敷被仰立可被下候、

謹言、

六月

浜忠太郎

加州様

御留守居様

薩州様

御留守居様

仙台様

御留守居様

肥後様

御留守居様

因州様

御留守居様

藤堂様

御留守居様

久留米様

御留守居様

桑名様

御留守居様

御次第不同御免可被下候事、

文書原寸 縦一八糎 横一二六糎

一〇六七ノ三

此節長藩多人數出京いたし、御老中稲葉美濃守様江差出

候事情之成行、別紙因州様(池田慶徳)より廻達有之、尤明日辰之刻

迄ニ御留守居江致出会具候様、掛合も有之候得共、夫迄

ニ而為何儀無之候処、已ニ今晚洛中及騒働、右一件は別

段申越通ニ而、夫々手当向等之儀は嚴重申渡置候、別紙

三通相添、此段申越候条、(付巻)別紙三通トアレトモ、今式通ア

太守様

り、可糎」

中将様可被達

貴聞候、以上、

子六月廿七日

小松帯刀

島津丹後殿

喜入摂津殿

川上龍衛殿

川上但馬殿

川上式部殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三三四号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一四・二糎 横九九・二糎

一〇六 水戸浪士暴挙ニ付大岡兵庫頭ヨリ届出

合二通一綴

(付巻)「公義御目付書役方より為御知相成候書付」

一〇六八ノ一

先達而御届申上候浮浪之徒為取鎮、御代官木村董平支

配所并其最寄廻村ニ付、私人數武器等差出警衛為仕候

処、浮浪之徒小金原江凡三千人余も集屯罷在、追々御

府内江可立入様子ニ而、松戸・千住兩御関所入口江押

掛相向ひ候由、其外所々江旅宿致し居、不容易形勢柄

ニ付、昨廿八日董平義、千住宿江向ケ出張致し候間、

私人數一同差添申候、依之猶又増人數、武器共即日差

出候旨、在所表より申越候、此段御届申上候、以上、

六月廿九日 大岡兵庫頭(忠愍)

文書原寸 縦二四糎 横二六・八糎

一〇六八ノ二

(前田利益)
松平飛騨守

(大河内信吉)
松平伊豆守

(忠愍)
牧野備前守殿江家来被召呼、水戸殿御家来之由、御府

内ニ立入、自然暴行可致哉も難計由ニ付、時宜ニ寄、

急速人數差出候積り相心得、尤人數差出方并場所等之

儀は、其節御使番より可相達旨、以御書取被 仰出候、

文書原寸 縦二四糎 横二六・八糎

1070 長兵来京ニ付探索書

(朱)
「甲子」

六月廿二日大阪より伏見迄長藩を漕送候三拾石船之船

頭共、大坂於町奉行所同廿五日間糺之処、伏見江着船

之節、備前・筑前・芸州・因州・仙台、外ニ式ケ國様

御家中と承り、御出迎ひと相見得乗組、長州様江御苦

勞之御事と、至而叮嚀御挨拶有之候旨、船頭為申出由、

一於大坂、先達而より長州一日ニ金千兩程ツ、買入、凡

拾万兩程ニ相及申候半、小判金茂過半は繰替候由、

一六月廿三四日方より長之人數追々山崎天王山江集り幕

張之由、宮は相よけ野陣之由、其幕は幾重も打張候由、

籠人數千人と之世評ニ候得共、凡五百人位欵、往来双

方ニ大砲式挺ツ、四挺、又南門之方江向ケ式挺、山之

上ニ式三挺砲門相見得、其内主將と相見得兩人壯年之

由、

一伏見辺江四百人程出張、諸寺ノ・旅込屋江籠居、別

而靜ニいたし候由候得共、凡町家は戸占メ之由、

一天王山近辺百姓共を長人雇入ニ付而は、纔計之事ニ而茂式朱金、小児召仕迎茂卷朱銀与へ候由、錢百文位之品買入式百文位払候由、

一天王山より伏見辺江物見と相見得、騎馬兩人程ツ、不絶追々乗廻り、

一兵糧は大坂屋敷より送越之手筈ニ候半、同所屋敷江四五百人籠り居候由、屋敷外廻り不絶行廻ル、

一天王山野陣江五六丁相隔、郡山之堅メ場有之、俄ニ人数手当追々固メ人数相増ス、

一廿五日期四ツ時分、長人三人列立、山崎より京江之街道筋京江向ケ通行之処、麻田出張固メ場より咎目掛、

御老人迎茂差通候儀不相成、我々役分ニ候間、一往夫々江相伺候上、御通行可被成一向相断候処、然は尤之

至、明日四ツ迄差扣居、其刻過キ候得は、押通ル迎立帰り候由、外ニ同所辺之於固メ場、咎目掛候訳は不分

候、

一長藩五六百人、江戸江差向候段、何角に同藩云ひ触し

候よし、

一長より前所可代淀并会津江用談有之とし、是ハ伏見辺

風説之よし、

一廿四日大坂御城代より諸家屋敷江有合之人数依時宜被

差出候様達相成候処、筑前・肥後・芸州は国許江間越

之上、人数可差出段、断切相成候由、

一淀町辺、合図次第ニは、人家銘々立退候様触渡相成候

よし、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三三七号

文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一四種 横三・四・三種

1000 朝廷ヨリ長兵へノ諭旨

写

長州藩士等頃日出願有之趣候得共、携兵器出張之由甚不穩候、元来於長州は、殊勤

王之志情深厚候処、右様之次第甚齟齬候間、天龍寺其外

江罷出候輩、各早々令帰国、福原越後儀小人数ニ而伏見

表ニ滞在、出願之儀は穩ニ經其筋可申出、重而之

御沙汰謹慎ニ相待候様可有説得旨

御沙汰候事、

右一橋公江御下ケニ相成、伏見出張大小監察より達ニ

相成申答、

文書原寸 縦一六種 横一〇一・五種

1601 一橋慶喜へノ朝命

一橋中納言

此比輦轂之下彼是不穩ニ付、御守衛惣督之辺を以、諸事

御任被遊候間、専勵精被安

叡慮候様可有処置被

仰出候、

(同文書ハ一〇七〇号文書ト一枚モノ)

二三 長藩主父子ヨリ国司信濃へノ黒印軍令状

申聞条々

一今度其方事上京申付、諸隊之者預置候、諸事無緩可管
轄事、

一伍中之者は令を伍長に受、伍長は令を隊長に受、隊長

は惣督之指揮を受、諸隊一和可為肝要事、

一私闘は不及申、輕拳妄動大事を誤り候儀は、尤嚴禁之

事、

一愆而非礼非義之振舞有間敷事、

一国家之動靜を猥りニ他江洩す間敷事、

一奸淫・大酒等堅禁止之事、

一僭上虚飾之衣服は勿論無用たるへし、愆而諸士・匹夫、

貴賤之分限不可乱事、

右之条々違背之者於有之は、軍律を以相糺、品ニ寄

切腹可申付者也、

元治元子

(毛利慶親)

六月



(黒印影・直径四種)



(毛利定広)

(黒印影・直径四種)

国司信濃とのへ



(黒印影・直径三・四種)

〔裏表紙ニアリ、朱〕
「甲子年」

冊子原寸 縦二六・四種 横一九・七種 二枚

103 久光公ヨリ近衛家へノ書翰草案

国事ノ件及短刀贈呈ノ件

尊翰被成下難有謹而拜見仕候、先以追日暑氣相増候処、益御機嫌能被遊御座恐悦奉存候、然は旧冬以来滞京中御懇命承知仕、殊ニ発京之時分は御品々拜領被仰付、難有仕合奉存候、私ニも海陸無恙先月八日帰着仕、難有安心仕、腰痛今ニ全快不仕候ニ付、当分温泉江入浴中ニ御座候、扱其後輦下之形勢転換之模様、種々御配慮被為在候由、御尤千万之御義と奉遠察候、誠ニ

御両殿様ニも国事御用掛御辞退被仰上候処、御免不被為在候得共、

前殿下様ニは再三之御願ニ付、被

聞食上候段被仰下、実以御残多次第奉存候、此末万々一朝家之御危難被為在候節は、傍觀仕候所存毛頭無御座候間、此旨真意御聞取被下度奉願候、且又御短刀之義被仰下、委細奉長候、早速取しらへ候所、御調文之寸法ニ而御指ニ相成候古刀無之、少し寸法は延候ニ付、思召ニ相叶候程合も難計奉存候得共、奉備 尊覽候、尤古刀と申候得は、当今ニ而は申分なき品別而相少く入り入候次第ニ御座候、乍筆末結構之御茶菓沓箱為仕被仰付、万々難有仕合奉存候、先は右御礼旁申上度奉捧愚札候、――

再白、修理大夫江御望之反物類差上候由ニ而、

御挨拶被仰下、側聞候処、御念被為入候御事と恐入難有奉承知候、形行差上候、以上、

文書原寸 縦一六・八種 横五八・六種

一〇七四 長兵上京ニ付京都大坂警備ノ幕令其他

合四通一綴

一〇七四ノ一

〔付箋〕
「甲子十月黒田嘉右衛門

持書ニ添五通」

〔朱〕
「於京地被仰渡」

井伊掃部頭家来より

長州人出坂、追々多人數ニも相成候趣相聞、此後之拳

動も難計候間、大津辺江早々人数差出、本多主膳正相

談、敵重御警衛相心得候様可致候、委細之処ハ在京大

目付・御目付可承合候、

同断ニ付、伏見辺江早々人数指出、井伊掃部頭・戸田

采女正・有馬遠江守相談、敵重御警衛相心得候様可致

候、松平筑前守江相達候間、申合一際敵重御警衛行届

候様可致候事、

一〇七四ノ二

〔朱〕
「猶又後被仰渡」

〔毛利慶親〕
松平大膳大夫家来共多人數、不容易行粧ニ而致上京、
不憚

公儀暴行之所業ニ付、制方不相用候ハ、召捕又は切

捨候而も不苦、且又於京師及異変脱奔有之候者、無用

捨前同様之取計可仕旨、依之敵重之御警衛相立候様、

大坂御城代松平伊豆守被相達候趣ニ而、同所町奉行松

平大隅守より昨廿四日、家来之者被呼出、以書付被相

達候ニ付、今晚撰州今宮辺・阿部海道辺江人数差出申

候、此段御届申上候、以上、

六月廿五日

岡部筑前守

一〇七四ノ三

〔徳川義宣〕
元千代殿

〔諏訪忠誠〕
因幡守

〔忠誠〕
水野出羽守

〔實美〕
太田総次郎

〔忠民〕
本多美濃守

〔井上正直〕
河内守

〔忠礼〕
大久保加賀守

〔正誘〕
本多伯耆守

〔大河内信古〕
松平伊豆守

〔忠教〕
大岡越前守

- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|------------------|---------------|---------------|-----------------|-----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 松平下総守
(忠勝) | 松平右京亮
(大河内輝盛) | 前田丹後守
(利純) | 牧野内膳正
(廉濟) | 松平丹波守
(台田光則) | 遠山信濃守
(友時) | 戸田采女正
(兵衛) | 成瀬隼人正
(正肥) | 堀田豊前守
(正義) | 遠藤但馬守
(胤盛) | 加藤左京大夫
(明軌) | 藤堂佐渡守
(高邦) | 稲垣若狹守
(天池) | 石川保之助
(裕盛) | 土方婿千代
(維心) | 内藤金一郎
(文成) | 松平和泉守
(榮株) |
| 松平大和守
(直克) | 安部撰津守
(信秀) | 板倉主計頭
(勝政) | 内藤若狹守
(頼忠) | 内藤志摩守
(正徳) | 松平能登守
(大船業命) | 戸田淡路守
(兵衛) | 永井肥前守
(尚忠) | 竹腰龍若
(正臣) | 井伊掃部頭
(直忠) | 本多主膳正
(康徳) | 市橋老岐守
(長和) | 藤堂和泉守
(高忠) | 本多いよ守
(忠實) | 増山対馬守
(正修) | 松平越中守
(定政) | 土井大隅守
(利忠) |

大岡兵庫頭 (忠愍) 西尾隠岐守 (忠愍)

右之面々江松平大膳大夫家来多人数異様之行粧ニ而出
府可致趣相聞、以之外之事候付、通行筋領主々々おの
て、兼而手筈申合、差留置取計方相伺可申、若押而被
通、不法之所業ニおよひ候ハ、無用捨討取候様相達
候事、

一〇七四ノ四

(土屋寅直)
先達而采女正領中江及乱暴候浪士田中源蔵之徒、領分
岩間村最寄水戸様御領分之よし、鯉洩・小畑辺江集居
致し候趣ニ探索も詰り、且岩間村領辺ニ而、金策等致
し候哉ニも有之、若乱暴放火等いたし候而は、重々不
容易儀ニ付、去月廿八日晝、同所江一番手人数出張仕
候、此段御届申上候、以上、

土屋采女正内

七月二日

上田小兵衛

冊子原寸 縦三・八糎 横一六・八糎 五枚

104 陰謀者逮捕嚴刑ノ幕令

京都御所向焼払計画徒党ノ潜伏ニ付

(牧野忠恭)
備前守殿御渡

大目付へ

古高俊太郎事升や喜右衛門と申唱四条小橋西江怪敷所行有

之、身分不相応武器并火薬等致所持居趣相聞候ニ付、

此度召捕一通相糺候処、不容易隠謀有之候ニ付、風便を

待テ、御所向焼払可申と相巧ミ、徒党数十人有之段申立

候、尤同類共申通之証書類も有之、片時も難捨置候ニ付、

夫々召捕候処、いまだ徒党も有之、中ニは身分・姓名等(姓)

偽り、藩邸或ハ町家江潜居候儀も難計、万一怪敷体之者

有之候ハ、各藩又は所々役人共ニ而召捕可差出候、尤

徒党一味之聞有之候ハ、探索之上召捕可被差出候、

但銘々在京家来同又者ニ至迄、自分姓名書江歳付致

候、屋敷内外在京之人数可申立候事、

右之趣、上京万石已上已下并家来、上京有之候面々江不

洩様早々可被達候、

右之通松平越(定敬)中守江相達候間、可被得其意候、

右ニ付而ハ、殘党共自然外々江脱走之義も有之候ハ、

不容易義ニ付、京師近辺領分知行有之面々并其余之面々

ニても、胡乱之者潜伏罷在候も難計候間、取締向儀厳重

相心得、篤と探索之上、見掛次第召捕、手余り候ハ、切

捨討取、悪徒共余党不洩様、駆尽可被申候、

右之趣、万石已上已下之面々、御料・私領・寺社領共不

洩様可被達候、

六月

冊子原寸 縦二四種 横一六・七種 二枚

二天 浜忠太郎松野三平ヨリ朝廷へノ訴願

毛利大膳父子三条卿等ノ冤ヲ訴フ

天下之禍変目睫ニ差廻候ニ付而ハ、回天之大猛断を以、

鏖伐膺懲之御大典、速ニ不被為拏而ハ、三千年来宇内

ニ卓立たる 神州も、鬚虜被髮之域ト相成可申ハ秦鏡

を以照見か如ク、不堪犯憂、草莽螻蟻之微臣共、非分

を忘却、不暇憚忌諱、石清水八幡祠前ニ參籠仕、血誠を縷述し奉奏言候、抑外夷之變起しより、日夜被為
惱

宸襟、屢攘夷之儀被 仰出候処、神奈川条約有司不取計

よりして、四五年間妖氛怪氣天地鬱塞、

叡念何時可被安欵ト四海億兆悲憤悶惋罷在候処、壬戌年

秋 勅使御東下、攘夷御督促、至去夏於

玉膝下、大樹公へ御直ニ御沙汰被為遊、期限布告被 仰

付、且 加茂・石清水之

行幸被為遊、竟ニは大和国

行幸、伊勢

神宮神拝ト迄被 仰出、愚夫愚婦ニ至迄感激踴躍、敵

愾之志を励まぬ者ハ無之処、豈計、去八月十八日 闕

下擾乱、三条殿其外并主人宰相父子

勅勘をも奉蒙、当正月ニ至、兩度之

宸翰、至四月關東へ一切御委任被 仰付、素より征夷

府へ御專任ハ可然候得共、乍恐攘夷 御督責、天下ニ

御先而御率勵被為遊候、前日之

叡慮ト齟齬仕候御義ニは無之哉、十余年来御確定之

聖断、富嶽崩るゝとも、湖水涵るゝとも御動搖可被為在

義理万々有之間敷候、併

九重深遠、讒誣欺罔之不得已御事かとも奉恐察、胸膈

寸裂、何処ニ哀訴可仕、呼天号地不堪悲泣、痛哭之至

奉存候、讒誣欺罔之輩、喋々口実と仕候処、一通着実

之様相見候へども、其実は因循姑息ニ陥り、一日之安

は百年之禍なるを顧ざる者ニ付、聡明之

聖察を以、如燃犀御靚破不被遊而は、実以御大事ニ關係

可仕候、砲銃艦舶之巨大を誇張し、奇拔淫巧を以、希

靚を艶称して奉惑乱一也、不可欠日用之物貨を濫出し、

貧窶之益困窮をも弁なから、以無用之品有用之品ニ交

易する杯奉惑乱二也、夷域之広大富強を衍述し奉惑乱

三也、宇内之形勢を達観し、知彼伐謀ハ通商航海ニ安、

攘夷ハ如逐蠅征夷ならて、巢穴を毀事不相叶など、虚

大之説を以奉惑乱四也、敵之先声ニ畏服し、戦之勝敗

を計較し奉惑乱五也、身家之私計を謀らんハ為万世之利害を顧す、目前之利害を巧説し奉惑乱六也、如此因循修飾之心を以醜虜之猖獗ニ庄倒せられ、幾百年経候而も、実験無之武備充実之説を以奉惑乱七也、恭惟

聖明英武、夙ニ夷狄包蔵之邪心を御観破被為遊候御事ニ付、今更乍恐御惑乱ニ可相成筭万々有之間敷、元より器械之利鈍、夷域之広狭、宇内之形勢且勝敗利害巨細詳悉、武備弥増充実不仕而は不相叶候義、勿論ニ候処、恐多も

天津日嗣之知食

皇国ニして君臣之義花夷之弁、明哲相立候御国体ニ付、先年来御必勝之御成算ハ被為在間敷候得共、大義之所ニ在

聖断被為在候御事ニ付、戦之勝敗ニ御頓着ハ有之間敷、元来国家之荣辱は勝敗ニあらず、国体之立ト不立トに可有之、況や武備充実ハ癸丑以来、乳臭黄吻之児も口実ト仕候へ共、十年之久更ニ御験不相見、十年之後今

日を見、猶癸丑以来同拜奉存候、同様ハ猶可(有之脱カ)ニ候得共、恐は夷狄之術中ニ陥り、正氣消滅、左衽之俗ニ変し可申ハ必然、不然是壯夫烈士切齒堪兼、四海鼎沸可仕ハ列炬を燃して見か如ク、不堪慨憤奉存候、去八月三条殿始邊ニ御咎被 仰付候義、如何なる御深旨ニ候也、不奉得候へ共、年来攘夷之

淵衷御承順被為成、内は 皇室を輔翼し、外ハ醜夷を掃討し、神州を富嶽之安ニ措んと(純)の強忠至誠ニ被為在候段、誓天地奉哀訴、痛哉、

紫闥丹墀之上ニ鞅掌拮据被為在候縮紳之御方、今日は(宜嘉)辺陬僻遠之境ニ御憂慮被為在、(願徳)沢殿ハ御脱走、錦小路殿ハ御逝去、元より攘夷御先鋒之御志願とは乍申、勅勸之御心情不堪想像、実以血泣之至奉存候、且於宰相父子は御不審中、入京不被 仰付候段、是亦不奉得候候へ共、父子先年来

官武之御間ニ尽力仕、東馳西馳、於関東武百年来之廢典ニ相成候御上洛をも建白仕、且在京中無勿体も、加

茂・石清水之

行幸をも奉奏言、殊ニ攘夷期限御布告後は、日夜忘寝
食励精不懈、尊攘之大義を闡藩に布キ、士氣を鼓舞し

叡慮遵奉、台旨承順之外他念無之儀は、追々差出候上書

類并奉 勅始末之詳悉仕候、畢竟十八日之擾乱、三条

殿を始、宰相父子之 勅勸を奉蒙候儀、全大和国

行幸、軍議可被為遊との御事件より出来ハ不仕欵奉恐

察候、当時之事件他ニあらず、五大洲之大寇を引請、

攘夷之大義断然被 仰出、期限御布告ニ相成候得は、

和戦開鎖議論紛々、斯形勢ニ而

叡念も貫徹仕らず、皇国之御武威海外ニ輝候杯は扱置

内地之紛乱も難測ニ付、此上は、乍恐

玉体を御勞し被為遊、天下之士氣御率励被為在候得は、

於関東有司感奮、台意も相貫、於列藩も方^(アキ)を知得可

申、国内一致之基本、かゝる非常之

聖断ならては相立申間敷ニ付、石清水迄

鳳輦御進発、攘夷御指揮被為遊度、責難ハ臣子之大義

且兼而

御親征之思召被為在候段、奉伺居候ニ付、無勿体も時機

建立仕候義ニ有之候処、豈計、

神断意外ニ被為在、大和国 行幸、伊勢 神宮御拜之御

沙汰被 仰出、引統十八日之擾乱ニ立到候次第ニ而、

三条殿始宰相父子、更ニ他意無之、日夜眷々不堪恋

闕之至情罷在候、然処三条殿を始宰相父子、御不審之

御廉も被為在候へは、乍恐

玉座近ク被召出、心事巨細奉経

天聴候得は、自然

宸疑可被為霧御義も可有之欵、万一

淵衷ニ不被為叶御義も被為在候節ハ、幾応も

聖諭被 仰聞候へは、如何計感激奮興、益為

皇国身骨を粉齏可仕候、実以非常之御時節ニ付、非常

之御涵容被 仰付、回天之

神断を以倒海之大寇御掃討被為在度、不堪千祈万禱之至

奉存候、古今創業中興之事蹟を熟覽仕候、枕戈横槊之

勞、座薪嘗胆之苦無之して、成就仕候者ハ万々有之間

敷、近時諸蛮夷之拓国広地或は旧地を恢復し、独立不

羈之國ト相成候も尽皆劍槊相摩、彈丸雨注之際ニ成就

仕候者ニ而、世間航海者流之浮汎虚大之説を唱ふるの

比ニあらず、牀蓐枕席之際ニ而は、如何なる神算鬼籌

有之共、画餅ニ屬し可申候、成否得失猶如此、況ヤ

國家之大讎、猶大義片時も遷延被為在間敷御事と奉存

候、然則速ニ御国体を被為建、大義を以、勝敗ニ関ら

ず膺懲之御実験、関東へ御督責被為遊、且三条殿を始

宰相父子之赤心、覆載之御涵容被為垂、天下之士氣御

率勵之

聖断被為遊候へは、四海億兆如何計歎喜踊躍可仕、倒海

之大寇御掃討非難、所謂断而行之鬼神通之ト奉存候、

草莽之微臣等誓神明、冒万死奉冒瀆威敵候、石清水之

昨年

行幸之靈地、草木も皆

翠華之余光を奉被、四顧彷徨不堪感慨之至、誠恐誠惶

再拜稽首敬白、

元治元年子六月日

草莽微臣

浜 忠太郎
松野三平

冊子原寸 縦二八・七種 横二〇・三種 九枚

1034 長兵山崎天王山へ持参ノ書付

長賊山崎天王山江持参候書付写

皇室失權殆千年矣、元弘嘗一収之、而復先之今臨、元弘

五百年矣、聖主出焉而有夷狄之禍、天荐降災警之、

上大懼詔攘之、霸府畏夷不奉詔、反議廢立、於是天下始

背霸府、壬戌之春関西義徒相招聚入京、先欲亂之罪、

而後攘夷、先是有諸侯勸霸府奉詔攘夷者、特我長之相公

数諫之不聽、相公以為義宜絶之、乃使世子入衛京師、霸

府且因循無絶夷之意、上遣我三条公督促之、相公遂躬

入衛、諸侯倣之相繼入衛、癸亥之春霸王入朝、親受 叡

旨、而猶因循不決、上怒之直命攘斥之期、相公奮而奉

之、伐夷舶之過其封内馬関者五焉、皆克之、上遣使賞

之、霸府則遣使難之、相公不受、長人殺之、相公遣其族(蘇楚)吉川氏其大夫益田氏入衛、且奏曰、霸府与諸侯苟且優遊不足恃也、宜親征以褫其胆、且悚動乎天下也、上聽之、幸于大和、拜大祖陵及春日祠、大議軍事、尋幸于伊勢、
拜

天祖廟、期既剋、時命(朝彦親王)中川王、鎮撫九国、王辭之、愈

強愈辭、更命(藤仁親王)帥王、王受之、中川王夜遽入大内、引会(松平

侯及薩人、却上停(実美)三条公以下十余人朝參、使会薩之兵

衛宮、銃砲狼藉、士卒充斥狂忘甚矣、迺宜言長人謀叛、

長人大愕聚(藤可親忠)関白鷹公第、三条公率親兵七百而奔投于此

諸卿亦來、諸藩兵亦來聚、兵凡三千矣、議入而掃賊、而

宮門皆為賊所拋、不如何之也、乃入大仏寺議且退長国、

而再拳決焉、西下実三条公(三条西季知)、西三条公(通勝)、東久世公(隆壽)、四條

公(頼徳)、錦小路公(宣嘉)、沢公(基修)、壬生公七人也、諸公館于三田尻、

相公与世子更來弔、乃議再拳、嗚呼神州禍難亦多、嘗有

女真・胡元之難、皆拒之不納、寇則鑿之、今洋夷之來、

始請和親交易許之、又請者不許、則觀兵以強之而吞噬之

機見矣、然天下泛然攘斥与和親二說相雜、而中川王悻逆又發、乃邪正相混、是非相淆、禍實極矣、然而三条公与相公之執義、天下拳婦心、而天下之正氣聚于此、相公之拳其成可知也、蓋相公之拳非長国之拳也、上之拳也、而皇室恢復成与否之所判也、故其戰可必勝也不可負也此籌策之所宜以熟也、画三策

大会廟堂酌酒相盟、世子帥軍、三条公以下皆俱其軍号为本ノマ五万、相公居守此大事也、宜相公躬帥之也、而世子任者使賊以為此拳、世子優為之、而出兵之不窮為備之、周密而俱之之術也

支藩某侯々々・大夫某氏、守東南北海面、乃使猛将率勇

士、海上直進破華城、抛之以斷敵之糧道、別以二三隊、

南瀆岸和田、進入河内、撫其民而往來、為華城策心、又

以二三隊、陰入京火二条城及霸吏所屯、或叫于山或号于

市、出沒隱見不可測、撓乱繩藉不可治、漸進火膳所・彦

根城、而抛湖東以硬東山・北陸之道、又約帥王使之抛

越羽之地、擣会之虛、霸府不得西也、乃世子長驅入京、

依嵯峨之勝凝然不動、奏曰、中川王篡位其跡云云、請糾

其罪、先是窃授鷹公秘策、使之与万里鳥公、諸公内心則

制賊之死命存我之掌握、為之上策、

大會廟堂酌酒相盟、乃分軍為上中下、上軍千五百人、某侯為帥先發五日、進軍向日、中軍五千人、世子為帥陣嵯峨及嵐山下數所、下軍千百人、挾猛將為帥後發五日、退陣山崎、三条公以下皆在中軍、特久世公率浪士、年少而勇悍者在下軍陣定、依 関白鷹公乞罪、其訟八月十八日前後邪正如何、因以請糺會之、却 上以誣賢之罪、又數遣使諸侯之陣、囑佑我軍、而我之遣使則一人撰數陣、彼各發一使集我陣恒數十、而道路相接、會及霸吏見以為、長与諸侯合從、則會勇而無謀、必怒而起矣、我以上軍伐之、如不得已者、而下軍分為三隊、皆向華城、一隊直取城、一隊出其南、蹂躪于諸侯番兵、一隊出其東北、号呼村落間、皆以火助勢、神速如殞于天、不知所備之、復合為二隊、一隊守城、一隊出沒于河・撰間、与城兵相策応以絶糧食入京、又守軍、遣二將各率兵千余、一將進軍三井寺伐賊之東歸者、且阻東兵之入京、一將略丹之諸城、進屠若州、且引俱兵、共上叡岳及愛宕山瞰賊于卑、使之

不得動也、闕其一方、使之得生路而逃亦可也、為之中策、部署既定、勒而不出、乃使支藩某侯入京、依関白鷹公訟寃、且請八月十八日前後邪正所在、其辭懇到深切、世聞之如無不墜淚者、又發數使遣諸侯之陣、囑為我雪寃、其辭公平質直、人聞之如無不感義、則関白必拮据矣、諸侯必周旋矣、縱不皆然、一二侯之佑我、今日且有之、況我切求之乎、乃大拳徐々而進陣形勝、數所勒兵如待敵、乃備礼入朝、奏請糺會侯狂妄之罪、此日從輕兵少許成、我陣如備不虞者、皆内以待命退焉、遽引兵入大内而拋之、如十八日、賊之所為以徵、賊來者縛之、不來者伐之、先是選浪士強悍而有謀者數人、各率數十百人、貸之戎器・金穀、四散遽襲霸地、拋之以劫奪沿辺、又陰入京火營、焚糧蕩滌蹂躪、又放反間、射書遺簡、賊眩乎所從、惑乎所合、此可亦以為事、為之下策、

或人曰、上策奇則奇矣、然世名乎長為謀叛、今行此策則似踐其實、如何、曰、果行此策則万々我事成矣、成而其跡之不美何害于事、兵詭道、此其当也、何倣宋襄而壞天

下之大事乎、或又曰、万有一不成、如何、曰、速退而守

也、今我之所為、世之所不測、所謂動於九天之上者、既
褻其胆烏得有、以兵加我者乎、此以攻為守也、而其跡之
不美、我心光明正大、天地鬼神知之、非所恥也、

或曰、既停入朝、強而入則以、勅停之必矣、如何、曰、
今日之、勅云者、中川賊之所為也、偽也非真也、若以之
為真則我無可為者、假令有來奪我封則納之耶、不納之則
為違勅耶、特至其時為偽者非也、

或曰、八月十八日、賊軍士卒既內銃砲、既擬而猶未發、
而我今以戰臨之似暴、如何、曰、彼非慎也怯也、今日之
事、在于戰之勝負、能了此意者得志耳、

或曰、出軍千里日費千金、今千里外用數萬之兵、顧國
用不給、如何、曰、因糧于敵兵家之秘訣、浪華天下之泉
府、取之則百年可供、此華城之所以、可必取也、

或曰、囑諸侯雪我冤、似乞哀者、如何、曰、有慶則告之
賀之、有憂則告之弔之、諸侯之常、今我之所患非一國一
家之事、而告之請之禮也、正辭而請之、義則不屈、何謂

乞哀也、

或曰、今我之有患、無諸侯之問之者、雖囑之雪冤、誰庇
之乎、曰、諸侯不足恃、其庇之与不庇之未可知也、此策
之所以為下也、相公獨奮、以防長投、皇室偉矣、今求与
國、此自背素志也、而求則彼為主我為客、客為主所使常
也、醜矣、不如無囑也、然我如為彼所使、而我反使、彼
亦有術焉、今日之事、術亦不可廢也、

或曰、浪士之來衆矣、試与之語、皆無才能、亦為刺客奸
未可知也、逐之可也、曰、其來者多、是曾遊京師、而遭
十八日之變而逃者、又有國者此以正議之所在欣慕而來者
耳、雖無他才能、離父母棄妻子、而欲報

皇室之意則切矣、此可取也、今視防長、於天下為十分之
一、而不依十而依一、非挾正与不正者乎、此可憐也、周
末五公子皆有食客三千、況我大而執義者而可逐之乎哉
其志之可取、亦非彼鷄鳴狗盜之比也、其為刺客奸人則所
宜慮、然一面則其人、可知防之自有術、

或曰、今我大軍軍需甚多、貸客以戎器、金穀、可謂愚也、

曰、我不可戰而使客戰術也、而彼客則自喜而戰者、貸戎器・金穀雖少而為多、若更雇人而使之戰、則戎器・金穀而已而可哉、

或曰、大華斯如何、曰、兵貴神速、議決則勿猶予也、或又曰、機會如何、曰、十八日以後皆機會矣、兵法曰、形之敵必從之、予之敵必取之、拈之則機會云者亦主將為之、或曰、今京師之兵殆十萬、我以數千臨之、勝敗如何、曰彼雖衆多烏合也、又有戰心者方之一、我一軍皆熊羆、且孤軍無^{本ノ}死地者、所謂一人當千、何傷寡哉、

或曰、中川賊可惡、刺之一ニ力士之事耳、如何、曰、予始聞足下說、則為快而熟思之非、癸亥十月十九日作平計也、何則彼賊雖去之、霸則依然霸之不去恢復不可^{此間欠字アリ}

今賊与霸合斃之、則所以斃霸也、且彼因循優柔則我亦不可遽以果激加之、今幸而賊勢猛烈、用兵有名、不如置之而為資也、昔東照公救三成、假之數年之命、故有関原之事、得以取天下也、今日亦可思之也、

（裏表紙ニアリ、朱）
「甲子」

（本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三八二号
文書ト同文ナリ）

冊子原寸 縦二八糎 横二〇・三糎 八枚

107 久光公ヨリ伊達伊予守へノ答書草案

帰国後ノ情報

五月廿一日之芳墨、当月初相達辱拜誦仕候、先以炎暑之御御座候処、

御闔門様御揃愈御安全被為渡奉恐喜候、扱先般御暇參内首尾能相濟、加之官位昇進被 仰付、誠に冥加至極恐入奉存候、右御歛委曲被仰聞辱奉存候、乍併実は不肖鄙野之愚夫、無益之義と恐縮之至御座候、御推察可被下候、且御滞京中之御挨拶、御懇篤被仰聞、御密合義辱奉存候
実以

貴君之御蔭を以

公武共万事都合能相濟、別而辱奉存候、併御互ニ懇交之故を以、失敬之義も有之候間、御海容奉希候、貴君ニは海陸御無事御早着之由、奉恐悅申候、

御老父様にも追日御快方之筈と奉存候、御定省之節宜敷

御伝声奉願候、僕ニは御承知之通、乗船器械相損し、久

留米借用船江乗替、夫故国元迄廻船出来兼、細島より上

陸、先月八日帰着仕候、早速滞京中之御礼等可申上之処

着後国務多忙且腰痛為保養、温泉江差越、今以而入浴中

ニ御座候、夫故遅緩相成、不埒之至御有恕可被下候、

先は貴報旁奉呈愚札候、書余之心胸は奉期後便候、恐々

頓首、

二伸、炎熱之砌、為天下御保護專一奉存候、(一橋慶喜)飛鳥一・飛

井雅集(野宮定功)野へも御鶴声被成下辱奉存候、僕ニも無異入浴仕候、

御放念可被下候、扱御別紙を以、航海運用伝習之義

被仰聞、委細致承知候、此義は御案内通大略相心得

候者、昨冬馬関之魚腹ニ葬られ、相残候者共は、未

熟之者ニ而、夫故乗船器械破損も相生し候仕合ニ御

座候間、迺も他藩江指南仕候義は相整不申、実以残

情奉存候得共御断申上候、委曲は在京之小松より可

申上候間、文略仕候、頓首、

文書原寸 縦一六・八糎 横四五・二糎

正親町三条実愛ヨリ二条斉敬へ

福原越後ヲ入京セシムヘシトノ建白

(端裏書)
一〇実愛」

福原越後入京歎願仕候趣、於同人は專致鎮撫候趣ニ付而

は、入京被

仰付、今一際可尽力

御沙汰被為有候は、必鎮撫可相尽と存候、(親祐)根来・井原等

同様ニ而は鎮静も不相届、弥以可及憤激と存候、何卒此

段厚御勘弁奉仰候、長人入京不可然趣、過日於

御前

御宸筆拜見被

仰付候処、押而右申上候段、定而可蒙敲譴儀と兼而相心

得候、於微臣は何様御咎被

仰付候共、聊遺念無之、只々右願意不相叶候而は、実ニ

御大事之場と奉存候ニ付、不願恐申上候、巨細猶又演説

可申上候得共、差迫候時勢、時日遷延之内、又々混雜等
生し候も難計ニ付、先不取敢右申上候事、

七月三日

実愛

右二条殿下御方江昨日差出ニ相成候由、

文書原寸 縦一六・二種 横一〇六・三種

100 飛鳥井中納言野宮中納言より島津大隅守

殿へ

島津久光公の返翰草稿

請書共二通

京都へ出兵の件

一〇八〇ノ一

(包紙ウツ書)

島津大隅守殿

飛鳥井中納言

野宮中納言

□(朱)

┌

大暑之砌、愈御安康珍重存候、陳は頃日長州家老福原越
後出府之趣申唱上京、伏見表ニ一兩日滞留、又同藩并浮

浪人相交、凡五六百人山崎ニ滞在候処、去廿七日山崎滞

在之面々、携兵器押而入京、嵯峨天龍寺ニ屯聚、不容易

形勢候間、右輩引弘各令帰国、福原越後儀ハ伏見表ニ於

て、若出願之儀有之候ハ、穩ニ経其筋可申出様可有説

得旨、一橋中納言へ被

仰付候間、不日鎮静とハ存候得共、万々一

帝都御危難之程も難計、其節は乍御苦勞、神速上京有之

候様被遊度旨

御沙汰候、仍申入候也、

七月三日

(野宮)

定功
(飛鳥井)

雅典

島津大隅守殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第五九五号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・二種 包紙原寸

横九二・二種

縦二八・二種
横三九・八種

一〇八〇ノ二

去三日之芳翰、十九日相達、謹而拜見仕候、先以残暑之

御御座候処、御所様愈御安全被成御座奉恐寿候、陳は

今般長州家老福原越後出府之趣申唱、伏見表ニ一兩日滯

留、又同藩并浮浪人相交、凡五六百人山崎ニ滯在之処、

去月廿七日、山崎滯在之面々、携兵器押而入京、嵯峨天

龍寺ニ屯聚、不容易形勢候間、右輩引弘各令帰国、福原

越後義は、若出願之義有之候ハ、於伏見表穩ニ経其筋

可申出様可有説得旨、一橋中納言へ被

仰付候間、不日鎮靜之筈候得共、万々一

帝都御危難之程も難計、其節は神速上京仕候様被 遊度

勅命之趣被 仰下、不肖之微臣恐入難有謹而奉拜承候、

朝家之御為尽死力周旋仕候は臣子之当然御座候間、

御危急ニ被為臨候節、傍觀仕候所存毛頭無御座候間、此

旨厚御汲受可然様御執

奏被成下度奉伏願候、先は右御請奉申上度、奉呈愚札候、

恐惶謹言、

七月廿一日

島津大隅守

飛鳥井中納言様

野宮中納言様

御請

再白、帝都變動之趣、承知仕候ニ付、早速修理大夫(島津茂久)

申談、蒸気船より警衛之人数上京為仕候間、最早着

京仕候義と奉存候、尚亦御用も御座候ハ、追々登

京申付候考ニ御座候、此旨御含迄ニ申上置候、以上、

〔本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第五七七号

文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・八糎 横五六・五糎

一〇一 横浜鎖港実施及長兵引弘ニ付幕府へノ

朝命

〔朱〕「本文国事掛等御吟味ニ而御草稿」

一横浜鎖港之事、大樹在京中、於

御前御請、誠実可丹誠被

思食候処、今以遷延、談判取掛候様ニも不相聞、如何

之事候哉、度々遵奉之儀候言上之末ニ付而は、尚又速

事蹟相頭候様可致、尚追々監察使被差下候得共、先以

右之趣、

御沙汰候事、

(朱)
「朱書前条同断」

一 武備充実之儀、兼而 御沙汰も被為在候得共、猶幕府

其外万石以上以下分限応し、年々規則を定、器械相整

候様可致、尤其心得ニは可有之候得共、更

御沙汰候事、

(徳川慶篤)
水戸中納言

(朱)
「朱書同断」

横浜鎖港之義、松平大和守申合、(直克)事蹟相頭候様可周旋

被

仰下候処、今以其沙汰不及、彼是不都合之次第も有之

趣、如何ニ被

思召候、且贈大納言遺志ニも令齟齬御不審之至候、依

之禁足被

仰出候、尚近々監察使被差下候節、

御沙汰之次第も有之候事、

水戸中納言

(朱)
「本文橋公より差出シ相成候、此方御達ニ相成候由」

横浜鎖港周旋之義、先般建白之趣も有之候付、松平大

和守申合可有尽力旨、分而被

仰出も有之候処、於大樹は東下後格別奮発之趣相聞候

得共、大和守在職候而は、人心不居合之廉を以て、退

職取計候旨言上有之、右は一切委任とは乍申、兼而

御沙汰も有之候儀、伺も無之、妄右様之取計いたし候

段、对

朝廷前後齟齬之周旋、心得方如何と御不審思召候、右

様之次第ニ而は、此上幕府政体も不相立、弥以人心不

居合之筋ニ付、屹と

御沙汰之品も可有之処、贈大納言忠勤之儀も被

思食、別段不及御咎、鎖港周旋之儀御免被遊候間、当

分之内出勤見合、幕政へ相携り不申様可致旨、

御沙汰候事、

七月

〔朱〕
「朱書同断」

一横浜鎖港之儀、大樹於

御前御請、東下後誠実丹誠之由相聞候得共、執政以下
彼是混乱を生し、今以手段及遷延候趣、右は御請之儀
厚申立も有之候付、一切御委任も被

仰出候処、物価引下、有用品数差留方等之儀、制限不
相立のミならず、兼而

御沙汰も有之候、松平大和守儀、水戸中納言取計を以、
伺も無之、退職申付候事件等総而如何之事

思食候、度々遵奉之儀言上之末、右様内政不相整、異
論差起候様ニ而は、外夷之義は姑差置、御国内治乱も
如何と深御懸念被遊候、就は大和守儀、速ニ役職、鎖
港手段相頭、前条物価引下、有用品数差留方等、屹と
尽力可有之、此上万一及遲緩候ハ、尚

御沙汰之品も可有之旨、被

仰出候事、

七月

〔朱〕
「同断」

一武備充実之義、兼而

御沙汰も被為
在、於幕府も夫々尽力之事ニは候得共、鎖港等之義、
別紙之通被

仰出候付而は、万石以上以下分限ニ応し、実備相整候
様可致、猶列藩怠緩之向も候は、大樹ニ於て屹と取調
嚴重可及沙汰旨、更被

仰出候事、

七月

〔朱〕
「一」
如論昨夜は得貴面、大慶之至、其後愈御清福珍重不斜
候、陳は監察使被差下、御方ニも相成候ハ、為周旋
隨從之義、人体御問合之処、右は一先御別紙之意

御沙汰被 仰下、右模様ニ寄御評議御座候方可然哉、

勤弁致候間、此義後日可得貴意候、且別紙之意も関東事情と致齟齬候而ハ、貫徹之場ニ至兼候半相考候付、乍如何愚案を以応答進申候、尚又宜被尽喜議候様、所折ニ御座候、水戸中納言義は兄弟之間、何共難申上御座候得共、禁足被 仰付、猶亦監察使下向之節

御沙汰御座候趣ニ而は、二重之姿ニ相成、一藩之居合も如何と愚考仕候付、何卒御別紙之意宜被仰合候様奉願候、書余拜面可得貴意候也、不備、

七月三日

一橋中納言

野宮中納言殿

尚々、御端書之趣委曲得其意候、以上、
別啓、(松平容保)肥後守乘輿參

内之儀も不束之次第ニ御座候得共、当節柄非常之砌、且大病中之事ニも御座候得は、御寛容被遊候方と勤考仕候、此段宜被 仰合候様存候、以上、

(朱)二字不相分
猶々、を以、御所置無御座候様致度候、非常

之折柄ニ候得は、此義は御寛容ニ被成下候方可然

候、(朱)「敬」小事吾ニ大事を過チ候様ニては不宜と存候、無御如才候得は、任心付申進候、以上、

小子義、中暑ニ而今朝より平臥、急認別而乱筆、御覽被遊候、以上、

口述

愈 抑昨夜於省中、一橋江掛合ニ相成候書取一件、今夕三所漸相廻候付、從 野宮被差出候付、先早々御通覽と存候、何れ明日例刻參集、御評議之上ならてハ、御治定ニも難相成候哉と存候、殿方ニも明日は御參候様と存候、先は早々如此候也、恐々謹言、

七月三日

追申、右別紙一橋より申上候通ニ而、強而御所存なく候ハ、其趣御示教希入候、何分明朝迄ニ、早々御順達相成候様希入候也、

齊敬

(雜大寺公純)
右府公早々

〔朱〕「本文七日ニ被 仰出候、一橋より之草稿ニ而差出候よし」

一長州藩士等、頃日出願有之趣候得共、多人數兵器等携

所々致屯集、甚不穩候、元來於長州殊勤 王之志情深

厚候処、右様之次第甚齟齬候間、天龍寺其外へ罷出候

輩、各早々令帰国、福原越後小人数ニ而伏見ニ滞在、

出願之義は穩ニ經其筋可申出、重而之

御沙汰、謹慎ニ相待候様、幕府より為及説得候、歎願

之筋 御許容之有無は暫差置、一体入京之義は、兼而

被 仰出も有之義、殊兵器ヲ相携、不穩所業甚以如何ニ被

思食候、就而は猶此上各藩、右之

御趣意を以、天龍寺其外へ屯集之輩、明後八日朝迄ニ

引払、致帰国候様、精々尽力説得可有之

御沙汰候事、

右之儀、從

朝廷も被 仰渡候得共、幕府よりも夫々申渡有之候様

可致候事、

七月

〔裏表紙ニアリ、朱〕
「甲子七月」

冊子原寸 縦二八・八糎 横二〇・四糎 一〇枚

二〇ニ 小松帶刀ヨリ在国ノ重役へ

禁門ノ戦直前ノ朝議

於其御許

上々様御揃御機嫌克被為

入恐悅御儀、御同慶奉存候、

於爰許

両公子御安康被遊御座奉大慶候、去月廿七日蒸氣船便

より申上越、其後何刃因循ニ流れ、今迄滞陣ニ相成居

申候形行左ニ申上候、

一廿七日夜は国事掛御方々・一橋・会津・所司代等、夕

刻より参

内ニ相成、段々御評儀有之候処、正三卿之説、宰相父

子之処上京被仰付候様、七卿之処は脱走故、其様ニは
致り兼申候と之議論頻ニ相起居申候由、然処一橋参

内ニ相成、只今左様之

御沙汰ニ相成候而は、決而不相濟、此節歎願ニ兵器ヲ携入京之次第、成程臣子之不忍詛とは乍申、実ニ歎願之趣意ならハ、裸ニ成綱ニ掛、愁訴いたすならハ、亦情も御察可有事ながら、兵器ヲ携へ出張

禁中ヲ奉動候次第、甚以不届ニ御座候、早々人数曳取候様

御沙汰有之度、無左而は

朝威も無之、遑逅守衛総督被仰付候義も相立不申、万一彼より被動候而父子入京共御免ニ相成様ニ而は、私并会津も早々御断申上、曳取候外無御座候、若人数不曳取節は、追討之命ヲ以誅シ候外無御座候間、左様有之度段言上ニ相成候よし、公卿方跡之變ヲ恐レ、因循之説も相立候よし、乍併一橋言上通ニ(西郷隆盛)御決着ニ相成、別紙御書付等御渡し相成申候、非藏人迄(近衛忠房)大島ヲ内府公より御呼ニ而、兩条之説相起候間、何れ之方可宜と御相談も有之候、此方ニ而は全体一橋之論通之持

論ニ而取極御答申上候処、

一方ニは御安心ニ而一橋言上通ニ御決シ相成候由、

一竹田街道其外江堅メ之人数は不相替向ニ御座候、長人之処も別段相替候拳動も無御座候、天龍寺人数式十人計大秦迄出張、通行共差留候向ニ御座候、外道より法輪寺江差出張、為何事も無之候間、例之虚喝ヲ以多人之形を成し居候ニは相違無御座候、天龍寺へも三百人位は罷居候向、三条殿・壬生卿之兩人は天龍寺江被参候と之事ニ御座候、龜山江幕張等いたし、遠見番等出張いたし居申候、

一朔日ニ一橋公より拙者御召ニ付罷出候処、伏見江大小監察出張、人数曳取候様

朝命之趣相違候間、若自然不承知之節ニは誅伐之賦候間、人数差出候義如何と御叮嚀被仰聞候、此方人数之義は兼而非常之

禁闕警衛之為ニ残置申候間、一橋より之御達ニ而人数差出候義は出来兼候段申出候、

朝命相発候上は差出申候段断切候処、夫ニ而相濟申候、
橋邸ニは大小監察等出仕ニ而騒働ニ御座候、

一 兩宮・内府公之所は一往 御達之上、不承知之節は、

命ヲ以御追討之御決定ニ相成居候よしニ御座候、其処

ニ相成候ハ、兎角我兵も不発ニ而不叶義と手当等い

たし居申事ニ御座候、昨夜伏見ニ而大小監察等より福

原江

御沙汰之趣相達ニ相成、御達ニ相成候筈ニ而出張ニ相

成候得共、福原病氣ニ而、今朝迄御待被成下度申出候

よし、今朝御達之上如何之答ニ可相成哉、未否不相分

候、

一 昨夜も四ツ時分より一橋公参 内ニ而、関東表川越(松平直克)

公も退役ニ相成、久世・安藤再勤之向候間、川越公ハ

再勤、水戸公は慎ニ而も被仰付候様有之度段及

言上、御評議之上、御書付等出来ニ相成候よし、未右

之御書付ハ拜見不仕候、

一 去月廿七日夜は、既ニ戦ニ可相及勢ニ而、御屋敷中も

必死ニ決心いたし居候処、其後昨日迄も只々因循ニ流
レ、色々説も有之候由、併今朝は御達シニも相成たる
筈御座候間、今明日ニはとちらニも決シ可申、若追討
之

勅命相下候ハ、我兵も繰出し之賦ニ御座候、先便よ
りも申上候通、今度戦ニは大義相立候軍可致賦ニ候、
此方江も討手之命相下り候ハ、天龍寺江向可申候、

一 翔鳳丸より申上越候通、人数御差出し之義は、早目ニ

御差出有之度、此末は日本中大乱ニ可相成義と奉存候

間、兎角備ハ嚴重ニ有之度御座候、

一 伝奏衆より

本文長岡長之助公江も相下候由、外ハ無之之事ニ御座候、
中将様江御書、昨日御留主居御呼出ニ而御渡相成候付

御召共ニ而は無之哉と、内々 内府公江相伺候処、若

変事ニ相成候ハ、命ヲ御待無之 御出京有之度御内

命之由承知仕候、自然早々御召と申事共ならハ、如何

様と歎尽力いたし申含御座候得共、右之形行故、今日

岩下正左衛門急キニ而差出差上申上候、此節は誰ぞ差

下シ、事情彼是可申上候得共、此方も人数差支等ニ而、其上別ニ相替候事も無御座候付、此上相替候形行等ハ誰ぞ差下シ可申上候、先は此旨申越候条、被達

貴聞候義、可然様御取計可被成候、以上、

七月四日

巳之刻認

小松帯刀

〔本文書ノ一部ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三
四二号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六糎 横五〇九糎

二〇三 人吉藩那須四方介ヨリ伊地知壯之丞へ

藩用ヲ以テ鹿兒島出張中

〔封紙ウツ書〕
「伊地知君

那須拜」

一輪拜呈仕候、益御勇猛被為渡奉恐賀候、然は過刻ハ大暑之比、態々御来駕被成下寛々奉伺、千万ニ付次義奉謝候、色々御面倒之事而已奉願上候所、程能御聞置被下難有奉存候、何分宜敷御含可被下候、扱亦別段御内談之一

事、誠ニ以御懇切之至ニ深難有感銘仕候、御帰り後篤と

勤考仕候処、御発駕日限も相迫り居候儀にて、甚以案勞仕候間、御使者之御返答被為濟候は、一日も早く引取、夫々之手数仕度と奉存候、御催促申上候訳ニは毛頭無御

座候得共、御返答御都合御内々御含被成下候様奉願上候、

弊藩は世間之事情不相分、只空ニ心配仕居候事ニ付、可

成丈差急帰国仕、万端之都合不仕候而は、自然後れニ相

成り、事相発シ候上は、又々致兼候場合茂出来可申哉、

心中御察可被成下候、右ニ付而ハ今一度拜

顔、縷々願置引取度奉存候間、御多忙中近比恐入奉存候

得共、御退出之比にても、暫時御立寄奉願上候、何分不

悪御聞濟奉祈候、

一此品如何敷輕微之至御座候得共、国産ニ付、御慰ニ献

呈仕候、御笑留可被成下候、右之段申上候まで、匆々

頓首、

七月五日

二白、前文之趣は、呉々も不悪様御聞濟奉希上候、

然は、近日御一席御催被成下候旨、段々御懇命之次第難有仕合奉存候、併前書ニ申上候訳ニ付、一刻も早く帰国、万端之手数仕度奉存候間、御佳会者、期再懇可奉願上候、左様御聞置可被下、必御手配無御座候様奉希候、不具、

文書原寸 縦一八・二釐 横一七五・五釐

102 筑波山一件ニ付北条新太郎報告書

筑波山一件同所より之文通

以急御用状致啓上候、然は拙者始三番組々、昨六日野州下妻へ致到着候ニ付、今七日五ツ時、同所相発、筑波山間近江仕寄、陣営可取建地利為見分、半大隊江散兵一小隊差加へ、高道祖村江罷出候処、賊徒物見之騎兵二騎相見候間、追打追発致候処、築波山(マコ)より人数凡百人程操出(操)し、前書高道祖村田野屈曲致、往還木立生茂し候場所、賊徒共陣取致し及砲発候付、惣勢操出(操)し候義、騎兵ヲ以下妻表旅宿江申達、双方打合相出内、敵勢間越村渡場之

方へ人数分配進出候様子、同所為押一中隊へ香山栄左衛門差添繰出候、凡一時余之間及戦争候処、賊徒敗走ニ及候ニ付、猶敵重ニ追打、洞下村凡七八丁之処ニ、下妻よりハ凡弍里半程も出張致候義候間、惣軍引上之時刻延引いたし候付、程能追打引上候、右戦争候付、敵方多分之怪我有之候故候哉、戦地之田野血ニ染有之、死骸ハ賊徒とも持退候哉、相知不申、味方ニおひてハ吾人も怪我も無之引上申候、依之不取敢、此段御注進如此御座候、宜御建白有之候様致度奉存候、以上、

七月七日夜四時認

北条新太郎

川勝丹波守殿(広運)

溝口伊勢守殿(勝如)

下曾根甲斐守殿(信之)

騎兵頭取衆

歩兵頭取衆

同並之衆

大砲・小筒並之衆

尚以、藤沢志摩守・城織部ハ一昨日下午館江出發、今

日之戰爭ニハ關係不致、本文ニ付軍器分捕等之品々

有之候得共、委細之義ハ追而取調可得御意候、

一本文ニ付、水戸殿人数下妻江相廻、以下監察之義不

残出陣致候付、委細監察方より御届書可差出候と奉存

候、此段以得手得御意候、

文書原寸 縦一五・五糎 横七四糎

〇二五 小松帯刀書翰

京都及江戸ノ狀況

宛名ナシ

〇二六 臨時横浜新聞記事

英艦ノ下之関探索

二通

一〇八六ノ一

臨時日本新聞紙 三百四十三号

千八百六十四年八月第十日(水曜日)

本邦元治元年七月九日

去月第二十一日我六月十八日此地を出帆せるハ・ブ・ムス・バ

ロッサ船及ひコルモラント船、今敵地より帰り来れり、

我輩聞所の事を記して、当地の諸人、日々彼地の新聞を

希望せる心を聊か飽しむべし、

彼船我六月廿四日二十七日(火曜日恐ラクハ誤)の日暮、長門の首府

「ハギ」を距る事三十里許の「ヒメシマ」と云所に着し

同行せる日本人の衣服を着せる者式人を上陸せしめたり

彼茲より三拾里の旅行を為に、前途の浪人と彼地へ到着

之時の事を大に恐懼せり、

月曜日八月一日、我蒸氣を起し、コルモラント船ハ港口之

狭路に進み、海峡之両側に築造せる夥多の新砦を歴観し、

バラッサ船はヒマンマと港口の間に碇泊し、其浅深を測

量せり、此日ハ無事にして、別に記すへき事なしと雖、

其後日曜日八月七日、我に、コルモラント船再び港口の

狭路に進み観るに、一週の間諸砦の準備大ニ増し、大

砲の数も以前觀し時よりは多し、船陸地に近迫せる時、

日本人横さまに此狭路ニ実丸及ひ柘榴丸を射掛たり、
此日日曜日ニシテ八月七日ナリ彼忒人の日本人、ヒマシマ(メ)に帰来し、長
門侯の返答を伝へたり、其真事ハ我輩より聞を得すと雖
不幸事なる事哉評せり、

忒人の日本人別るゝ時、長門侯、当に少時間に此狭路を
開くへしと云へり、

此行命之人ハ甚た無礼なる者にて、トツキスルロから我船の茲を
出を欲すと云、更に我国人を無用なる者とせり、

彼等又長門にハ定額之兵二万六千人之外、一万六千の浪
人付属すといへり、

冊子原寸 縦三・七種 横一七種 二枚

一〇八六ノ二

横浜臨時新聞紙七月九日出版
即刻紙

英国蒸気軍艦 (バロサ) コルモレント舟号の二艘、去ル
九日当湊出帆、長州表へ探索として趣(赴)しか、今九日四半
時頃、当湊ニ帰帆せり、去十三日夕刻姫島ニ至到着す、

此辺は萩よりイギリス里法ニ而三十里隔り、こゝに於て、
連行きし所の日本人忒人ヲ医者ヲの姿ニ変し、三十里の旅
行を為さしめんか為に上陸せしめたり、此間中浪士充滿
すと雖も漸々無事ニ着する事を得たり、

去ル九日 (コルモレント) 船蒸気を起して瀬戸口へ進し
か近づくるに従て瀬戸の両岸に新築の砲台数ヶ所守ルと
見へたり、(バロサ) 船姫島と瀬戸口との間の中央に砲
を卸し、其辺の測量を為せしか変事なく、事もなかりし、
然ルニ七月六日ニ至り (コルモレント) 船再び蒸気を起
して瀬戸口ニ至りしか、日数僅ニ七日の間ニ、以前より
も大砲の数を増し人数を増したるを見たり、

此 (コルモレント) 瀬戸口に近くや否や砲台より実丸・
空丸を発し、船の前を通過せしめたり、同日に忒人の日
本人、長州侯の返翰を持帰り来れり、此返翰の其意味は
余等いまた委しく聞かすと雖も、風聞には何か宜からさ
る事なりと、此忒人の日本人、此島より我舟を列れ去ル
時云々、長州侯ハ近日今此瀬戸の通行を開くと、

我が舟に接したる人々甚た無礼の振舞ニ而、只々言曰、
今速ニ茲を去て再ひ此地に来る事勿れと、

且云し、長門ニも国兵式万六千の外、当抱へたる浪人一
万六千あると、

文書原寸 縦一六・八糎 横八三・二糎

三〇七 京都小松帯刀ヨリ郷里家族へノ書信

長兵伏見滞在等ノ件

(封紙ウツ書)

小まつ

お近どの 帯刀

人々 無事平安

ノ

ノ

かへすくいとゐくなされ候やう、くれくいの
りまいらせ候、江戸よりの飛脚今日参り候まゝ、此
よしかたく申入まいらせ候、何もいそかしく、又
の便りニコまく申入まいらせ候、又々めてたく、
かしく、

文にて申入まいらせ候、まつく残暑きひしく候へとも

折柄のさわりなく、さへくしくくらしのはつといかつ
く幾久しくめてたくそんじまいらせ候、拙者ニも大元氣
ニ相勤居候まゝ、少しもくあんじなされましく候、先
便より申遣し候通、此方長州人数伏見辺へ出張、そ
ふくしき事ニ候へとも、まつく無事ニ而仕合ニ御座
候、かならずく世話なされましく候、その方ニ而も人
数とふ御さし出しニ相成候へハ、そふくしきはなしの
はつとそんじ候、こゝ元ニ居候へは、又さまての事ニも
これなく候、しかし御屋しきも御門ハしめ、みなくし
ゆふニ出入も相成らず候、御屋しきは無事ニ而、別而
くく仕合ニ御座候、彦七便よりハ何よりの品ともか
たしけなく、そのせつ注文の品も、直ニ申つけ置まいら
せ候、取入方出来候品文は、此節便より彦七より差下候
まゝ、うけとりなされ候、いしよふハたのミ置まいらせ
候、何か遣したくそんじ候へとも、このころハ誠ニく
いそかしく、さしての見立もこれなく、夏のきもの用あ
み縞袴反、匂ひ香袴箱遣し候まゝ、うけとりなされ候、

拙者ニも当夏ハあみ綿計ニ而相すみ候、よほと涼しきものニ御座候、此方も中々あつさきひしく、かゝつて其方よりもあつきとそんじまいらせ候、しかし、よるハよき肌持にて仕合ニ御座候、西瓜ハよほとよろしき所にて、毎日くたへまいらせ候、大きにくそれ丈ハ仕合ニ御座候、吉利西瓜の事とおもひ出しまいらせ候、右の通あつさつよく候へとも、少しもくいたミもいたさず、いつもより大元氣ニ而候ま、少しもくあんじなされましく候、拙者御長屋ハ随分かせ通り仕合ニ御座候、当月ハ早く下り之はつとそんじ、仕廻ともいたし居候へとも、此せつの事ニ而、少しハ長ひき候事とそんじまいらせ候、折かくく早目ニよろしき様ニ相成候ハ、罷下りまいらせ候、いまた模様も相分らず候へとも、当月中もいたし候ハ、もよふも相分候へとそんじまいらせ候、もよふ次第ニは早々申入まいらせ候、来月中ニは下りニ相成候へとそんじまいらせ候、細々申遣したくそんじ候へとも、今比ハ大きにくいそかしく、何かと御

用も取込候ま、あらく申入まいらせ候、まつハ折かくくいとゐくなされ候やうニそんじまいらせ候、幾久しく、万々年、めてたくかしく、

七月九日

文書原寸 縦一六・四種 横二六九・三種

二〇六 横浜貿易新聞記事

日本人ノ外国貿易ヲ喜ハサルヲ評論シ各国軍艦ノ下之関攻撃決議ニ及ブ

(表紙)
「横浜貿易評判第四号」

横浜貿易評判第四号

日本神奈川開版

西曆一千八百六十四年八月十三日

我邦元治元甲子年七月十二日

過日、余等オ・フルランド 横浜新聞紙ノ一種 新聞を布告せし以來、今茲に英国女王殿下のバロツサ及コルモラント号なる二隻の蒸氣軍艦、当港帰着之事を記載す、此事ニ

付てハ、余等曾而看官に告たる以後、いまた一の説をも洩す事なかりし、日本人長州人ヲ云 コルモラントに向ひ発砲せしに、其弾丸は空く船上を横ニ飛過たり、若し速に此処を走せ去るにあらざりせば、必ず諸砲皆一斉に発砲せしに至りしなるへし、

長州の太守に贈りたる結局の書翰を彼レ差戻したるにより、我等断然として可伐の意を決し、速に船隊を送らん事を定む、

都而国務に関渉せる事件を告知するは日本ニ而尤厳密なり、故に我等も又意を用ひて之を聞糺したり、希くは諸君我等の記載せる条に聊も疑を起し給ふ事勿かれと云、

日本人は風説を聞得る事を甚好めり、此程戦争の話盛に流布す、我等其始末を許多聞得たれとも、確証を得ざるによりて、只二三説を挙て看官に告る而已、

京師の事甚危急切迫してミカドの恐怖し給ふ事尤甚しき余り、ヒトツパンは帝の守護として大砲手八隊・小

銃手数隊を引率して江戸より進発せられたりと、又幕下の大名の勇猛なる兵士等は、長州藩ロウニンの放火乱妨を防禦し、且内裏を守衛し奉らんとて、各々争て洛中より馳せ集りたり、戦争の起りしより以来、長州太守の策は、麾下の兵士を数小隊に別ち、日本国の内地処々に分派し、所在に於て一揆蜂起せしめ、其隙に乗して、北地(此)を略せん事を謀れるなりと云、然るに、此兵士等常に以為らく、大君政府の力ハ、能く我軍を制するに足らず、況や我軍を害するを得んやと、如此く彼等は大君政府を覆さんとの悪逆を企たり、我等考ふるに、大君政府の役人等は実に彼の輩と抗するに足らざる歟、既に官軍の戦始りたりと聞得り、日本人は官軍の戦争に付恐るべき僅カの実験を得て、是より外国人を見下す事、今迄の如くならざるべし、遂ひに其援を乞求るに至んとす、○日々流布する風聞の内、僅カ信用すべくして又驚くべき話を我等記載して示す、期ニ至らば、官軍戦争の極度、即國中一般の騒動とな

りたりと知るべし、

大君政府は或法を設けて、許多の倨傲なる大名を制服する事能わさると見へたり、若し大君政府外国人と親睦ならん事を願ひなば、政府の実に艱難なる有様を明白に告げよ、又国の静謐に復さん事を欲せば、外国人の懇切なる助力を頼め、遅く欲早く欲、是非取扱がなければならぬ也、

支那の事跡を能く研究学問せし人へ、方今日本の形勢は殆んど彼国と同政を行ひ、果して其覆轍に陥らんとする事を一寸と見渡しの付なるべし、○若し貌利太尼亜政府を或事より発怒せしむる事あらば、彼必らず十分なる兵力を用ひて、其為す所を遂げ、聊も用捨せざるなるべし、

○横浜へ当時表向静謐の姿にして、居留人等少しも恟々悸々すへき風聞のある事なし、○外国商人等は揃てしからざる商法ニ而、荷物取引する事を各心痛嗟嘆せり、大君より国内の商人等江敵令を布けるに因れりと云、

是物品^少乏品の訳より起りたるにあらず、全く外国貿易を成る丈ヶ縮めんとの策なるへし、一体貿易ハ其国の利益なるに、ヶ様なる所置は自分其利益を嫌ひ遠かるなり、併し大ひに其了簡違ひなる事を察する期あるへし、

兩三日前より氣候酷熱にして、室内に掛たる寒暖計九十度に至れり、但居留人は皆壯健なり、又兵卒等の勇氣ハ益鋭し、

日本商人市場江持込の産物少して、貿易の形状甚衰微し、輸出の物品随て少し、○輸入も又衰たり、是日本商人等の元手金不足なるにより、或ハ政府の故障せるに因る、夫故輸入の荷物も名計りニ而、纒の取引をする日もあり、又せざる日もあり、

絹糸——凡三百苞の荷物前週到着せり、但シ大概約束の分ニして、内四十苞程ハ売払ひになりたり、一ピコールに付、五百五十元の相場なり、茶——一時好期会ありて、荷物沢山集りたり、然るに

当時合衆国ニ而茶運上の増たる報告ありしにより、亜
国商人は買ず、又英国よりも好からぬ評判を告越した
るによりて直段格別下落しぬ、一ピコールニ付三元或
ハ四元なり、

木綿——我れ先日報告せし以来、荷物随分ありて直段
も先ツ座りなり、買手ハ少し目目なり、上等の質少し
相場は二十七元より二十八元位迄なり、

輸入——先頃荷物の仕入沢山ありし上に、又々欧羅巴
及ひ支那地方より多分の荷物着したるにより、相場下
落して実ニ言ふに堪ざる程なり、然るに日本商人等、

当時元手乏敷、又国内騒乱なるにより捌方宜からず、

○英国女王殿下の蒸氣軍艦イウリヤリユスノルヤロスに於て、一昨日我七

月十 軍艦の指揮官悉く会合して軍議を為せり、如何な
る策を評し、如何なる事を議せし哉、伺ひ知るを得ず
といへども、当港碇泊の軍艦を近日江戸に廻す欵、中
国海に送る欵の二ツをば出ざるへし、扱居留人保護の
為にハ、盛大なる兵備を残し、留守中の防禦とす、又

ヨルヤロス船ニ而最後の軍議を為せし時、指揮官等再
ひ会合列座之上、不残の軍艦当月廿四日我廿三日 南方ニ
向て発すへしと同意決定せりと云、

水師提督ジョーリスは、長者なるを以て、貌利太尼亞・
仏蘭西・和蘭三国の上將となりて船隊の命令を司る事
に決せり、又英国蒸氣軍艦コンクエーロール及ひ合衆国
の小軍艦ジャメストンは横浜居留地の防禦として残り
留るなり、

モニトル号なる亜米利加蒸氣船、襲ひ打れたる風
説

モニトル各号蒸氣船七月三日我五月 箱館を発して、長
崎に至らんするに洋中ニ而難風に遇ひ且薪水に乏くな
りたるにより、凡北緯線三十四度の間に於て、好キ碇
泊所ありて、東岸に小村の見ゆる海湾江走り入たり、
程なく役人式人船中ニ来り問曰く、何用ありて渡来せ
る哉、荷主及ひ甲比丹対曰く、不幸ニして難風ニ逢ひ
新炭・水・食料を欠きたれば給されん事を願ふなり、

但代料は受納すべしと、此時役人は初て亜米利加船なるを悟りたる様子にて、又曰く、然らば我等頭役江申立へしと云て立帰れり、此時既に日暮なりし、

いまだ日光の全く消ざる際に、村の傍にある四挺の大砲を備たる台場より、第一番の弾丸を打出したり、茲に於て船中のもの精力を竭し、成丈ヶ早く蒸氣を立ん事を務む、彼是する内台場より打出す弾丸益烈し、○今火光の燎々たるに依て敵陣を占ひ見るに、^(視力)村の前面に楯を並へ立て、其陰に兵卒等隠れ居て、猶廿四箇の弾丸を船中に打込たり、併幸ひにして船中僅カの損害、又手負の者もある事なし、扱船は蒸氣の立や否や、其処を速に走せ出たり、此時南方ニある大砲六挺備の台場、砲を開て頻りに射撃せり、是又一の功をもなせず、○モニトル船ハ二十四ポンドのペルロツト砲二挺を備居たれば、此方よりも二十六ヶの破裂丸を第一の台場并村中江打込ミたれば、忽ち両所に猛火起りたり、此後船は此海湾を去りて、対馬島に航渡し、其地江上陸

して自分薪を伐り、危く虎口を逃れて、遂ひに長崎に至り、始て安堵する事を得たりと云、此船の打たるは長門の海湾なり、

冊子原寸。縦二四・二種 横一六・四種 九枚

二〇六 野州暴徒追討人数ノ幕命

^(付箋)「御印封内ニアリ」

一〇八九ノ一

七月十四日、水野^(志稱)和泉守殿御渡、

大目付

今般野州辺浮浪之徒為追討被差遣候役々江被下人馬

左之通

一人足拾五人
一馬二疋

大御番頭

一人足八人
一馬壹疋

御勘定奉行

御持之頭

御先手

一人足四人
馬卷疋ツ、

一人足三人
馬卷疋

一人足式人
馬卷疋ツ、

一人足三人

一人足式人

一人足三人

一人足式人ツ、

一人足卷人

小十人頭

御徒頭

御目付

御書院番組頭

御小姓組之組頭

大御番組頭

御書院番

御小姓組番

小十人^与頭

御勘定組頭

大御番

小十人組

御勘定方

御徒組頭

御徒目付

組々^与力

御徒

一人足卷人

一人足卷人

一人足卷人

右之通被下候間、可被得其意候、尤右之外御用物等

繼送り人足之儀は、別段断書可被差出候、

七月

一〇八九ノ二

同日御同人御渡

大目付江

野州辺浮浪之徒為追討被差遣候面々、道中旅籠之儀非常之儀ニ付、以来ニ不拘、所有合之品ヲ以、一汁又は一菜、可成丈手輕ニ相賄、上下之無差別、卷人ニ付一泊錢式百文、一食錢百文より多く請取間敷段、宿々江申渡候間、可被得其意候、右之通向々江可被達候事、

七月

一〇八九ノ三

大御番頭

堀内藏頭
(直虎)
名代堀主殿

野州辺浮浪之徒追討被 仰付候処、申立之趣不都合之

次第も有之候ニ付、御役

御免差扣被 仰付候、

冊子原寸 縦二三・八種 横一七種 五枚

1020 野州浪士追討幕軍諸役人將軍謁見人名録

(端裏書)
「(付箋)シラベ濟」

御沙汰有之は、不書候義と御承知可被下候」

七月十五日

御座間

田沼玄蕃頭
(意尊)

御脇差
備中国次直
代金百枚

右野州辺江浮浪之輩追討為惣括罷越候ニ付、御目見

上意有之候趣御座候、

大御番頭(相徳)

神保山城守

御書院番頭(清裕)

織田伊賀守

御小性組番頭(正常)

井上越中守

御持之頭

和田伝右衛門

御先手

土屋釣之丞

御目付(寛)

設楽弾正

御使番

日根野藤之助

牧野鋼太郎

御徒頭

遠山三郎右衛門

小十人頭

竹内日向守

御書院番

織田伊賀守組与頭

永井隼之助

御小性組
井上越中守組与頭
高山安左衛門

右野州辺江浮浪輩為追討、罷越候ニ付 御目見
上意有之、

但右之面々江鉄扇・下け緒被下候、

大御番頭

御小性組

御書院番

大御番

小十人組頭

小十人

右同断ニ付 御目見、

文書原寸 縦一六糎 横七二・五糎

1031 近衛忠房卿ノ達書

長兵討伐ニ付

(毛利廣頼・広封)(三条)
長門父子并実美以外之儀ニ付而ハ、臣子之情合不被忍、

歎願之趣ニ付而ハ、其趣意汲取、理非分明之所置可在之
存意ニ候処、不測多人教兵器相携、都下騒々敷不遜之次
第、不得其意候、此低捨置候而ハ、朝威難相立候故、福
原居残り、惣勢引取候様及沙汰候処、再願之趣不得其意
候、此上疑惑致滞在候而ハ、宰相父子之為ニ申立候趣意
ニも相違致違勅之場ニ相当、難捨置候間、其辺惣督初在
京之諸藩屹度相心得、断然朝威相立候様、尽力所置可在
之候事、

尤於朝廷可及沙汰存候事、

文書原寸 縦一八糎 横七三・七糎

1032 長兵征討ノ勅命

長州脱藩士等拳動頗差迫、既開兵端之由相聞、速総督以
下在京諸藩兵士等、尽力征討、弥可輝

朝權事、

七月十八日

文書原寸 縦一六・三糎 横三〇・八糎

1025 洛外守備応援諸藩兵配置ノ件

薩藩ハ天龍寺一ノ先

(端裏朱書) (磨滅)
甲子七月

伏見

一ノ先

戸田采女正(氏彬)

二ノ先

井伊掃部頭(直憲)

人数計

但掃部頭は

禁闕を守るへし、且桃山ハ井伊家ニ而只

今より取布へし、

二ノ見

会津人数(松平春保)

同

所司代人数(松平定敬)

但職柄ニ付、方面之諸軍を合し、進退ヲ主

るへし、

蒔田相模守(広孝)

監軍監察老人

但二ノ見ニ在て諸軍ニ令ヲ伝ふへし、

遊兵

有馬(道純) 遠江守

同

小笠原大膳大夫(忠幹)

但伏見相備候後、戸田・有馬・小笠原之三

手地形ヲ見て敵ニ備へし、其余は山崎の

奇兵たるへし、

八幡守兵

先手

松平伯耆守(本莊宗秀)

但事不発前、八幡山ヲ取布へし、只今ヨリ

取布手当肝要也、

山崎

先手

松平甲斐守(柳沢保申)

二ノ見

藤堂和泉守(高敏)

榎木原江

酒井若狹守(忠氏)

但天龍寺山崎の中間を押して敵の精通ヲ絶つ

へし、

東寺

御旗本
御一陣

御 総 括

守護職人数

監察耆人

奇兵

細川越中守人数

有馬中務大輔

天龍寺

一ノ先 御名

太秦 本多主膳正

二ノ先 松平越前守

妙心寺 但旗頭となりて、右軍を総へし、

左先 大久保加賀守

左二ノ見 松平隠岐守

但旗頭となりて、左軍ヲ総へし、

監軍監察耆人

但二ノ見ニ在て方面之諸軍ニ令ヲ伝ふへし

遊兵 青山因幡守

締り役 松平筑前守

但三条辺より山内村辺江押出し、機ニ応し

応援すへし、

豊後橋

間部下総守

市橋下総守

小出伊勢守

洞ヶ峠

老ヶ崎 松平豊前守

上賀茂 松平相模守

下賀茂 仙石讃岐守

鷹ノ峰 松平備前守

上賀茂辺川手前 尾州

長州・対州屋敷押 加賀

因州屋敷押 黒田

文書原寸 縦一四・三種 横一六五・三種

152 米良主膳ヨリ小川小藤太へ

学問研究其他ニ付薩藩へ願ノ件

一 只今通り相良表より何事茂敵塞且政事向迄勝手ニ有之候而は、諸士は勿論、万民迄恐怖之姿ニ見請、殊ニ相和シ候儀は逆茂無覺束存候、譬ひ十分之義道筋申出候而茂、反而取推へ難儀之場ニ相成候、日ヲ覆而右様成行候得は無余儀事ニ存候、且小身之儀ニ候得は、独立と申儀は是又難叶事故、此上は乍恐薩州公江御隨身申上候外無之候間、以御憐愍御救被成下候様願之事、一米良いまだ不開、我儼勝ニ而当然之道ニ暗し、五常を不聡、何共歎敷事ニ存候、何分文武相進め、追々相諭シ度候得共、拙者逆茂文盲ニ候得は、事成就無覺束存候、是又

薩州様江相願、武、文且政事ニ相応委鋪御方一兩人御出張、国政談和相願、領内御取立被成下候様偏ニ願之事、

一 拙者

上京御用茂相勤候得は、留主中甚心掛りニ候、且龜之助殿事茂修行中一日茂難捨置年輩ニ候得は、是又鹿府江不差出置候而難叶存候、父子共留主中ニ而は、一統

不穩候哉、旁々心配ニ存候、何分文政委敷御方相願置、上京中は龜之助殿在国ニ而、修行為致候様相願度存候、帰国之上は、早速鹿府江可差出事、

一 上京御守衛且攘夷之節、何分微力之者故、独立一手ニ而相勤候儀難叶存候、何卒

薩州公御勢配之内ニ被

召加へ、御差図ニ而相勤候様願之事、

一 拙者身分相応之軍役賦り、是又御熟談申上極め付置度存候事、

一 龜之助殿儀は、小身ニは候得共、一国之主人ニ候得は拙者同様文盲ニ有之候而は、国政は勿論、御用ニ茂相立兼候間、第一学文ヲ被心掛、夫々直実之御方江馴染、ミ身之為ニ相成候御咄シ茂胸臆不被致候而難叶存候、

劍術・馬術は学文之間ニ少々宛心掛ケられ候丈ニ而可然存候、付添之者共可心得事、

一 士分之者一兩人、聖堂江相願差出置、学文修行為致度存候事、

一旅宿遠方ニ而は修行自然怠り候而は不相成と心遣ニ存

候、何分聖堂近所ニ願替有之度存候、夫逆茂只今迄被仰付置候旅宿ニ而不足は無之候得共、学文折角被為致度所存より申出候儀ニ候間、此段成合候様可申上事、右之々々、拙者鹿府江態々相願度存候得共、一先御手前迄以書付申入候、今度右之趣、大概御申上置願存候、何分拙者罷出不申上候而は、相良表より取推へ候儀は必定と相察し候、委細は御手前承知之事候間、随分堅固ニ可被相勤候様頼存候、以上、

子ノ

七月十八日

藤原之

則忠

小川小藤太どのへ

横帳原寸 縦一四・八種 横四三・八種 三枚

1055 小松帶刀ヨリ在藩ノ重役へ

別啓共二通

禁門ノ戦ニ就テ

一〇九五ノ一

別啓

此節之一左右御承知之上へ、直様

御出京之 思召も不被叶奉存候得共、未今日迄之所ニ而は、何事も能ク相分不申候間、今一左右は御見合相成候様ニ而可然と奉存候、不日翔鳳丸ヲ以別段御届申上候、人数御差出等之義茂先御見合可被下候、是も今一左右之上ニ被成下候、併奈良原・両高崎等之所は、(五ヶ、正見)思召次第御差出被下候而可然候、

一此節は、此方守衛人数不殘余程決心ニ而相働、他藩ニ替り別段相働申候、薩兵なくハ、此節きり之事と今より手ニ汗ヲ握り申程之事ニ御座候、夫程丈之働ニ御座候間、願兼候得共、守衛方之所江は御手厚 御沙汰御申越相成候様有之候ハ、一統難有尚是上十分之働も出来可申と奉存候間、当座之 御沙汰相願度奉存候、(吉之助、西郷隆盛)大島・いちゝ・吉井・内田等も格別之働ニ御座候、大島も足ニ銃丸当り候へとも、少し之事ニ而、今日も天龍(寺脱カ)へ出張ニ相成仕合ニ御座候、(長藏、篤)税所長も余程相働申候

小銃丸三ツ受、手負ニ御座候、先命ニはさし支も無御座候間仕合御座候、其外一統之働も格別ニ御座候、一々不申上候、御推計可被下候、細事後便申上候、以上、
〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三七二号 文書ト同文ナリ〕
文書原寸 縦一六・三糎 横八五糎

一〇九五ノ二

両公子余程御振はまりニ而御警衛等十分御勤被遊、誠ニ〳〵感心落涙之次第ニ御座候、実ニ御両殿様之御替りニ御成、御趣意十分被遊御勤、実ニ難有奉存候、形行言上被成度奉存候、何も難有奉存候、其故惣勢も相進ミ申候、何も御推計、細事申上兼候、以上、

廿日

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三七四号 文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・三糎 横三三・八糎

一〇六 備後殿 函書殿 御付 御小納戸 ヨリ 島津求馬

大久保一蔵へ

〔包紙ワツ書〕 禁門ノ戦況ニ就テ

備後殿

函書殿

御付

御小納戸

島津求馬殿

大久保一蔵殿

ノ

ノ

〔島津忠盛〕〔島津久治〕 備後様・函書様 益御安全被為成御座恐悦奉存候、扱昨十

九日早天長賊俄ニ暴発、直ニ 備後様ニは

日御門、函書様ニは

乾御門御警衛、両日共被成御勝利重疊奉恐悦候、此節別

段御書御上不相成との御事御座候間、委細は畠山吉次郎

より可申上候付、御聞取之上御披露等之儀、宜御頼申上

越候、以上、

備後殿

七月廿日
凶書殿
御付
御小納戸

島津求馬殿

大久保一藏殿

文書原寸

縦一六・三極 包紙原寸 縦二八・三極
横 九四極 横 四一極

三三七 小松帶刀ヨリ大久保一藏へ

禁門ノ戦報告

(封紙ウツ書)
一藏殿

御内用

帶刀

長州天龍寺等江出張之段は、此内より申上越候通御座候而

朝命も不奉、既ニ達

勅ニ相成候付、追討之命、昨十九日ニ 御達相成候筋ニ而御座候処、一昨夜より頻ニ不穩向ニ而、諸々人数

手配等も有之候処、一昨夜中ニ蜜々忍出居候よし、昨未明ニ此方人数式ツニ分、天龍寺討手并乾御門御守衛ニ被差出候処ニ而、既ニ天龍寺之方江向、人数繰出シニ取掛候処、俄ニ中立売御門江炮声相聞江、直様乾御門江人数も振向候処、中立御門ハ押破り、公家御門前迄押寄、余程炮発等いたし、勢ひ甚敷御座候処、此方大炮并小銃隊押出シ、戦ニ相及候処引退、日野家江逃入又々天龍寺之方江逃行候を奈良原組ニ而打取、四五人ハ打洩らし申候、烏丸通ニ而大戦有之、是も総而打取ニ相成候、大島・いちゝ其外皆々下知ニ而、莫大之働ニ御座候、鷹司氏江多人数立籠り居、諸軍勢を以打破烽火、過半は打取、少しハ逃行申候、此戦ニは會彦両藩も余程相働申候、明方より打込候炮火ニ而鷹司より出火、一方ハ室町より出火、余程大火ニ相成、未両方共鎮火ニ相成不申候、洛中ハ不残程、洛外ニも只今ともハ焼失と被存申候、
(島津志蓋・久治)
兩公子ニも御出張御守衛御座候、宮公子陽明殿前、富

公子ハ日御門内ニ而御警衛ニ御座候、早朝より之戦ニ

而、四ツ時分ニは敵も逃去、しかし逃ニも十分逃られ

ず、諸方市中江潜居いたし居候得共、炮火ニ而焼出さ

れ、皆々切捨打取相成申候、此方よりは数も不相分程

ニ御座候、未拙者ニも能ク聞取不申程之事ニ御座候、

今日ハ天龍寺討手被仰付、未明ニ人数繰出し、拙者出

張いたし候処、昨夜落ち候跡ニ而老人残居召捕申候、

左候而天龍寺は火起り焼失ニ相成申候、右火嵐山之松

ニ付、法輪寺并山中只今盛火ニ御座候、未鎮火之程合

も不相分候、

一朝廷ニ而も昨日は余程御恐怖ニ而

朝議も既ニ相動キ候模様ニ相成、暴論之堂上方、勢ひ

甚敷候由、

尹(尹宮)・常(常陸太守)・内公等余程御心配、橋公(橋慶喜)も余程之心配ニ御座

候、併一橋公余程振はまりニ而御動揺も無之、誠ニ難

有事ニ御座候、橋公も參

内守護、戦之折ハ日御門前江出張ニ而、自下知も有之

余程之尽力ニ而仕合ニ御座候、御推計可被成候、

一此方人数ニ而打取候首数廿二、召捕七人ニ御座候、実

見ニ備候数ニ御座候、其外炮火起り候上ニ、切捨打取

候ハ数相分不申、多分ニ御座候、未取調も出来不申候、

一此方戦死も有之、誠ニ残念ニ御座候得共、皆々相働候

故ニ而、右之仕合誠ニ感涙ニ御座候、表向人数等は申

上候、何れ何と欵被成下事候得共、今日迄ハ迎も右之

吟味迄も出来不申候間、追而吟味之形行ハ可申上候間、

其上ニ御沙汰ニ相成度、乍恐奉存候、

一山階宮御住居御焼失ニ相成申候、併外御借用ニ相成候

よし、今日ハ藤井(良節)之長屋江しはし御入ニ而御座候、誠

ニ御高配旁恐入候、

一先日より形勢御届申上候筈御座候処、少々相分候上と

見合候処、か様之大変ニ相成、昨日ハ迎も申上候間も

無之、其上往来も出来兼、甚遅延仕候、誰ぞ差下し細

々申上度奉存候得共、只今之形勢、要路之人乏數御座

候間、其儀も相叶不申、乍併大变之事ニ而、奥掛書役

島山吉次郎江細々申含差下申候間、当人より御聞取、

言上相成候義、宜敷御取計可被成候、大低機蜜之事(密)も

申聞置申候間、御質間被成候へ、相分可申候間、左

様御含可被成候、

一先賊追討も出来、

朝威も相立難有事ニ御座候、此末第一ニ御座候間、如何様之御趣意を根本ニいたし尽力可仕候間、左様御承知可被成候、此旨早々御届申上候、以上、

右外追々申上候、一昨夜より昨日も終日戦争、今日も未明より天龍寺江出張ニ而、只々一寸と罷帰候処ニ御座候、両三日も不寝旁故、文面等不運統(連)之義も可有之候間、可然様達

貴聞候義共御取計可被成候、以上、

七月廿日申之刻認

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三七三号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・三糎 横三三・八糎

一〇六 小松帯刀ヨリ京師ノ情報

於其御地

上々様御機(兼)兼克被為入恐悅奉存候、於爰元

両公子御安康、昨今共ニ御警衛御勤、何も御別条無之、

御安泰被為成候間、

御安心被遊度奉存候、嘸此方之変事御承知之上は、

御両殿様御高配之程何共奉恐入候、折角御遵奉之道相立候様ニは、精々尽力仕候含ニ御座候間、左様御承知可被成候、

御機(兼)兼相同度奉存候間、可然様御執成可被成候、貴様ニも御安泰被成御勤奉珍重候、拙者ニも無異罷在申候間、御休意可被下候、先は此段如斯御座候、以上、

七月廿日

小松帯刀

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三七五号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・三糎 横五八糎

1032 大島吉之助ヨリ大久保一藏へ

禁門之戦ニ就テ

〔包紙ウツ書〕
大久保一藏殿

大島吉之助

〔朱〕
甲子七月廿日

京師戦争 一

尚々、鳳輦を奉奪候謀計ニ而、実ニ薩兵あらすんハ
危き次第ニテ御座候、此度ハ 御所江向ひ炮発いた
し候付而ハ、天下之人望を失ひ候而已ならず、大逆
之罪を得、其上異人と和議を結び、旁是迄之詐謀一
時ニ相願、天罰を蒙り候事共ニ御座候、

先度より申上越置候長州之一条ニ付、堂上方荷担之御方
々も多く、色々と議論紛々之事ニテ、追討之

勅命相下り候処六ヶ敷、殊ニ長州違 勅之事ニ付而ハ、
罪状明白之訳ニテ、色々手を尽し、已ニ

勅命相下ル一段ニ罷成居候処、もふハ致方無之迎相起り
候哉、一昨晩より人数繰出し、中立売より攻登、未明よ

り戦争相始候処、諸藩之御固場所も打破、

公卿御門迄攻入候処、此御方様一手を以打破追退、烏丸
通より一手押出し、大砲を以互ニ打合、室町よりも一手
繰出し攻打候処、無程退散いたし、鷹司家内江逃込、炮
戦有之、又々崩かたく、此御方より炮隊并二組之人数を
以打挫、火攻ニ及候処たまり兼、早々退去候由、国司信
濃・益田右衛門介等之面々、罷居たる由御座候得共、打
洩したる事残念之至ニ御座候、乍然国司儀ハ旗并具足等
打捨逃去候付而ハ、首級同様之訳ニ御座候、伏見之儀ハ
福原越後主宰ニ而御座候処、大垣之手勢を以打破候由御
座候、今日ハ又々天龍山江攻懸候様御達相成、御人数被
差向候処、不残退散跡ニ而、一人之生捕有之候計ニ而御
座候処、巢穴を破置賦ニテ、火を懸焼崩申候、山崎之方
も皆崩立、逃去候故、今日之合戦ハ何事も無之、引返し
候事共ニ而御座候、此度之薩勢之鋒、衆人之耳目を驚し
候事共ニ而大慶之儀ニ御座候、

〔鳥津定經〕
備後様ニハ 日の御門内

(島津久治)
図書様ニハ、乾御門御堅御出張相成、勝たる御都合ニ而

難有事共ニ御座候、此旨急々申上候間、畠山方より細事

御聞取可被下候、後便委細可申上候、恐々謹言、

(西郷隆盛)
大島吉之助

七月廿日

大久保一藏様

追啓上、烏丸通之大炮攻合ニ長方より散弾をつるべ

て打込候処、怪我人も段々有之、(税所屬)長藏儀足ニ少々疵

を蒙候得共、決而御念遣之義ニハ無御座候、疵を蒙

りなから少しもひるます矢種之尽る迄打込候次第、

恐る計ニ御座候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三七六号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六・五糎 包紙原寸 縦 二八糎
横 一四二・五糎 横 四〇・七糎

二〇〇 大阪堺西之宮三兵庫八幡山崎警固命令

薩藩明石藩ハ兵庫警固

大坂

紀州

井伊

土州

高松

堺

紀州

岸和田

西之宮

藤堂

姫路

(笹井忠興)
松平遠江守

兵庫

明石

薩州

八幡

(本莊宗秀)
松平伯耆守

若 州

山崎

戸田采女正 (氏影)

大久保加賀守 (忠礼)

右之通、七月廿三日夜御堅メ被仰出候事、

文書原寸 縦一六・二種 横八二種

1101 松平伯耆守下阪取締ノ朝命

防長浮浪徘徊ニ付

松平伯耆守様御使者を以御届之写

昨日、参

内候処、防長浮浪之徒、大阪辺致徘徊候趣ニ付、右御取
締為見廻下坂可致、尤此度付属之者引纏、明廿四日出立
可致旨、伝奏衆被

仰出候、右御案内以使者申上候、

文書原寸 縦一六・五種 横三四・三種

1102 鈴木壮七園田彦左衛門小倉ヨリノ探索書

毛利長門守出陣ノ件

(端裏付箋)
一甲子七月廿四日

(端裏朱書)
一甲子七月廿四日

小倉ヨリ
鈴木 壮七
園田彦左衛門

防長之形勢精々探索仕候処、長門守様御出京之儀、去
ル十四日御乗船之由申上置候得共、三田尻江一日御滯
留、十五日弥御出船之由、就而は早船船頭共江承合候
処、其時分不順ニ而、一昨廿二日比兵庫御着船共ニ而
は有之間敷哉之由、尤惣勢四万人程出京いたし候哉ニ
申触候得共、先日より申上候通、凡七・八千人位ニも
相及可申哉、当分山口江茂士分之者相応相残居候由、
三田尻・上之関・下之関之儀は、彼地第一之要所ニ御
座候へ共、農・町兵共迄纏ツ、出張居候由、右ニ付而
は先達而も申上候通、夷船襲来之節、下之関台場前面
江乗来候へ共砲撃ニ不及、剩豊後姫島碇泊之異船江長
藩共小船より乘行、箱物差送り候、旁之次第を以は、

決而此節柄、内外之事件より夷人江は平穩の方ニ取計、
左様之処より長門守様御上京相決候哉ニ專取沙汰仕、
勿論私共見当茂同断之儀ニ而当分之模様ニ而は、涯々
渡来之形ニは相聞得不申候、

一 細川藩中林新五郎外ニ老人、防長為探索方先達而より
当所江滞在いたし居候付、程能彼地之事実承合申候処、
此内より京都為守衛三四百人位相詰居、右交代として
五月末方、四五百人差登相成候処、此節変事ニ付、都
而其假罷居、然ニ尚亦長州より多人數出京之段相聞得、
家老平野九郎右衛門・備頭溝口藏人上下式百人位、外
ニ十分・足輕等帶刀之者千百人引列、去ル廿一日より
明廿五日迄、追々熊本出立、鶴崎より乗船之由、右新
五郎方江申来、左候へハ都合千九百人位ニも相及候と
の由承申候、

一 別紙式通、昨日より今朝ニ相掛風説書等相見得、いま
た不慥成儀ニは御座候へ共、京地之様子不容易訳合ニ
而写取差上申候、

右通ニ而、外ニ相替候儀承得不申、此段御届申上候、
以上、

但異船渡来は勿論、防長人数追々上京いたし、跡聞
合等之儀共相少模様ニは御座候へ共、今三五日見
合、相変廉無之候へ、時機次第引取罷歸可申候
間、左様被聞召置被下度奉存候、

小倉滞在

鈴木 壯七

子七月廿四日

園田彦左衛門

文書原守 縦一四・二糎 横一七六・八糎

二三 江戸平田延太郎ヨリ三木鉄弥へノ通信

禁門ノ変ニ付水戸浪士会津征伐計画風聞

(端裏朱書)
一 甲子子

(延尾) 平田延太郎ヨリ三木鉄弥江申越候書翰之写

昨日、水戸御藩之人参り、去ル廿日比より水戸殿浪士
数十人、四五ヶ所ニ屯致シ、凡不容易勢ニ付、昨日鎮

撫として江戸御屋敷より御役人出立之由、是迄度々鎮撫ヲ尽し候事故、此度は迎も納申間敷、必竟先日京都ニ而逆賊

天朝ニ迫り奉り候ヲ憤り起立候趣候ニ付、是非共大事ニ及可申候由ニ御座候、事ニ寄候ハ、会津之本国江押寄候も難計相考申候、先一番ニ岩城平之城ヲ攻落し可申哉ニ評議致候哉ニ相聞申候、

一此表ニ而浪人防キ之御用意敲重ニ而、大名・旗本昼夜見廻り、橋々ニハ柵門出来甚敲敷模様ニ御座候、然処当廿四日、昌平橋ニ梟首有之、又一昨夜は幕城大手之門ニ張札有之、近々此城ヲ焼払可申と謀有之候由、未書付ハ見不申候得共、実説之様ニ承候、扱々不思議之挙動と驚入申候、此段皆々様へ御咄可被下候、可相成ハ御藩江早々為御知度ものニ御座候、

文書原寸 縦一六・四種 横四六・四種

二〇二 中津屋嘉平ヨリノ情報

七月十九日長兵退去ノ件

取込中ニ而乱筆

一京地何そ一向取留不申候得共、大変之様子、大津辺水戸・長州人衆、藩より焼払候由、

一淀城江夜前天王山崎長州勢三万人余り押入候由、天

王山より（松明）篝火繞大混雜、此許御城下は夜前より

俄ニ御備大筒并甲冑固々片町辺不殘其俣ニ而立退、市

中大混雜、早馬ニ而通行多く、余は御賢察可被下候事、

七月十九日

右は七月十九日大坂出衆より申參候間、此段被仰上可

被下候、以上、

子七月廿四日

中津屋嘉平

文書原寸 縦一四・二種 横四三・七種

二〇三 伊達伊予守ヨリ島津大隅守殿へ

蒸汽船修業ノ件其他

〔包紙ウツ書〕
一 島大隅守様 伊伊予守

侍史中

返書済 (朱「讀藏」)
〇 初秋念六発

之款不分候、心緒纏々候得共、冗長モ御面倒候、閣筆尤
候、頓首、

初秋念六

(伊達宗城)
弄筆

(島津久光)
大簡英明公

侍史

例文不贅、已上、

文書原寸 縦一六・六糎 包紙原寸 縦二八・八糎

横八〇・三糎

横三八・五糎

拙束拜呈仕候、不均早涼、為田地迎憂之至、先々益御清
迪可被成御揃奉大賀候、要事左ニ陳述仕候条、御判読可
被下候、

〇天下之形勢既ニ不可救ニ至絶言語候、

〇當時出崎習学申付候愚臣別紙面付之者共、何分彼地ニ

而ハ存分修業不相整、只悪俗ニ染而已、頗当惑仕候処、

貴藩ハ隆盛、殊ニ御取締モ御行届ニ而、弱輩者至極安心

故、罷出習学為仕度、呉々懇願ニ付、御聞啓被下度、尤

一応在崎御家臣衆より否当人共之内御沙汰相成度候、

〇五代・松木等紀行、是非〳〵御恩借被下度、

狼兄よりも頼越居候、

〇先日ハ英ミニストル渡来、緩々面对、海の出軍練兵見

物、閉口且愉快御座候、

〇暢適兄前月念九上京之由、親藩無止欵、救時之大策有

二〇K 禁門之戦分捕品其他届書

(端裏朱書)
一 甲子七月京師届出

一一〇六ノ一

覚

一首式拾九綴

但切捨・焼亡等ニ而不相知者も御座候、

一生捕拾三人

一鉄砲式拾式挺

但拾奴より五奴迄、

一刀大小拾六本

一陣太鼓七挺

一撞鐘式ツ

一長刀老振

一具足四拾五領

内一ツ箱入

一臙当拾八

一紋付幕六頭片間(裏カ)

一大砲拾式挺

但要具相添、

一旗六本

右拾行分捕之品ニ御座候、

一戦死四人

一深手九人

内一人從卒

一薄手式拾三人

内一人同断

右は今般長州人と手合之節、生捕・討留并味方戦死・

手負人数、又は分捕之品、早々取調可差出旨、被

仰渡趣承知仕、則取調申候処、右之通御座候間、此段

申上候、以上、

七月廿六日

松平修理大夫内

横田鹿一郎

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三八九号
文書ト同文ナリ)

一一〇六ノ二

一薄手 川上助八郎 一右同 永山弥一郎

一右同 彌脇 中野松之助 一右同 高岡談合役 本田次郎五郎

一右同 高岡昇預 海老原為右衛門 一右同 右同所 藤元源五郎

一右同 志岐小左衛門下人 喜六 一深手 高岡葉籠持 庄太

一戦死 阿久根 松下矢七郎

一深手 河南武右衛門 平岡源四郎

福永伝太郎 遠矢平左衛門

福永助左衛門

一薄手 小木原庄兵衛 松山藤助

福永喜左衛門 久木田伝五郎

築瀬次郎助 神川源兵衛

大迫太郎左衛門 楠田助左衛門

湯田十藏 後日死去 浜田藤太郎

右平田平六組

一戦死 野村勘兵衛

一右同 隈之城 野村藤七郎

一深手 道岡怒兵衛

長野円右衛門

一薄手 橋口伊右衛門

浜田曾右衛門 藪田源七郎

井上直之進

右野村勘兵衛組

一戦死 宮内彦二

一薄手 税所長藏

土師吉兵衛

一深手 後日死去 赤井兵之助

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三八七ノ

二号文書ノ一部ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・六糎 横八三・五糎

二〇四 石垣銳之助ヨリ伊地知壮之丞へ

軍艦運送船注文代価見積

「伊地知壮之丞様 石垣銳之助」

(封筒)
(封筒ウラ)

一一〇七ノ一

船代大抵 (抵カ)

一軍船二千トン以上之賦

一馬付六十五封度ツ、
(力脱カ)

一トン付五十封度ツ、

二千トン以上共二三分ツ、高料

一運送船

一馬力付五十封度ツ、

一トン付二十二封ツ、

一帆船

一トン付二十封ツ、

一同 右同木

一 トン付二十二封度ツ、

船大底打立日數十ヶ月位、極急ぎ六ヶ月位、夫丈高

料 ○船之「トン」馬力ハ算法有之候、船之程ニ而

ハ難究ト之事ニ候、各国注文之船は都而トンと馬力

ヲ定メ、夫ヲ以注文相成候由候、同間數ニ而馬力格

別相違も有之、何分扁帆之上ならては難尽と存候、

馬力ヲ起ス之算法承置候、

一 諸品相場付、長崎江追々廻置候付、当分御見置可被下

候、且は船賃・長崎運上又難船受負等、都合一割位之

由、帆前船ニ而英地出帆より日本迄大底五ヶ月近く候

由、蒸気なれば運賃高料、諸相場書も追々長崎江可差

廻候間、御付人より訳書御請取差越趣有之義、此段は

御含可被下候、尚此紙面桂氏江御廻置相成様願上候、

一〇七ノ二

承居候儀ニ付

一 羅紗類はフランス宜候由、不日ニ彼地可參候、委細探

索之賦ニ候、○金巾類は英は帆布は英ニモ織場有之候

へ共、究而之事等不相分、何れ運賃旁有之候へは、一

図ニ難究趣も有之候付、篤と探索可いたす候、○金銀

は少々日本より下料之向ニ候、乍然支那之可宜哉

運賃相減候半、○鉄・銅・石炭之掘かたは、能々相分

り候、石炭西洋之探しかた候へは、御国も屹と可有之

欵、さては書籍も入手之含ニ候、金山は無之候、銀山

は未ニ不參候、

一 西洋辺江交易品積之儀は不宜候、都而彼れもいたされ

候事、明白ニ相分り候、先上海辺も同様ニ候、夫故琉

属島ニ而——第一可宜候半、

一 長髪賊は又々起候由ニ而、追々新聞紙ニも相見得候旁

々之事、何かたとも難定候、乍幅州多き由ニも候、南

京も賊ニ取られ候哉ニも相聞得候、

一 御船一件は誠ニ困つたもの、横浜之方ニ而御注文第一

宜候、其儀は表通無段君江も差越置候付、大印よりも

篤と御聞取可被成候、誠ニ長きことニ而、難尺紙上御座候、已上、

我七月廿七日 石垣銳之助

伊地知壯之丞様

文書原寸 縦 一四糎

封筒原寸 縦 七・八糎

横 三・三糎(表裏)

横 一三・七糎

二〇 石垣銳之助ヨリ桂、大久保、簗田、西郷へ

軍艦注文ノ件 和文三通 英文一通 四通

(封筒) 一 大久保一藏殿

簗田伝兵衛殿

石垣銳之助

上野良太郎

西郷吉之介殿

(封筒ウラ) 一

二一〇八ノ一

(繪裏書) 一 卷

軍艦御誂文之儀、英着以来諸所有名之場所へ差越、長崎ガラバより申出之軍艦ニ基き、段々及吟味候処、一種之

軍艦ニ而、船代下料丈ケハ当時専用とは難申候ニ付、当時歐羅巴ニおゐて専要之軍艦ニ向夫々聞合、尚スコツトラント・ガラスコ^名地とは有名之造船場ニ付差越、段々探索致し候処、此商会之主人、横浜ハリソンより軍艦一条引合致し候者ニ而、案ニ行当、是迄横浜ハリソン方江之引合等承候処、当時専用之新製軍艦ニ通り之絵図差送置候付、今日は返答可有之哉と相待居候趣ニ而、船価も外造船場より余程下料ニ有之、横浜へ絵図差送候新製之軍艦ニ向誂文之談判取掛候処、代払之儀、歐羅巴諸国之規則ニ而は、船艦誂文いたし造船取懸リマギリカワラ居付候節、船価之三分之一を相渡、船卸之節と、船相受取候節との都合三ケ度ニ三分之一ツ、相渡候規則、亦無拗趣ニ依而は、三ケ度ニ相渡候の代、四ケ度ニ割渡候談判稀ニハ有之候由ニ而、年府^賦払等は捨置、我朝ニ船相達候節、一同相払候談判さへ整兼候外、造船場ニ而は、何とか談判相調候儀も可有之哉と存、先ツ夫形ニ而相離れ、其後諸所造船家方へ問合候得共、万里相隔居候我朝之風俗も不相

分、

御国名は新聞紙ニも折々相見へ居候得共、如何なる御国柄とも不相分、殊ニ大金之船代ゆへ、年府^(賦)払ニ而は、造船家も心底ニ不任候様相聞へ、於爰許は、年府^(賦)払之談判ハ実々相整丈ニ無之、必死と差図、精々吟味ニ及候処、横浜ハリソンより引合候スコットラント・ガラスコ^{名地}之造船場は、船価も下料ニ有之、勿論横浜へ差送置候船図は、当時歐羅巴諸州専用之軍艦と相見へ候付、ハリソンより最早御国許へ差出たるかの船図兩様之内、何れの船と取究め、ハリソン方江談判相成候外有之間敷、ハリソン商社より船価は都合いたし、造船家江相払候半、勿論左候得は、於当地粗申出候価ニ而は難相調、ハリソン方ニ而は、高利之金を以年府^(賦)中船代を都合致し、其上ハリソンの益分無之候而は、如何様御国へ志を通候而も、元来之商客何のため尽力可致哉、道理顯然之儀ニ付、夫丈ヶハ船価看々相増候得共、当時御金繰御難波之折柄、何れ右様之所置より外有之間敷存候付難黙止、横浜ハリソン方

へ差送候船図之扣相貫差送候、尤船価之儀は別紙之通り承候得共、是は前件申述候西洋規則通り、船代三ヶ度ニ割渡候処之価ニ而、年府^(賦)払相成候得は、此代価見当ニ不相成候、当時軍艦必用之折柄、片時も急埒候様、精々致苦心候得共、前件之形行ニ而、不得止事仕合、宜御舍給度、此段御問合申越候、以上、

子七月廿七日

石垣銳之助

桂 右衛門殿

大久保一藏殿

蓑田伝兵衛殿

西郷吉之助殿

横浜ハリソン儀は、長崎ガラハ同商社ニ而、此度遠航之始末も追々意涌相成居候半、就而は船御詔文一条是迄延引致し候をホームよりハリソン江委曲申述呉候ハ、南部等引合もいたし易く候半、依之書状貫受、和解相添差越候、乍併拙者共遠^(航カ)船一条、自然清水へ着合之儀も候ハ

、ホーム之書状は其假被扣置候方可然哉、且亦軍艦御詔文之儀、既に決定不致之処、折柄拙者共遠航致し、直き詔文之方急埒可致との事ニ而、於爰許深く探索ニ及候処、内情ハ委曲相分候得共、迅速を計、反て延引相成候儀、実以残慨不少、此上は不得止事打立、期日差急候外無之と存、段々致尋問候処、常例拾ヶ月ニは成就、乍併戦争中杯至極差急候節は、昼夜ニ相掛、六ヶ月位ニ而出来之由候得共、昼夜之造船ゆへ代価四五割も相増候由、依之横浜ハリソン方御詔文之決答相成候ハ、二ヶ月にして本国ニ達し、拾ヶ月ニは英港出航、三ヶ月ニして我朝ニ可相達賦ニ候、此段ハ為御含候、以上、

文書原寸 縦一四・三種 横一三一・三種

一一〇八ノ二

(端裏書)
〔一〕

一新製軍艦と唱候は、別紙図之如、骨組は鉄を以組立、外面檣板を以掩ひ、水平緊要之処、厚鉄板を張り弾丸

を防候趣向ニ而、米利堅戦争中南方ニ発明し数々勝利有之候より、歐羅巴諸所へ相開け、追々製造いたし候新製之軍艦ニ而、先度横浜ハリソン方へ船図相送候由、尤代金之儀は於爰許西洋規則之通、三ヶ度ニ割渡大砲代を外ニして、凡拾九万五千両程相掛候由、乍併別紙間合ニも申進候通り、横浜ハリソン方より詔文相成候ハ、此直段は見当ニ不相成候、且亦先度ハリソン方より造船家へ掛合候節、船之長サと大砲数相究め申来り、船之長サニ不相応之大砲数ニ候得共、詔文なれば不得止事、六拾八封度之大砲拾六挺無理為乗付候絵図相認め、横浜へ差送候由ニ而、船ニ不応大砲数は、反て害と成り、無益之事候半と造船家頻ニ歎談致し候、此船之大ニ而拾式挺位を相備至当と可申、米利堅戦争中、大ナル戦功ヲ顯候船は、此船同様之大ニ而、大砲八挺を相備有之候由、旁確証も有之、弥大砲数は不相応と相見へ候付、尚亦御熟評有之度候、左候而ハリソン方より申出候趣ニは、図之如く水平船腹江厚鉄板は

不張趣ニ付、此船ニ御詠文相成候へ、當時相用候厚鉄板を船腹ニ張り候処ニ而御詠文相成候旁可然相考へ候、

一鋼鉄艦と唱候船は、世上之所謂突船ニ而、図之如ク船腹厚鉄板を以張り、甲板上ニ直立したる図形之砲台を第二甲板上ニ於て自由ニ周転せしめ、砲発を便ならしめ候堅固之軍艦ニ而、當時歐羅巴諸州最モ盛ニ打立候、尤於爰許之船価へ、別紙図之大ニ而大砲代を省き、凡三拾万兩余より三拾壹万兩位迄相掛候由、此船図も先度横浜ハリソン方江は前件之新製軍艦図一同差送候由なり、

一大砲代之儀は船代之外ニして、當時有名之アルムストロング「ホウキツホルト」之兩種之内、為乗付相成候へ、右兩家より造船家買取、為乗付差出候訳ニ付、別紙大砲直段為見合差送候、尤當時四拾封度以上之アルムストロングは、種々害ありて本込を不相用、皆口込ニ有之候、アルムストロング「ホウキツホルト」ノ

得失は、於当地も利害兩立して難決候得共、「ホウキツウヲルト」ノ彈丸ハ製作至て六ヶ敷相見得候付、何れ口込之アルムストロング方ニ而も可有之哉、

右兩様之軍艦、得失之儀は、是迄於諸所頭在實驗致し候処、新製軍艦より鋼鉄船之方最も堅固ニ相見得、至極要用ニ相考候得共、夫丈ケ船価相増候儀故、於爰許難決候間、兩艦之内御金繰之都合ニより御評決有之、ハリソン方江御詠文相成度候、左候而ハリソン方より引合之趣ニ而は、大砲玉葉并小銃之為乗付ハ無之様承候付、折角御詠文相成候儀ニ付、其軍艦ニ相応候玉葉・小銃迄も為乗付、御詠文之方可然哉相考候、

但新製軍艦へ大砲拾式挺も為乗付候へ、大砲代相応ニ相及、鋼鉄艦之価ニ格別相異り間敷哉ニも相考候付、為乗付之大砲玉目御評決之上、大砲代ト新製軍艦代を相合せ、鋼鉄艦之価ニ比較し、得と御評儀有之度候、

文書原寸 縦一四・三種 横六六・六種

於ロンドン府千八百六十五年
九月十六日我七月廿七日

横浜ゴロウル商社へ
君

一過日、薩州より貴下之商社へ軍艦詔文之儀、粗談判有
之候由之処、右返答追々致延引候次第、貴下へ明解い
たし呉候様、即今爰許滞在之士官より承知致し候、右
は此度遠航之折柄ニ付、尚又於爰許巨細ニ致探索、適
宜之軍艦詔文致し候様と之命を被報、英着以来有名之
造船場諸所へ同伴、其内ランドルフェルドルス商会へ
被差越、委曲探索相成、且談判有之候処、彼是得者有
之、先度同商社より貴下へ被差送候凶面之通凶面ハ横濱
滞在之薩州
士官へ被
相渡候半、老艘は水平線之処鉄板を以張りし木船
ニして、大サハ千九拾トンなり、今老艘は甲板上ニ砲
台ある鉄軍艦ニして、大サハ千四百五拾五トン、右武
艘之内老艘、適宜之船詔文相成候半欵、尤金繰之都合

出来候得は、鉄軍艦を至極被相望候由也、此書便、一
同爰許ニ而探索之次第、巨細被申送候趣、然ル上ハ右
詔文之儀も速ニ治定可相成、船代払之儀は、貴下へ談
判可相成候由なり、

貴下之臣僕

ライフルホーム

文書原寸 縦一四・三種 封筒原寸 縦一一・三種

横三五・七種

横一七・四種

Tokoro
September 26 1865

Messrs. Glover & Co
Yokohama

Dear Sirs,

I am advised by the officials of the Service of Sashima now on a visit to this country, to suppose, you had the delay that had (probably) occurred in ordering through your house the building of the steamer for which you have some time been in treaty - and at doubt attributing blame to the Sashima officials in Yokohama - has arisen from their having received instructions from their Government to enquire themselves by personal inspection and enquiry of the style of masts of war boats ordered to their requisition and they further desire me to state that they have been in direct communication with Messrs. Raudolph & Co. (through my introduction) and are of opinion that either of the two models of which you have received plans and models from their gentlemen - one being a partially plated copper mast of 1090 lbs or thereabouts the other an wrought plated copper mast of 1455 lbs will suit them. The copper having the preference of the question of funds can be satisfactorily arranged. This letter is forwarded by the officials for through their Government in Nagasaki and at same times they communicate their opinion as above to the end that the order may be at once given you and the necessary arrangements made as to mode of payment to make you to have the same put in hand without further delay.

Yours faithfully
John Holman.

文書原寸
横二〇種 縦二五種
封筒原寸
横一三・五種 縦一七・五種

二〇九 十九日一挙ニ付不審ノ廉ヲ以テ参朝停止

ノ人々

〔端裏書
一写〕

以諸大夫申入

中務卿宮

同上

師 宮

去十八日一挙ニ付、御不審之儀被為在候間、御調

中被止參 朝候事、

尤他行并他人面会無用之事、

以諸大夫申入

鷹司前(輔亮)白

同上

鷹司大納言(輔政)

竹屋宰相申渡(光孝)

日野大納言(資宗)

依差扣不申渡

烏丸勅修寺光徳朝臣

以堀川新三位申渡(康隆)

經理

去十九日一挙ニ付、御不審之儀被為在候間、御調

中被止參 朝候事、

尤他行并他人面会無用之事、

以上武伝商量

醍醐大納言(忠順)

右大將(大炊御門家信)

六条侍從(有義)

正親町大納言(実徳)

野宮大夫(定功)

中山前大納言(忠能)

六条侍從

橋本大納言(中納言久実應)

沢主水正(宣嘉)

基文朝臣石山

竹屋左衛門佐(光有)

時厚朝臣平松

沢主水正

基正朝臣石山

堤右兵衛佐(哲長)

安仲五辻

去十八日一挙ニ付、御不審之儀被為在候間、御調

中被止參 朝候事、

尤他行并他人面会無用之事、

野宮大夫

中山前中將(忠愛)

縦令雖有非常之儀

御沙汰被為在候迄は、不可令參 朝候事、

以上兩役商量以頭書入
申渡候

七月廿七日夜

御達ニ相成候事、

文書原寸 縦一九・二種 横二二一種

二二〇 小松帶刀ヨリ大久保一藏へ

第一次長州征伐ノ件

(端裏書)
「大事」 小松

(端裏付箋)
「大久保一藏宛 霜月晦日認 小松帶刀より」

於其御許

上々様御揃御機兼克被為 入候半と恐悦御義奉存候、

於爰元

(近衛忠房室) (島津忠鑑・久治)

貞君様・両公子御安康被遊御座、珍重御義御同慶奉存

候、

一爰元十九日・廿日大變之次第は、島山吉次郎差立御届

申上候通、其後諸所ニ而殘党之者共、少々取押ニ相成

申候、惣勢は兵庫地江相掛逃下候由相分申候、手負等

余程為有之哉ニ御座候、(毛利広封)長門守ニも出張ニ相成候筈ニ

而、出立ニ相成候得共、十九日一左右聞得候と引返し

ニ相成候由、此方人数も兵庫固メ被仰付、半分は廿四

日ニ繰出、未兵庫江相固メ居申候、廿七日晚ニ長江吟(味)

方(脱々)いたし候、堂上方出仕御差止ニ付、越前・会津・此(松平茂昭) (松平容保)

御方江手配ニ而、出仕被差止候堂上之所、相固メ候様

被仰付、則夜より人数分配未相固メ居申候、併是は全

ク御恐懼より之事ニ而、出仕被止候堂上は余程恐レ入

候由、もふハ御曳取ニ相成候而可然と奉存、申上置候

事ニ御座候、九門内外ハ矢張甲冑・技身・切火繩等ニ

而固メ、廻方等堅固ニ御座候、一橋公も毎日之御參

内、会津・淀・所可代(柳葉正邦) (松平定敬)は繰廻老人ツ、勤番ニ御座候、

一体之形勢ハ、別段相替候事も無御座候、市中も追々

静り、焼庭取片付方共いたし居申候、

一長防追討之命相下り、此御方も右之討手被仰出、御国

元江御手当相成居候様、御達ニ相成候付、早々其段申

上越賦御座候処、既ニ出陣日限・攻口等相分候筈ニ而、

今日明日と相待居、相分候ハ、蒸氣船を以、早々御届

申上候筈ニ相見合居候処、未副將之所御決定無之、夫

故今日迄も相分不申候付、御手当ニも相拘事候付、極

急キ差立申上越候、尤蒸氣より差下候得は、急速ニ相

達可申候得共、当分兵庫表出張被仰付候付而は、海陸

之備無之而は不相濟候付、無抛陸地急キ差立申候、尤

副將は越前老(松平慶永)公江被仰付御内決ニ而、早々御出京有之

候様、幕よりも御目付早打ニ而越表江被差越候、此方

よりも是非御出之処申上候様と之事ニ而、拙者・大島(西郷隆盛)

兩人より中根迄細書相認、海江田武次(曾江)・大脇祐九郎兩

人、一昨廿七日当地出立、越藩江差越申候、会よりも

使者相立候よし、酒井十之丞出京之由ニ而、昨日參候

付承候処、第一此御方様ヲ御見当ニ被成候由、併幕よ

り御使も有之候得は、早々御出京ニ相成は相違無之と

の咄ニ御座候、左候ハ、来月十日より内ニは御着ニ

相成可申候間、其上ハ出陣日限等も相分可申候付、幕

之蒸氣船ニ而も借用いたし、早々御注進申上候、

一朝廷も暫クは大騒動、何共難申上、誠ニ恐入候、もふ

ハ静り候得共、一事令之下ルニ付而も例之御恐懼因循

未去兼申候、国事掛等之所も昼夜之御詰ニ御座候得共

廿八日夜より御暇ニ相成、昼中御參

内ニ御座候、(伊宮・山階宮)兩宮・内府公十分御振はまりニ而、先

仕合之事ニ御座候、乍併此末之御所置中々六ヶ敷御座

候間、如何と苦心此事ニ御座候、

一分取高名等未彼是ニ而、能ク取調出来不申候間、跡よ

り取調、功不功之事件旁可申上越候、何分人数諸方江

分配繰出旁ニ而行届不申候、

一分取米四百九十俵位御座候処、市中失焼ニ付、施行と

して差出候処、余程一統難有、夫ニ而老日之渡世もい

たし候位之事ニ御座候、

一宮之城ニ茂変事ニ付、御踏止ニ相成居候得共、何分御

病後之事ニも有之、其上此末之所如何之形勢ニ可成立

も難計御座候付、一往御帰国ニ而御保養被遊、先々十

分之御奉公御勤有之度、大島杯談合之上、強而相願候

処、其通ニ御聞濟ニ相成申候付、近々今一左右相分候

上ニ、蒸氣船差下され候節、御乗船ニ而御下り之筋ニ

御決定相成申候、来月十日前後ニ可相成と奉存候、

一山海宮兵火ニ而丸焼ニ御逢被遊候付、差当り御難波ニ

付、為御助勢金三百兩被進方取計申候、(正親町三条実愛)正三卿も同断

ニ付、金百兩被進取計候処、兩所共御国元江宜敷御礼
申上候様、厚御挨拶ニ御座候、差掛之事ニ而右通取計
申候、

山海宮は、当分

准后御下り御殿江御仮殿ニ御座候、正三卿は一乘院御
里坊ニ御座候、

一江戸表江入塾等被差出置候人数も変事相分、幕船より
便人いたし、昨日着いたし申候付留置申候、大砲手続
等も両公子直ニ今日御覽ニも相成候処、余程能ク出来、

御用立可申と存申候、御国家之御仕合ニ御座候、

一長州大坂屋敷ハ御城代(大河内信吉)より御達ニ相成引渡相済、直ニ

取毀ニ相成候よし、留主居ハ川口迄送出しニ相成候、

爰元長邸ハ留主居(直)乃美火ヲ掛自害いたし候よしニ御座
候、

一小蝶丸ハ関東より未乗帰不申候間、帰次第ニは早々被

差下候様取計可申候、

一御手当之義は、此前之位ニ而可然奉存候、尚諸藩之模
様も承相分候ハ、早々申上候様可致候、此節は無別
条急速ニ相運可申と奉存候間、御手当ハ早々御備有之
度奉存候、此後長州大挙之所は逆も六ヶ敷、是程挫か
れ候而は、頭之上り候丈ニ無之、其上対

天朝、敵対之道無御座候、早々追討より外ニ道筋有之
間敷候、長江探索も差出置申候間、帰次第ニは早々可
申上候、

右外段々申上度事件多々御座候得共、何分筆紙ニ尽兼
申候間、近々出陣日限等相分候上は、大島・拙者兩人
之内ニ吾人罷下、細々言上仕可申候、只今迄之処ニハ
一日片時も寸暇無之、無抛細大申上兼居申候、今便よ
りハ跡便急ニ不申上候而は不相成事と奉存候付、今日
ハ上田郡六急キニ而差立、当人江細事申含被差下候条
直ニ御聞取、達

貴聞候義共は可然御執計可被成候、此旨早々御内用を

以申越候、以上、

七月晦日

認

大久保一藏殿

小松帯刀

再白、(審久久庵)撰津殿江別段問合不申候間、宜敷御頼申上候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三九一号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横五四〇種

〇二三 禁門ノ戦ニ関スル朝廷ノ褒賞

二三 新納嘉藤ニヨリ幕府ヘノ願書

日州ニ於ケル幕領預リ之件

(端裏村邊)
一新納嘉藤次届書」

(島津久光)

先般大隅守在京之砌、日向国細島、(島津茂久)修理大夫江御預所被

仰付、難有仕合奉存候、然処細島御引渡之上は、則より

御廻米其外所置振等之儀ニ付而は、多端之用途ニ而、御

預所并国元御当地江役場相立、掛り役人も別段申付、

且海岸引受之場所ニ御座候得は、台場備向等之手当は勿論、守衛人数も差出置、彼是相混不相応之入価ニ相及可申、就而は、細島御高頭三拾八石余御座候由、且又同所之儀は、入船場も有之候得共、日州一国之掛船ニ而、何も益筋と申程之儀更ニ無之、右余潤を以、前文出費旁迄も行届不申、殊ニ国許之儀は去夏戦争以来、勝手向必至と難決之折柄ニ而殆当惑仕申候、左候処一昨年来、大隅守儀御国家之御為莫太之入価も不厭、度々上京又は致出府、周旋尽力仕候勤勞を以、不容易御評議被成下、右通被

仰付候儀と、上下一同難有奉恐察候、然ニ前件之次第故何様差略仕候而も、当然之事さへ行届不申、全

御趣意之詮も立兼候道理ニ而、別而心配罷在候、依而は御時節柄も不願、随意之願筋ニ而、実以奉恐入候得共、厚

御趣意も相立候様仕度念願奉存候間、猶又篤と御賢察被成下、何とそ出格之御評議を以、日州御料所之分は惣而

細島江被召付、御預所被仰付被下候様、偏ニ奉願候、尤
日州御料所惣御高頭式万八千石余御座候段、伝承仕候付
右余勢を以趣法相立防禦筋等行届、

御恩沢奉仰候様仕度候間、是非御許容被成下度、遮而御
同意可申上旨、修理大夫申付越候間、此段申上候、以上、

七月
松平修理大夫内
新納嘉藤二

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三九二号
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・二種 横一六七種

二三 自文久三年九月
至元治元年六月 長崎貿易収支計算ニ付伊地

知壯之丞報告書

(表紙)
元治元年子七月

於長崎御商法金銀錢入払 総一

一金七万三千兩

右堀勘兵衛宰領ニ而被差廻候拾三万兩之内、銀錢

其外御買入本

一金壹万六拾七兩三歩

右御蔵御在合之内、同断、

一金七千兩

右大坂より御下金ニ而、同断、

一金三千八百六拾壹兩貳歩

右白蠟七万五千三百斤代、

一 銀錢四千六百八拾八枚五合五勺

右樟腦貳万三千四百四拾貳斤七合五勺、

一金四千九兩貳歩

右小判金千百八拾八枚兩替本、

一 銀錢五千九百五拾枚

右御国製茶御払代銀御取替ニ候、

一金貳万兩

右久留米様蒸氣船代内返上ニ候、
(有馬慶順)

一 銀錢八万七千九百貳拾壹枚

代金五万五千貳拾貳兩貳朱、

一 金九千八百四拾九兩貳步貳朱

一 銀七匁貳分貳厘

右綿千六百五拾九本、英人カラハ・清人沈篤齋申

請代、

一 金三万貳千四百四拾七兩壹步三朱

右綿五千本、英人カラハ申請代、

一 銀錢九万三千百八拾貳枚三合五勺

右綿九千百六拾本、清人沈篤齋申請代、

一 銀錢八万三千九百七拾枚

右綿八千五百五拾五本、英人カラハ申請代、

一 銀錢八千貳百拾四枚貳合六勺

右綿八百五拾三本、英人カラハ申請代、

一 銀錢貳万五千五百三拾三枚三合八勺

右綿貳千四百貳拾三本、英人レンボ申請代、

一 銀錢千七百六枚壹合壹勺

右五陪子^(箱)三百拾三丸代、英夷カラハオールト申請

代、

一 金貳百拾七兩貳步

右三石昆布百三拾丸、異人申請代、

一 金七拾七兩三朱

一 錢七百七文

右椎茸八箱、異人申請代、

一 金五百八拾壹兩三步

右割昆布百六拾五丸、異人申請代、

一 銀錢壹万五千五百四拾六枚七合七勺

右宇治茶千貳百八箱、異人申請代、

一 銀錢千貳百五拾四枚

右木綿形付千六百七拾貳反、異人申請代、

一 金百八拾三兩貳朱

右樟腦貳拾五樽、異人申請代、

一 銀錢三千枚

代金千七百六拾貳兩貳步兩替本、

一 金五千百三拾兩

右小判金千五百枚兩替本、

- 一 金壹万九兩貳步三朱
- 一 右清人沈篤齋・英人カラハ諸品申請代、
- 一 金千四百七拾八兩壹步
- 一 右小判金四百三拾八枚兩替ニ候、
- 一 銀錢壹万貳千九百拾七枚九合五勺
- 一 右清人沈篤齋、綿申請代、
- 一 金壹万五千兩
- 一 右長崎会所より御拝借ニ候、
- 一 洋銀三万枚
- 一 右同断、
- 一 金四万八千六百貳拾壹兩貳步
- 一 右堀勘兵衛宰領被差廻候拾三万兩之内、
- 一 小判金五千四百三拾壹枚
- 一 右御国元より時々被差廻候本、
- 一 銀錢八千貳百九拾九枚五合八勺
- 一 同 八百六拾九枚五合八勺
- 一 右長崎町人綿屋伊兵衛拝借上納本、
- 一 錢七貫七百拾八文
- 一 代金壹兩三朱兩替、
- 一 合金貳拾四万五千五百拾九兩貳步
- 一 合銀錢三拾八万九千七百四枚七合貳勺
- 一 合小判金八千五百五拾八枚
- 一 合錢九貫百三拾七文
- 一 金八拾八兩三步三朱
- 一 錢四拾四文
- 一 右小蝶丸江御乗せ付用之品々御買入代、
- 一 金百六拾貳兩壹朱
- 一 錢三百文
- 一 右越前様蒸氣船御借入ニ付、彼御方御家中滞崎中
- 一 御挨拶向並諸雜用、
- 一 金八拾五兩貳步

払

一 錢貳百四拾八文

右越前様蒸氣船御借入相成候付、御乗せ付品々御

買入代、

一 金貳百八拾壹兩貳朱

一 錢貳百文

右製鉄所より御借請相成候蒸氣船御乗せ付之品々

御買入代、

一 金九兩貳步

右筑前様(黒田齊徳)蒸氣船御借入付、諸雜用、

一 金三百兩

右平運丸雜用銀払、

一 金三兩

右平運丸乗付居候水夫共賄料払、

一 金貳百三拾五兩貳步

右は秋より冬迄、蒸氣船御買入方并御商法ニ付、

新地御藏御借請方、又は石炭売捌方御願付、長崎

御奉行其外江御挨拶、

一 金百兩

右小蝶丸用心銀払、

一 金七拾兩

右平運丸用心銀払、

一 金百六兩

右平運丸・小蝶丸御買入方付、長崎御奉行其外江

御挨拶、

一 金四兩壹朱

一 錢百四拾六文

右平運丸乗付賄夫けさ次郎、養生所江差越、致療

治居候処、御船出帆後快氣付、陸地被差返候間、

旅籠料并船中賄料払、

一 金壹步

一 錢貳百七拾貳文

右同人歩行不自由付、茂木浦迄駕籠賃払、

一 金五百九兩三步

一 錢貳百五拾九文

右平運丸御買入付、諸雜用、

一 金拾兩三步式朱

一 金四百兩

一 錢三百拾式文

右平運丸乗付人数御賄料払、

一 右亥十二月廿九日御藏仕舞祝付被成下候酒肴并諸

一 金四万七千九百兩

一 雜用払、

一 洋銀貳万五千枚

一 金三拾三兩

右平運丸代并大砲代等之内払、

一 右子正月二日御藏開祝付、酒肴并諸雜用払、

一 銀錢五百八拾枚

一 金三万八千三百兩

右時々御買入相成候蒸氣船御乗せ用之品々御買入

一 銀錢壹万枚

代、

一 右安行丸御買入代、

一 銀錢七百枚

一 銀錢八万七千貳百五拾枚

右久留米様御買入之蒸氣船江乗せ付相成居候石炭

一 金三朱

代、

一 右平運丸御買入代之内払、

一 金八兩貳步

一 金六拾三兩貳步

右久留米様蒸氣船運動引渡之節、檢使被差出候酒

一 錢七百六拾五文

肴料、

一 右小蝶丸御買入之節雜用払、

一 金貳拾壹兩三步壹朱

一 銀錢七万五千枚

右同断ニ付、諸雜用、

一 右久留米様蒸氣船御買入代、

一 銀錢五万五千枚

右小蝶丸御買入代、

一 銀錢六百七拾五枚

右時々蒸氣船江乗せ付相成候石炭代、

一 銀錢貳千枚

右久留米様蒸氣船江別段積入相成居候石炭代、

一 銀錢百八拾枚

右白鳳丸江積付相成居候大砲貳挺代、

一 銀錢五百八拾枚

右蒸氣船塗具并異國油又は帆耳総代、

一 銀錢六万枚

右翔鳳丸代之内払、

合金八万八千六百九拾三兩貳朱

合銀錢三拾壹万六千九百七拾九枚

合錢貳貫五百五拾文

右蒸氣船方

一 金百八拾三兩壹歩

一 錢貳百三拾三文

一 右異人江時々被成下候料理代、

一 金壹兩貳歩

一 右製鉄所職人江早々出来方御頼付御挨拶、

一 銀錢拾五枚

一 右西洋書籍御買入代、

一 金貳拾四兩壹歩貳朱

一 右花毛氈六丈五尺御買入代、

一 金五拾兩

一 右中原猶介上京付用心銀払、

一 金貳兩貳歩

一 右長崎詰横目付役并小仕共致太儀候付、御褒美として被成下候、

一 金貳拾兩

一 右岩下新之丞出崎之節、集成館入用之品々御買入

代、

一 金六兩壹步三朱

右異人江被成下候料理代、

一 金拾貳兩三步貳朱

右船改掛役々江御挨拶、

一 金三兩三步

右新地御藏御借請ニ付、番人江取締向等御頼相成

御挨拶、

一 金貳拾八兩壹步貳朱

右異人江被成下候料理代、

一 金貳拾八兩壹步貳朱

一 錢七百文

右異人江被成下候料理代、

一 金貳拾壹兩貳朱

一 錢四百三拾八文

右新地御藏土地ニ而、敷付用之杉丸太御買入代、

一 銀錢壹万四千三百三枚壹合

西洋總壹万四百貳拾五斤代、掛屋御用、

一 金貳百兩

右調役大坪本左衛門江御内用御頼ニ付、御肴料、

一 金六拾壹兩貳步

右英人江紅白縮緬外貳品被成下候代、

一 金百兩

右長崎会所より金壹万五千兩御拝借ニ付、調役其

外江御挨拶、

一 金拾三兩三步壹朱

右製鉄所掛調役田中秀平其外江御内用御頼付、酒

肴料、

一 銀錢貳万六千三百拾八枚六合

右釰丹三拾三万七千四百拾八斤御買入代、

一 銀錢貳百八枚

右シャンハン酒箱拾七御買入代、

一 銀錢貳百九拾四枚六合七勺

右キナソート百拾瓶代、

一 銀錢拾貳枚

右蘭書御買入代、

一 銀錢九枚

右覗目鏡御買入代、

一 金貳千五拾兩

右御物方江入付払、

一 金五百六拾六兩三朱

右製鉄所より御買入相成候石炭代、

一 銀錢千貳百枚

右英人江品々御注文代、

一 小判金三百三拾三枚

右越前様御家中江大坂為替払、

合金三千三百七拾四兩壹朱

合金三千三百七拾四兩壹朱

合銀錢四方貳千三百六拾枚三合七勺

合小判金三百三拾三枚

合錢壹貫三百七拾壹文

右雜

一 金四拾兩壹步

右御手広御商法付、運上所掛調役其外江御挨拶、

一 金貳兩貳步

右運上所掛山口源之進外四人江御挨拶、

一 金貳拾壹兩三歩

右長崎御奉行其外御挨拶品御買入品代、

一 金七兩

一 錢六百文

右綿其外品々夜中水揚付、入用之品々御買入代、

一 金貳歩三朱

一 錢貳百文

右綿其外之品々、異人江引渡方之節、出役之地役

人江被差出候弁当代、

一 金拾三兩壹歩三朱

一 錢五百六拾貳文

右大坂より御買入被差下候綿積船宰領被差越候水

先江被成下候賃錢、

- 一 金四拾九兩壹步三朱
- 一 錢貳百六拾四文
- 一 右產物所掛高石文次右衛門其外被召呼候節々被差出候料理代、
- 一 金七千兩
- 一 右浜崎方江諸物御買入代として被相下候、
- 一 金壹万六拾七兩三歩
- 一 右筑後茶御買入代として被相下候、
- 一 金千七百六拾貳兩貳歩
- 一 右銀錢三千枚御買入代、
- 一 金三千八百六拾壹兩貳歩
- 一 右白蠟七万五千三百斤御払代、浜崎方江諸品御買入代として被相下候、
- 一 小判金四百三拾八枚
- 一 右代金千四百七拾八兩壹歩兩替ニ而本立、
- 一 金三兩壹歩貳朱
- 一 錢三百文
- 一 右小判金四百三拾八枚兩替ニ付口錢、
- 一 小判金千五百枚
- 一 右代金五千百三拾兩
- 一 右長崎町人綿屋伊兵衛方ニ而兩替本立、
- 一 金五千兩
- 一 右石炭御買入御本手銀江入付払、
- 一 金壹兩三朱
- 一 代錢七貫七百拾八文兩替ニ而本立、
- 一 金五兩貳歩
- 一 右異人并產物所掛役々被召呼候節、諸品々代、
- 一 金貳兩貳歩
- 一 右英人カラハ定日雇之周次郎外壹人、諸品渡方之節、御世話いたし候付被下候、
- 一 金貳万八千貳百貳拾六兩壹歩壹朱
- 一 錢八百六拾五文
- 一 右於下之関、綿其外御買入代、
- 一 金六千六百四拾壹兩

一 錢三百五拾九文

右於防州岩国、綿其外御買入代、

一 金八百六兩壹步

一 錢三百六拾壹文

右於四国、樟腦其外御買入代、

一 金子五百四拾九兩貳步貳朱

一 錢四百八拾壹文

右於備後鞆、綿其外御買入代、

一 金七百五拾八兩壹步壹朱

一 錢五貫四百七拾四文

右大坂より積下候綿其外運賃上乘賃、

一 金四百五拾兩貳步

一 錢四貫九百文

右、下之関并備後・四国・備後^(マ)・防州ニおひて御

買入品、長崎迄之運賃并上乘賃、

一 金五百八拾八兩三步

一 錢百八拾四文

右品々於長崎致取扱候付、雜用并諸所江被差越候
飛脚賃、

一 金百拾六兩貳步三朱

一 錢三百貳拾八文

右諸品々異船迄積送ニ付、上荷船雇銀、

一 金拾六兩壹步貳朱

一 錢壹貫五拾六文

右御国元より被差廻候樟腦貳百挺、長崎迄之運賃

並上乘又者水揚日用賃、

一 金三万三千三百八拾五兩三步壹朱

一 錢貳百六拾三文

右於長崎、綿御買入代、

一 金四拾兩

右於長崎、御買入之綿代金三千兩及不足月延之相

談ニ而、一割利付三ヶ月分、

一 金五万五千貳拾貳兩貳朱

代銀錢八万七千九百貳拾壹枚兩替ニ而本立、

一 小判金千八百八拾八兩

代金四千九兩貳步兩替ニ而本立、

一 金拾壹兩

右小判金千八百八拾八兩兩替之口錢、

一 金壹万五百兩

右大坂ニおひて、諸品々御買入代として浜崎手先

江統払、

一 金壹万五千兩

右長崎会所江御返上払、

合金拾七万五千四百五拾貳兩三朱

合銀錢五千三百貳拾五枚

合小判金三千百貳拾六枚

右御商法方

一 金貳千四拾七兩貳步壹朱

一 錢七百六文

右米九百四拾五石御買入代、

一 金四百五拾兩

右銅庫方江入付払、

惣合金貳拾六万拾六兩三步三朱

差引

金壹万八千四百八拾七兩壹步三朱払過

（貼紙）
一 本文払過、不足之間違筋細々相しらへ候得共、銀錢太分御

買入之節々、払替之手数不行届之形ニ而、右は時々相場ニ

而兩替為相成善候得共、全御帳留無御座候付、しらへ付不

申候」

惣合銀錢三拾六万四千六百六拾四枚三合七勺

差引

銀錢貳万五千六拾枚三合五勺払不足

惣合小判金三千四百五拾九枚

差引残

小判金五千九拾九枚

惣合錢拾九貫八百八拾貳文

差引

錢拾貫七百四拾五文

外ニ

金千兩

右製鉄所地役人共拝借銀、

金千百八拾六兩貳步貳朱

銀錢三百五拾枚

錢五百六拾文

右服部清左衛門其外之者の方へ時々出入払、

金千七百七拾六兩壹朱

小判金五千九拾九枚

銀錢三千九百六拾四枚五勺

錢壹貫四百四拾文

外ニ小判金百六拾七枚

金貳兩貳步貳朱

右貳行、上町人鬼塚莊助外ニ壹人、自

物綿御物之筋を以、異人江壳払候付、

長崎会所江相納候綿代銀惣高ニ相掛候

五部銀、

右六行、現殘金錢ニ而浜崎方江惣而御下金、

右去亥九月より当六月迄、於長崎御商法総右之通御座

候、以上、

子七月

伊地知壯之丞(眞鑿)

冊子原寸 縦二八・五糎 横二一・三糎 二五枚

三〇 海江田武次日記抜萃

長藩主父子黒印状其他

(端裏付箋)
「海江田日記ノ書抜」

一長州家老国司信濃敗軍之節、室町中立壳角の町家を本

陣といたし候故、直ニ屋さかし有之候処、具足箱中江

左之通長州父子より之条目有之、使を差出候処、皆々(毛利慶親・広封)

大笑ひナリ、主人を捨而我身逃去候事、どふ云ふ者か

とかえす／＼大笑也、甲冑・軍扇ハ捨置候事、

申聞条々

六月

一今度其方事上京申付、諸隊之者預置候、諸事無緩可管

国司信濃とのへ

轄事、

廿三日

一伍中之者は令を伍長ニ受、伍長ハ令を隊長ニ受、隊長

一西本願寺江長人僭居之段承候故、会津へさし越、柏寄

ハ令を惣督之指揮を受、諸隊一和可為肝要事、

才一江引会、探索之事等を談ス、

一私闘ハ不及申、輕拳妄動大事を誤り候儀は尤厳禁之事、

廿四日

一惣而非礼非義之振舞有間敷事、

一天朝より諸藩へ御達左之通、

一国家之動静を猥ニ他へ洩す間鋪事、

長州脱藩士等拳動頗差迫、既開兵端之由相聞、第一総

一奸淫大酒等堅禁止之事、

督以下在京諸藩兵士等尽力征討、弥可輝

一僭上虚飾之衣服は勿論無用たるへく、惣而諸士・匹夫、

朝權事、

貴賤之分限不可乱事、

右七月十八日御達

右之条々違背之者於有之、軍律を以相糺、品ニ寄

右、先日御発ニは相成居候へ共、御混雜故、今日皆

切腹可申付者也、

拝見、

鳳闕之下不慮紛擾之処、一同出勢抽丹誠候段、

叡感不斜、大義

元治元
子



思召候事、七月廿四日



一天龍寺末寺義道と申和尚、是迄長人ト交を結候故、御用相成、糺明いたし候様被仰付、篤と相糺候処、格別成事ニも無之、暇遣候事、

一兵庫固町田民部殿出張、吉利群吉・川上右膳組三十人(久成)ツ、諸郷平田平六・奈良原喜左衛門・仁礼平輔(景範)・川上八郎左衛門組被差出候、

一天龍寺へ囲米五百俵位有之、御邸より分捕にて、市中焼失之者へ施行として御遣相成、皆々難有拜受、山崎へ六百俵位囲米有之、会津分捕ニ而同断差出候由、
一山崎へハ会津差向候処、五十人計残居皆討殺之由、やぶ中ニ而打果候も有之、又逃去候者も有之由也、

右海江田日記之書抜

文書原寸 縦一六・二種 横一七八・八種

二三 西郷隆盛長州偵察要目廿四ヶ条

一人心和、不和之事、

一君臣合体、義論一致之訳、

一謀主之人柄姓名之事、

一武備蔽、不蔽之事、

一築城形勢之事、

一人数手配之次第、

一毎隊人数多少之事、

一浮浪士増減之事、

一諸藩応援之事、

一末家一門随従之事、

一七卿動静之事、

一京師百卿方江意通之有無、

一義卒と割拠之訳、

一積金、積穀多寡之事、

一浪士給金何程之事、

一外夷襲来ニ守備を設候欤、征討軍配ニ策を用候欤之事、

一京撰辺間牒之姓名、隠家之事、

一年貢取方厚薄之事、

一出金、出米之事、

一浪士等一日飯米何程之事、

一小銃・大砲何程之事、

一京撰二人を差出候ニは、陸地を押し候哉、海路を涉り

候哉、

一船用意何方ニ何艘有之候哉、

一浪士之魁と相成主宰之人柄姓名之事、

本文書ハ「鹿児島史料 玉里島津家史料」第一卷第七九号文

書トシテ掲載シタガ、同文書ノ所在ヲココニ確認シ再掲スル

猶又、第一巻収載七九号文書ノ所在モ確認デキタコトヲ付記

ス、

文書原寸 縦一六種 横六一・五種

二三 福原越後へノ御沙汰及長兵陣營探索報告

〔表紙〕長藩江御沙汰書

一橋公臣下之書翰

乃美織江書面

土屋公御届書

河内屋金七口書

生子屋小兵衛同

祇園張札

伏見ヨリ来紙并評説二三ヲ付ス」

長藩江御沙汰書之写

長州藩士、頃日出願書之趣候得共、携兵器出張之由、

甚不穩候、元来於長州は、近代殊に勤王之志情深厚之

処、右様之次第甚不穩候間、天龍寺江罷出候輩、本ノ、水伏

見表江引退、出願之儀は経其筋可申、自他之差響ニ茂

可相成義、各謹慎鎮静候様可為説得旨、御沙汰ニ候事、

右は二日御目付伏見ニ御出ニ相成、福原江之御

申渡也、七月四日松山藩相田敏太ヨリ申来候写、

右御沙汰ニ付、福原氏御答書は、先度ニ申上置候事、

一橋家臣下ヨリ此方家臣江之書面

殿下二条款

過刻は參殿、御懇篤被仰下難有仕合奉拜謝候、扱其節御尋御座候諸侯説得方御請濟之分、最早罷掛り哉之旨、歸路藤堂藩江罷越承り候処、今日長州留守居乃美織江(直)へ談判之上、明朝為説得罷出候哉之由御座候間、此段奉申上候、左様御承引可被下候、(前田齊泰)加州侯之模様ハ更ニ相分不申候得共、是ハ先方御尋相成候ハ、速ニ御分り相成可申と奉存候、扱又館江罷歸候処、只今長州留守居より別紙之通申掛候間、是又為念一寸奉申上候、先ハ右等奉申上度、恐々頓首、

七月九日

過日は大監察ヨリ御授相成候御沙汰之趣、精々於越後苦心周旋罷在候所、猶又区々御懇切ニ御高諭被仰聞、別而難有思召之程奉対候而、誠ニ尽力仕候得共、御推察茂被成下候難事ニ付、容易相運奉安高懷候様不得仕、深ク奉恐入候処、先々天龍寺粟生光明寺江出張罷在候人数、今明日中分散仕候様取扱仕候様取扱仕、其運仕

候而、天龍寺之処モ早束人数引替等ヨリ相運、何分ニ茂御沙汰之趣貫徹仕候様説得可仕と奉存候、此段御聞届可被下候、以上、

七月九日

右二通ハ宇和島齊藤氏ヨリ七月十二日借写

土屋采女正差出書付(直)

一昨日廿日夕、水戸様御藩士五千人程江戸表へ登り候付、人馬差出候先触有之候旨、中貫宿ヨリ注進有之候、探索差出候処、一向様子不相分、昨廿一日ニ至り而右人数ニ而無之、浪士士同中源蔵と申者之徒数十人押参り候旨ニ付、真鍋江増人数百人計差出置候処、朝五ツ時過、俄ニ真鍋町へ向放火致シ一時ニ燃上り、猶又真鍋口江向炮発致候付、一番・二番手人数早束出張、防禦手配仕候処、其内立田廓方へ一組相廻り候旨注進有之候付、其方へモ一隊差出、采女正差図罷在之内、城内

へ一亦一討候得共、飛火等無之、真鍋町家ヨリ大数不
残焼失、四時過火鎮、敵方ヨリ折々砲発致シ、其後真
鍋宿ヨリ引揚ケ罷在候、別手ニ而立田口之方、又は六
町之方江茂人数相廻シ候付、諸方へ防禦手配御座候由、
小市名台新廓へモ鉄砲相掛、浪士ハ散乱致シ候旨、大
放火ニ而一両軒焼失仕候段、采女正在所ヨリ申付越候、
此段御届申上候、以上、

六月廿二日

土屋采女正家来
上田小兵衛

右書付從江府表只今申来候間、定而風聞御承知と奉
存候得共、不取敢御注進奉申上候、以上、

故有而名前除之 松山藩相田氏ヨリ借、写之、

伏見兩替町三丁目風呂屋渡世 河内屋金七申口
山崎形勢及見渡心底ニ而手伝方ニ相成、鉞と鉞と所持、
此程中より二三日之間、同所江罷越候処、長州人より
天王山ニ凡幅四十間程ニ奥行トモ四十間程、皆荒木作、

松杉之皮付其假ニ而、右皮類・杉松葉之屋根ヲ葺候建
物一ケ所有之、右裏手ヲ松其外雜木切倒シ、登り一方
道ニテ、其外ハ往来難成用意いたし有之由、

一同所丹波口之方ニ而、二タ抱茂有之枝付之樹木ヲ以、
逆茂木等致シ、至而細道ニ当時致シ置、吹乱往来差留
候様子相見得候由、

但此道至而用害不宜候哉ニ而、右之拵致シ候由、

一山崎之要害一番手ノ者罷越候迄ニ出来可致由申候、長
州人モ手伝人足之假ニ取補理罷在候由、

一山崎ニ而、夫是普請場等ニ罷居候者、凡六七百人罷居
候哉ニ相見候由、

一天王山ヨリ淀城向ケ大砲三四挺掛ケ有之候由、

但雜兵体ノ者茂本ノマノワケハ淀タト申居候由、

一山崎屯集候士、皆々稽古着・襦高袴長短有之品ヲ着用
候由、

一山崎行ノ手伝賃錢、一日六百文程ニテ、朝一ケ度支度
致シ罷越、昼夕ハ先方雜用之由、

一郡山固、此程引払候由、然ル処右固所下陣、其外共不
残長州人直ニ借置居候由、

一二番手二大將分可有之哉、人足共申居候由、

一山崎寺々之坊主一人茂他出留ラレ、長州賄ニ有之由、

一観音寺其外へ参詣之者有之候節ハ、麓ニ而参詣人爲待

置、賽銭等長州人請取、夫ヨリ観音堂へ相渡、長州人

ヨリ請取書ヲ取、爲待置候参詣人へ相渡候由、

右之趣申上候、

七月六日

金七ヨリ前ケ条之外、猶又申立候、

一昨四日、摂州高槻表ニ用向有之、引取掛ケ、同州広瀬

村専太郎と申方親類ニ付、罷越一宿いたし候、其節天

王山之形勢及見度存候付、参詣ニ托シ罷越相尋候処、

所詮不相成と専太郎申候、併専太郎義ハ同所ニ而作事

方ノ由ニ付、同人相頼、手伝方いたし貰ひ、鑑札ヲ右

専太郎ヨリ請取、宝寺ヨリ登山いたし候ト申之候由、

一同所ニは長藩凡百人バカリ罷在候、大砲二挺相飾有之
宝寺寺中ニ而陣所之様子、右同寺通行、拔裏道天王山
へ罷上り候由、

一帯刀致シ候雜兵体之者、口々ニテケ様ニいたし候より、
早クヤラナクテハイケネへと申居、淀目当と風説有之
由、

一天王山絶頂ハ二丁バカリ開キ、南北へハ五六丁モ開キ、
宝寺へ通路自由之由、

一來ル十三日ニ二番手罷越候由ニ而、夫迄ニ普請出来之
由、当地因州屋敷ニ而、此頃別当相勤罷在候松と申者

村上町辺ニテ咄致居候趣ニは、同藩河田(景左)左久馬、此程

より当地屋敷江罷帰り居候処、不相分長藩之者、因州

屋敷ニ而同家之鑑印仕替、因州家来之名札相認、左久

馬同道いたし上京いたし候、長藩之者ハ同屋敷江送り

込ミ、左久馬儀は自分京屋敷江引取候由、尤左様之儀

ハ折々有之候段、前書松噂いたし居候趣、不取留風聞

承り候間、此段申上候、尤何時ノ比歟不相分候得共、

右松儀、先月頃より召抱候由ニ相聞得候由、

一 酉ノ上刻、一刀差ノ者一人、高瀬堤書役前ニテ道ニ迷
ひ居候体ニ相見得候間、何トナク為尋候処、粟生へ可
罷越と出掛ケ候得とも、途中渡場も有之哉ニ付、引返
し可申哉と思案罷在候趣申候間、国名相尋候処、長藩
付屬之者之由申之、色々嘶候内ニ、親旦那ハ当地ニ而
若旦那ハ粟生ニ御座候旨申居候、右旦那と申茂誰ヲ差
シ申候儀哉難相分、今一段探索可仕と存居候折柄、帯
刀人兩人、東ヨリ罷越、右ハ全長藩ニ而前書一刀指之
者同道、八丁繩手罷越申候、

七月六日

一 当地東丁生子屋小兵衛と申方ニ而、高張挑燈數二百本
長藩ヨリ誂申候由、
伏見殿

一 因州五六拾人、同藩荒尾内膳ニ付添、当地表町鮓屋方
着、昨六日入京之由、
(成重)

一 因州公ヨリ御人数五百人バカリ、長州公城下へ差向ケ
(福田慶徳)

ラレ候風聞、

一 長藩士共、八幡当職へ直之相對ヲ以、右八幡之坊不殘
借受候由、
一 桶類并筵等多分買求メ候由、
一 結城之城ヲ浪士之者儀、当分借受之相對致候由ニテ、
終貸渡シ候由、城主其外共江戸表へ不殘引越候由、
一 下野国トチ木宿、右浪士ノ義燒弘ヒ候由、
一 今朔日八ツ半時、長藩士船七艘へ乗組、当地上り北浜
丁出口屋作兵衛方へ着致候由、尤乗組人数不相知、

子七月朔日

右不取留風聞 七月十二日松山藩ヨリ借写ス

一 松山侯ハ説得御成功之御觀徹無之ニ付御断、
一 对州公ハ仰出サレル之内、於長州ハ勤王之志情深厚ニ
(宗重正)

付、兵器ヲ相携申候、依之趣意齟齬仕候とノ御沙汰、
且歎願之有無ニ拘ハラス何々ト申二ヶ条ニ付、説得御
断ト也、

右は松山相田氏ノ咄、筆之、

一於丸山集会肥後人ノ咄ニ、昨十一日ノ黄昏時分、於三条木屋町、松代藩佐久間修理馬^(象也)上通行ノ所、何者共不知兩人馳寄セ、一人左リノ股ヲシタ、カニ切ル、落ル所ヲ一人アリテ切伏セ、何国共ナク逃失タリト也、此人累年高名也、説ノ可否ハ暫オイテ、其人ニ於テ痛數事也、

七月十二日祇園石壇赤門北手ニ張紙之写

松代藩

佐久間修理

此者元来西洋学ヲ唱ヒ、交易開港之説ヲ主張シ、枢機之方々へ立入、御国是ヲ誤候大罪難捨置候処、利近日奸賊会津・彦根之ニ藩と同シ中川宮ニ事ヲ謀、恐多クモ九重御動座、彦根城ニ奉移候義ヲ企、昨今頻ニ其機會ヲ窺候、大逆無道不可容天地国賊候、即今於三条木

屋町加天誅畢、但シ打首可掛梟木之処、白昼ニ付不能其儀者也、

元治元年子七月十一日

皇国

忠義士

七月十二日夜、於伏見左之通り承之、

一 国司信濃去八日山崎表江着、惣人数凡六百人、同人罷登り候儀は、先達而福原越後国許出立後、追々多人数罷登、万一兇略之儀共有之候而は、

朝幕ニ奉对奉恐入候間、右人数為鎮撫罷登候、越後申合鎮撫方可仕之御届振之由、

一去九日、福原越後伏見より山崎江罷下、十日伏見江引取候由、

一天龍寺屯者とも鎮撫方ニ付、殊之外心配之段、伏見より越後差遣置候森喜太郎より申参ニ付、国司信濃天龍寺江罷越教諭可仕旨、御届ニ相成候由、

一 昨十一日、伏見ニ長藩之士四十人程着仕候、

一 右同日、鳥羽街道を多人数罷通り候由、信濃天龍寺へ

參候歟と奉存候、

一 当所長邸江は大砲尅挺、山崎江は五六挺モ持參仕候由、

一 山崎より嵯峨江新道ヲ開キ候由、

一 今十二日、長藩之士凡六七十人位当所江着仕候由、

一 今十二日夜、長藩伏見表見廻り方士分五十人、主従共

七十人位之人数ニ而、節々見廻り申候、

一 薩州ヨリ天龍寺之討手、薩一手ニ被仰付度様申出ニ相

成候由、

右は七月十三日辰刻、伏見滞在探索徳田彦太郎ヨ

リ出仕之書面之写、

冊子原寸 縦二八・五 横二二糎 一〇枚

二七 江戸城諸門警固ノ幕令其他 合四通一綴

一一七ノ一

子七月十日、水野和泉守殿御渡

酒井雅楽頭 (忠實)

非常之節、外桜田御門外江出張、御警衛被心得、半蔵御

門外并一橋御門外寄場江相詰候寄合之面々指揮致し、模

様ニ寄小普請之面々、月桂寺伝通院屯所江相詰罷在候者

江相通、諸事差図致し御警衛嚴重可被取計候、尤右ニ付

平日兼而打合置候様可被致候、

寄合肝煎

非常之節、半蔵御門外・一橋御門外寄場江相詰候面々、

諸事酒井雅楽頭指揮致し候様相達候間、平日兼而申談置

御警衛嚴重ニ可被相心得候事、

小普請組支配

非常之節、月桂寺・伝通院屯所江相詰候小普請之面々、

時宜ニ寄酒井雅楽頭より差図有之候ハ、外桜田御門外

江出張、諸事同人指揮致し候筈ニ候間、兼而銘々其心得

ニ而罷在、平日申談、支配向之面々江も可被相達置候事、

右之通相達候事、

子七月十二日、水野和泉守殿丹阿弥を以御渡
(根岸衛)
肥前守受取御覽成候、以上、

大目付
江
御目付

覚

一一七〇二

戸田大和守
(忠志)

以後諸侯之列ニ御取扱被成候ニ付、万石以上末席と可被
心得候、山陵奉行席順山田奉行之次たるへく候、万事所
可代指揮を受相勤可申候、

右之通相達候間、可被得其意候事、

子七月十二日、水野和泉守殿丹阿弥御渡、肥前守

受取候、御覽成候、以上、

大目付
江
御目付

覚

一一七〇三

西丸土手下馬所御手狭ニ付、混雜も不少候間、
御城最寄出火其外非常之節、驅付候役々之義、和田倉御
門・馬場先御門・外桜田御門、右三ヶ所御門外下馬所ニ
相成候間、混雜無之様可被致候、
右之通向々江可被相達候事、

七月

一一七〇四

七月十四日、水野和泉守殿御口達ニ而、土井大炊頭江
(利則)

左之通可相達旨被 仰渡、同夕御同人留守居江相達、

明十五日朝急御用義有之、御目付戸田五助・御使番平岩
金左衛門・池田鎗三郎義、下総国結城辺迄乗切ニ而被相
越候間、若乗馬勞れ候節は、戸田五助より相達次第無遅
滞、早々替馬可差出候、尤其節差支無之様兼而手当可被
申付置候、

冊子原寸 縦二三・七糎 横一七糎 五枚

三六 幕府方書役ヨリ薩州留守居書役へノ答書

其他 合四通

野州暴徒事情報告 人名書等

〔包紙ウツ〕
薩州様

神保伯耆守内

御留守居方

書役共

御書役中様

□二 (黒印ト墨引ハ重複)

□二

〔黒印〕

一一一八ノ一

贈從二位慶照卿靈神

但輿之前ニ書付有之候由、

水府浪

當時迄町奉行相勤居候
人之由

田丸稻野右衛門

齊藤佐次右衛門

藤田小四郎

竹内百太郎
(百太郎)

戸田越前守家老二男
當時浪人

但不埒ニ有之、近比水戸之方江差返候由、

久世大和守百姓真方村
之名主俸、當時浪人

川連小一郎

文書原寸 縦一八糎 横三七・五糎

戸田彈正
(光形)

山田一郎

千葉小太郎

中野連

根本新平

瀧平主殿

田中愿藏

岩谷啓一郎

一一一八ノ二

七月八日

大御番頭

堀内藏頭
(直虎)

御書院番頭

織田伊賀守
(清裕)

御小性御番頭
井上越中守(正當)

御先手
土屋鈞之丞

御持之頭
和田伝右衛門(惟明)

御目付
設楽弾正(寛)

御使番
日根野藤之助

御徒頭
牧野鋼太郎

遠山三郎右衛門
小十人頭
竹内日向守

文書原寸 縦一五糎 横三五・三糎

一一一八ノ三

申渡之覚

大御番頭

堀(寅虎)
内蔵頭
名代堀主殿

野州辺浮浪之徒追討被 仰付候処、申立候趣不都合
之次第も有之候ニ付、御役 御免差扣被 仰付之、

右於和泉守宅老中列座候、同人申渡之、大目付根岸肥前(衛憲)
守・御目付内藤老岐守相越ス、(正徳)

七月十三日

文書原寸 縦一五・六糎 横二四糎

一一一八ノ四

(端裏書)

御書役中様

神保内
書役共

御手紙拝見仕候、然は野州辺浮浪之徒之儀、御内々御問
合之趣奉承知候、然ル処、此節ハ何方様江も御届等出不
申、乍去此節野州辺は度々争戦有之、去ル七日・九日兩
日は可也之争戦も有之、且御目付代永見貞之丞様御家来
兩人即死有之、其外歩兵も即死も有之趣、先方ニも多人
数即死之趣ニ御座候、猶々追々御随意申上候、不取敢別

紙御書付、其外差上申候、多々取込、乱筆之段御用捨可
被下候、猶届等出候ハ、早々可申上候、以上、

七月十五日

文書原寸 縦一六・五糎 包紙原寸 縦二三・八糎
横 六二糎 横 三三糎

二三 長州ノ動靜ニ依リ速ニ討伐スベシトノ小

倉藩主小笠原大膳大夫ヘノ幕命

(包紙ウツ書)
「御渡書」

(朱)
「甲子七月」

京師大麥ニ付

小倉江御達シ」

(端裏銘)
「小笠原大膳大夫江」

(忠弊)
小笠原大膳大夫

長州藩士等頃日出願有之趣ニ候得共、多人數兵器を携所
々屯集、甚不穩候に付、早々引払、福原越後ハ小人数ニ
而伏見ニ罷在、出願之儀は穩ニ経其筋、重而之

御沙汰相待候様、

朝廷御趣意を以説論為致候得共悔悟不致、鎮静と相唱へ
国司信濃・益田右衛門介等引統罷登、却而人数追々相増
再三願書差出、恐多も去秋八月以後之御処置も真之
勸慮ニ無之杯申上、兵威を仮り、遮而歎願罷在候条、奉却
朝廷候所業不届至極に付、所々屯集罷在候長藩之者征討
之儀、從

天朝被

仰出候、就而は、長防二国之動揺も難計候間、押江之儀
屹度相心得、以後罷登候者は勿論、於国許も如何之所為
有之は、速ニ人数差向誅伐可致候、

但時機見計、主人々々出張口々より可攻入事、

文書原寸 縦 一六・二糎 包紙原寸 縦二六・八糎

横 一七九・二糎 横 三八糎

二三 大久保利通ヨリ長州処分ノ建言書

一長州御処置ニ付而は誠以不容易御大事ニ而、其当否ニ

依り

皇国治乱之所分天下後世ニ亘り名義之所関候間、能々成熟之御評議ヲ以御論定無之候而は不可相済御義ト奉存候、抑昨年八月十八日以前蔑

朝廷擁七卿、募暴威終ニ触震怒、境門御固被免候時機ニ候処、不奉憚

朝廷、私護七卿刺帶兵具持劍戟、公然及帰国候挙動、既頭不臣之色候、

十八日一挙ニ付、不為叶

叡慮、鷹司(補悪)関白公は

御処置被召付候義、畢竟暴論輩より所醸候、然に十八日一挙ニ付、取調御届申出候様被

仰付候処、

朝廷御処置之次第をも不奉願、論曲直強情申張候次第、不恐

上、君臣不当之罪不輕、

去夏 幕船を砲発し終ニ及奪舟、使者を暗殺し候次第、

對 幕府不敬之罪不輕、

去年来募浪士或奪小倉台場、且恃強驕弱輕蔑隣国候次第、畢竟攘夷之

叡慮遵奉之趣意ニも可有之候得共、真実

皇国之御大事を思候赤心ニ出候へ、人心共和を根本トいたし候ヲ社、

叡慮ニも可相叶候処、前条禍及隣国醸動乱之振舞、暴戾之罪不輕、攘夷之義 幕府神奈川鎖港談判中之趣及

奏

聞、猶又

御達相成、爾后 幕府之指揮ニ可從云々

勅命御布告有之候処、今般薩船を砲発し候暴挙、仮令異船トいえ共 御布告之

命ニ違背いたし候訳合、況乎

皇國中同体之臣子として凶狼之罪不輕、

右数件之罪状明白ニ而、外ニ 御処置之可被施無之、既ニ天時人事可征之機顯然候得共、何分偽

勅トハ乍申、議奏衆・伝奏衆之手を經、奉

命之筋を以申立候得は、後世青史之論ニ涉り候得ハ、

勅命ニ相違無之、正邪曲直不分明之憂可有之ニ付、大

ニ

御処置之順序可有御座奉存候、第一長州暴論行ハれ候

所以は、三条以下七卿有而之訳ニ候間、先々七卿 御

召返ニ而、真偽之

叡慮御申聞、罪ニ伏セしめ候而、堂々ト其罪ヲ鳴し、

御処置有之候而、長州ニ及候処肝要たるへし、七卿

御召返之義不容易、尤長州之口実トする所ニ候間、窮

而無事ニ相渡間鋪候得共、若無子細相渡候得ハ、実ニ

皇国之御大幸、七卿御請取之上ハ、長州御処置、難ふ

して易かるへし、万一拒

勅命不奉渡候得ハ無詮方、詰り何れ之御処置ニ出候而

も無事ニ不相濟候得ハ、可討之名義判然、对鬼神不疑

大挙ニ及候而至当之 御処置ト天下人心も安堵いたし

可申候、

七卿請取方ニ付而ハ、亦其次第可有之、一先七卿差出
候様、嚴

命ヲ下され相達次第五日を出スして奉

命スベシト、既ニ

命下ルニ及候而ハ、七卿御請取之人数は主將・副將之

任御内定、一左右次第進発之用意を可成置、期日を過

キ奉

命不致候ハ、正々ト御請取之

勅使可被差出、

勅使被差出ニ及、前以長州末藩吉川・毛利江長州御処

置ニ付、

勅使被差出候間、芸州迄出張

勅使奉待受候様

命を下され度、

勅使於芸州毛利・吉川へ被伝

命候趣、長州云々罪状有之候処、畢竟長門宰相父子之

罪不可遁、雖然兼而暴臣等擁君意私權を掌握いたし候

(毛利慶親・広封)

より、上下顛倒之勢をなし、右始末に及候内情被

聞召通、父子之処強チニ

御惡ミ之訳ニ無之候間、屹度暴論処置相付可及謝罪、

無左ニおひてハ、不得止

官兵を以可及征討、若其時宜ニ至候得ハ、

皇国之乱階、長州之滅亡不可疑候得ハ、実ニ大事之機

微故、其方等

皇国之為父子悔悟いたし候様説得、必死之周旋可致ト

云々

末藩両家之心底ト成ラハ、万一

官兵被差向候日ニハ進止を失し候訳ニ候間、前条通之

命を奉し候ハ、感激して死を以尺スヘシ、扱父子ト

暴臣ト之差別を以相達候得ハ、長州暴トいえ共、頗ル

忠誠之者も有之、かかれハ社稷ヲ失に忍ス、直陳抗言

之士も起るに至ルヘシ、然ハ自然両立之勢ひを成し、

無難自固を以処置相付候半も難凶、左候得ハ不戦して

征討相調、

皇国之御大幸ト言ふべし、右通丁寧反覆ヲ尽し、不奉
伏候得ハ、実不得止干戈ヲ用ル之

御仁恕顯然にて、後世之論ニおひて所間然無御座候、

勅使進発前、万一拒

命候ハ、不得止可加征討、七卿御召返之上云々之罪

状を以可被処罪之処、不奉返候ハ、無致方云々之刑に

処られ候、仍而以干戈可征之云々ト之

勅翰を奉し、下向可有之、左候得は不得止ニ臨ミ、右

勅翰ヲ布告し、及征討候得ハ至当たるヘシ、

前以芸州・筑前・小倉・久留米・柳川・肥前、其外隣

藩江云々之訳を以、長州御処置被召付候間、兼而応援

之用意を成シ、

官兵滞留之糧米・兵具等相救之心得ニ而、若脱走之者

ハ不洩候様用心可致置ト

御達有之度、

右之外、細目ハ数件可有之候ヘ共、概略肝要之趣意、

順序本末右通ト愚考候、幾重ニも人力之限り可尽之術

を尽し、至公至平名義分明無遺憾之 御処置第一ト奉

存候、好悪之偏執ニ依而大事を誤り候義、歴世不少候

間、克々精微之論ヲ以、私念を去り御決議有御座度候、

文書原寸 縦一六種 横四〇九・五種

二三 禁門ノ戦ニ対スル御沙汰書

鳳闕之下不慮紛擾之处、一同出勢抽丹誠候段、

叡感不斜大義

思召候事、

文書原寸 縦一六種 横二一・五種

二三 米良主膳ヨリ久光公へノ歎願書

一二三ノ一

一何分直実文才之者無之而は国用ニ不相立、私家来文盲

之者計ニ而士氣不相揃、就而は堂堂在寮相願且相応之

御方御出被下、家来一統出精、士氣一筋ニ作立、万一

之節之 御用ニ茂相立度存意罷有候間、何卒

公之以御憐情、是又願之通相濟候様奉希候、

右之通各様方迄申上候間、不苦儀ニ御座候得は、此段

言 上被成下度奉頼候、願之通相濟候儀ニ御座候得は、

私罷出相願、奉謝御恩候含ニ御座候、御帰国之上、否

尊答奉頼候、

恐惶謹言、

子ノ七月

米良主膳

則忠



一二三ノ二

去亥春

御内勅書頂戴、先祖之遺志継微臣則忠

上京仕候处、御混雑差起り御暇相願、一先帰着仕候、誠

ニ不容易御時勢間、一度上京御守衛茂相勤度罷有候得共

何分相良方と混雑之儀茂有之、熟彼表之家老共存意相見

仕候ニは、無二之勤王仕候様ニ茂無之、乍然越前守殿江

对シ而異心毛頭無之事ニ御座候、右故彼表江申出候而茂

(相良頼基)

迎茂相用ひ無算束、依之

中将公為神国直義之御忠誠、乍恐難有奉感泣候、微臣素志以

御仁恵、右之願相叶、且相良表江茂如先年相和シ、暴政之取計無之様、御取扱偏ニ奉希候、

綴原寸 縦一四・八糎 横四四糎 二枚

二三 米良一件ニ付高岡郷横目河上彦九郎等ノ

報告書

手扣

高岡

米良尾八重居住米良要人并同所稱荷宮社司甲斐豊前・

同人子甲斐大蔵・米良秀一共事、何角子細有之、去亥

十一月九日、^(球書)求摩表より捕方として多人数差越相搦、

彼表江列越候一件、且当分風説之形行承合可申出旨承

知仕、左ニ申上候、

一米良之儀は、先年より求摩領主相良侯江随心之由緒有之、政事向等方端差凶有之来候処、此近年求摩家老奈

須与茂助平生権威ニ募り、曲直不分明之致取計候処ノ

り、米良主膳様を初、一統承服無之、右ニ付求摩江之隨身相離度志シ差発、右計向として稱荷宮社司甲斐豊前、亥二月致上京、三条様江相付、

勅書之御願申上候処、何分ニ茂主膳様直々上京無之候而は、右計出来兼候向ニ承知故、去六月中旬罷帰、左候而、主膳様并要人・豊前外ニ足輕三人同列、高鍋領美々津より乗船、八月十七日致上京、三条様御方江参殿被致候処、彼地大騒働央ニ而、翌日可罷出旨承知ニ而、被差扣居候処、三条様ニは御退去ニ相成、夫故手寄り無御座、別而不都合之成行ニ而、直様大坂之様被罷下候由、然処追々上京之一件求摩表江相響、飛札ヲ以上京差留之筋稱敷申来候処、最早出立後ニ而、引戻方として米良家中浜砂猪三太・奈須七郎兵衛兩人態々大坂迄差越候得共、舟中行違為相成由承得候、

^(付書)一本文主膳様事、求摩江被差越候節、於彼表御用人会釈ニ而別而引下ケ候御取計ニ而、御当人ハ勿論、家中ニ至り残念

ニ存居候由、

一 要人并豊前、追々事六ヶ敷成立候由承及、此涯帰国いたし候ハ、不容易取扱可有之と恐怖いたし、途中讃岐之内多度津と申所ニ而、右兩人之者共暇等願出、免許之上長州之内みた川（尻カ）と申所江、三条様御居住之哉ニ承り、彼方江兩人列立尋越申たる由、併三条様江拝謁仕候儀儲ニ相知不申候、

一 浜砂猪三太・奈須七郎兵衛大坂より罷帰候途中、右之兩人江行逢列帰置候処、去十一月九日早朝、求摩より捕方として凡四拾人内外差越、兩人共ニ捕方いたし、何分子細不相分候ニ付、追々家中之者走統申たる由候得共、上意と申候而手堅ク取締いたし、外々より面談不為致、直ニ求摩城下許江列越、別段手狭之牢屋取拵入牢相成居候、尤豊前事ハ難決之余り、牢中自縊いたし、死骸塩漬ニ而格護相成居候由、于今右同人子兩人共ニ入牢いたし居候由承得候、

一 右通之形行ニ而、米良表ニおゐて何そ不正之取企いた

し候儀ニは無之、求摩表より勝手次第被致取扱候儀、至極残念之余り上京之時機ニも相成、然処猶以不容易取扱有之、別而無理成取計と諸人申居、此涯要人帰邑相成候ハ、未々一統別而可致大悦模様と相見得申候、一米良要人事、持高千石程之物成ニ而、土家部十三家、其外足輕迄都合百家部位ニ相及申由承得候、

右之通手を付承得候付、此段扣書ヲ以申上候、以上、

横目
河上彦九郎
子七月

右同
入田才右衛門

文書原寸 縦 一六・七糎 付紙原寸 縦 一六・八糎
横 二五・六糎 横 六・八糎

二三 米良主膳ヨリ薩藩ヘノ報告及依頼感謝状
人吉藩トノ紛紜一件

上京一条之扣

一方今不容易御時勢、殊ニ攘夷茂被仰出候事ニ付、小臣乍蒙国恩、徒ニ日ヲ送り候儀、不本意事と相考へ、乍微力御警衛相勤、尺寸忠度念願ニ付、家来甲斐豊前と申者ニ申付、上京相願候事ニ御座候、

此豊前と申者は、折々上京も仕候者ニ付、此節内々申含め差出申候、

願書之趣

方今不容易御時体承知仕候間、急速馳登祖先之微志ヲ繼、聊寸忠ヲ奉、尽度存意ニ罷在候得共、無位無祿之身分、大名同様之御用筋等可相勤儀、茂固より無之、殊ニ唐突上京仕候儀、茂重疊奉恐入候間、何卒右之素志御憐察被成下、出格之筋ヲ以上京被仰付、身分柄相応之御用、茂御座候ハ、被仰付被下度伏而奉願候、右之段為可奉伺、私江上京申付奉願候間、可然様御取成被成下度偏ニ奉願候、以上、

右之趣ニ奉願候旨、甲斐豊前申聞候、

此願書は、於京都甲斐豊前より馴合候様相願認メ差出候趣届ケ仕候、何方江相願候哉不存、

右之通相認め學習院江差出候処、三条様御引請ニ相成り、早速

御内 勅書被下置、

米良主膳

方今時勢不容易候ニ付、上京御用相窺度旨神妙候、祖先之遺勲も有之間、上京可有之候事、

右之通り被仰出候ニ付、豊前儀早速馳下り、去六月十六日帰着致候事、

一 甲斐豊前儀、筑後水天宮神主^(真木)牧和泉と申人江懇意ニ茂有之候哉、立寄聞合候処、神主茂早速上京致候間、彼表ニ而万事世話致具候旨申聞候段申出候、

一 六月廿六日在所発足、火々急之事故供方茂少勢ニ而、不取敢馳登候、船中抔不順ニ付、八月十一日京着仕、仮旅宿六角堂持屋惣左衛門宅江着仕候事、

供方

米良要人

甲斐豊前

米良秀一郎

中武又兵衛

佐藤富治

中武良吉

要人家来

老岐勇馬

中武角衛

米良要人儀上京仕候段聞及、馳参り供仕候事、

跡より

浜砂兵衛

浜砂伊三太

土持八百八

右之人馳登候事、

外ニ寒川と申処之者式拾五人召登候覚語罷在候、

右之通ニ御座候事、

一相良越前守様江茂御上京半之事故、彼表ニ而御届ケ可

申上相考へ、御留主御家老江届ケ茂不仕出立仕候処、

無念ニ相成り申候、恐入申事ニ御座候、

考

一何分京都表之儀不馴之者、其故如何取計候而宜鋪哉も

難計、殊ニ用金茂過半入候哉相考へ、小川紳治使者申

付、薩州様江御願申上候事ニ御座候、必争戦之折柄御

混雑故、用金も不相濟御尤千万奉存候事ニ御座候、願

書は其砌差出候通ニ御座候、

小川紳治出立私と同日ニ御座候事、

一於京都有着之届ケ豊前差出シ申候、且牧和泉旅宿江立寄

御幸町上ル、右之段申聞候処、牧氏より三条様江被申上

候哉、早速旅宿江相見え面会仕候処、明十四日三条様

迄御届ケ可申上旨申聞被引取候事、

一八月十四日朝草々相仕舞候而、三条様江伺公仕候処、

牧氏も罷出被居、取次ニ而御目通り仕候、三条様は其

時分議奏・御親兵御掛りと承り申候、

御意之趣

方今不容易御時勢ニ付、早速之上京、遠路大儀ニ被思

召候、以序

禁庭江茂可及奏聞旨被仰出

夫より退引仕候事、

一 万事頼合国枝嘉門と申者ニ面会仕候処、町宿ニ而は不
宜、今出川通光明寺江旅宿頼置候間、此方江引移り候

様ニ申聞、八月十七日夕方より引移り申候、

一 京都御所司代様江茂御内 勅書頂戴、上京之段御届ケ

申上置、可然と国枝氏江茂談合御届ケ申上候事、

一 夫より十八日朝物騒敷鉄炮杯相聞へ候ニ付、驚キ用意

仕居候処、段々御混雜之様子ニ見請、如何之訳合ニ而

角ク相成候哉不相知、先ツ牧氏江聞合ニ豊前罷越候処、

留主中故頼合国枝方江聞合候処、何分三条様御引請之

事故、罷出御様子相伺可然旨、其身茂道伴可致旨申聞

直様参上仕候処、最早御立退キニ相成り居候ニ付、旅

宿江引取申候、

一 夫より色々心配仕、相考へ見候得共、如何之訳合ニ而

御混雜相成候哉一向不相分、京都不馴ニは有之、当惑

仕候計ニ御座候、乍然所々手ヲ尽シ馳廻り聞合候処、

三条様之被成方不宜敷候ニ付、今通りニ相成り、最早

御行衛茂不相分候旨様々聞出シ、猶々当惑仕、三条様

江罷出候事故、御謀叛ニ共御座候得は、私等迄茂如何

相成候哉難計、其時ニ相成り誠ニ残念ニ存候事ニ御

座候、乍然所存は、乍微力奉尽寸忠候計之趣意ニ而、

外ニ何ぞ悪心ニ組し候と申訳ニは無之事、殊ニ小勢ニ

而は忠誠も尽兼、一先御暇相願引取候上之議定可然相

考へ、国枝江茂此段申聞候処、御届ケは広幡様・徳大

寺様間ニ申上、可然申聞候ニ付、右人より届ケ相頼ミ

相願、早速京都表引申候

所司代様江茂、御届ケ申上候、

一大坂より乗船、讃州多度津江着船仕候処、米良要人・

甲斐豊前より願出候趣ニは、三条様被成方不宜鋪候ニ

付、長州江御引込被成候旨薄々承り候、此節之御混雜

如何之訳合やら不相分候間、聞繕度旨暇願出候ニ付、

差免し申候、夫より兩人便船ニ而中国路江相渡り申候、

私は其便船ニ而豊後佐賀之関江着船仕、在所へ九月廿

一日帰着仕候、

一 帰着仕候得は、相良表より着次第届ケ致候様、留主役

人江申来居候ニ付、帰着之届ケ仕候事、

一 罷帰候処、薩州表争戦ニ付、悴事茂帰省仕罷帰り居候

ニ付、以小川藤太相願差出シ候事ニ御座候、

尤私帰着不仕候内、留主居之者共より談合、小藤

太差出し置候直後ニ帰着仕候、

一 十月六七日之比、相良表より犬童平兵衛母方之叔父・

林田量平私弟相良へ参居候右兩人参着仕候、私は川狩へ

参り留主中、早速帰宅及面会候処、此節尋問致候儀有

之、先立而拙者共差越候、不取驚様ニと被申聞候、委

細之儀は、明日出役有之候間、彼方江此度上京一条不

残可申出旨被申聞候、

一 其翌日、家老渋谷三郎左衛門・用人神瀬伝左衛門・用

達杉田市右衛門・用筆西伴助相見え及面会候事、

尋問之趣荒方扣

一 此度上京之儀ニ付、聞繕候様申事ニ付罷越候間、何事

茂無遠慮有之候談合致呉候様申聞候、互ニ遠慮なき者

共ニ候間、委敷談合致候様度々被申候、

返答

前文書記し候趣、京都表ニ而之一条不残申述候、左候

処、右計之儀ニ而は有之間鋪、何そ相良表より仕向ケ

不宜敷筋共有之候ニ付、右様之企致候哉と被存候、不

包申聞候得は、何そ悪敷者不取計旨、色々すかしたり

だましたり被申聞候、

渋谷氏より一 何分此節之儀は、相良表江茂不向上京致候段、無念之

至候、悴儀薩州江差出候儀茂如何之事故差出候哉、相

聞へ候ニは、薩州公江随ひ万事ニ取入相頼ミ、穂北八

千石ヲ取り京都江馳登り、後立ニ致し、色々難題申掛

候様ニ致し、相良表江恨ヲ掛ケ楯ヲつく積り之根差ニ

候処、京都混雜ニ付、無致方引取候段相聞へ候、穗北ヲ取候得は勝手悪敷旨ニ而、馬道ヲ掘候由、是は実事之事故、右条之儀も間違有之間敷と、にがりきつて被申聞候、

薩州江之稽古何共不心得候と被申候、

返答

夫は甚難心得、御疑ひヲ蒙り奉驚入候、決而左様之訳ニ而無御座候、御内 勅書頂戴仕候ニ付、不取敢火々急ニ馳登候事故、御届ケ不申上候段は誠ニ無念奉恐入候、乍然越前守様(相良親基)ニ茂御上京半御座候得は、彼表ニ而可申上覚語ニ而、急速出立仕候事ニ御座候、乍微力奉尽

忠誠度計之所存ニ御座候、又薩州江悴差出候儀茂、何ぞ別義ニは無御座候、只々諸修行出精為致度趣意計ニ御座候、穗北ヲ取り馬道作り候杯と申立、是又一向無御座候、馬道は領分内越野尾村より日向通用悪敷且參府之節道筋ニ付、願出候ニ付、差免し候儀ニ御座候旨相答へ申候、

薩州表江取入候而、其表江楯ヲつき候之御疑、何共奉恐入候、左様ニ被思召候得は、薩州江御聞可被下候、

右様之筋申置候覚語毛頭無御座候と御答へ申候、

一 豊前より被欺、右之企ニ組し候ニ間違有之間敷、何分豊前不宜者故、意趣ヲはらす為ニ致候事故と被申聞候、

一 浪人江付合共不致候哉、精々尋問有之候、牧氏と三条

様諸太夫江取次之時分合候迄ニ而御座候旨相答へ候、

其牧氏が浪人随一之頭と被申聞、始而相知り申候、

一 相良表岩下屋鋪引上ケ候儀、不合点共ニは不存哉と被申聞候、

此屋敷は、先年より相預ケ被置候地ニ御座候、此節類焼ニ付引上ケ、脇方江替地被相渡申候、本屋敷は新參之医師・町人杯へ被相渡候旨、風聞承り申候、

右様段々疑ひなられ申候ニ付、愚考へニ先年とは違ひ万事取会釈方庵末ニ相成り候筋も有之候ニ付、

答へ

何そ岩下屋鋪御引上ニ付、不合点之儀も毛頭無御座候、

乍然、私先祖且祖父時代ニは、折々相良公より御懇命

茂被仰下候儀は、海山難有事ニ御座候得は、御恨ミ申

上候筋決而無御座候段申述候、先年通り被仰付被下候

得は、難有仕合ニ奉存候旨も申置候、

右之趣荒方尋問ニ相成り申候、少事は段々申掛ケ候得

共、大筋之処大概如斯御座候、夫共不合点実事ニ被存

間鋪様子ニ見請申候、一先相済而翌日より被引取申候

事、

一 右尋問半ニ米良要人・甲斐豊前婦山仕候、彼者供江は

段々と吟味有之候由承り申候、私江は以来面会不相成

段差留申候、乍然鳥度目通り丈は差免し候旨、急度申

付候面会仕候迄ニ而、右兩人よりは如何之筋ニ而罷帰

候哉、一向存不申候、外上京供方江茂色々聞合セ吟味

仕候由承り申候、

一 何分御雜題之筋、御手数相成候事故、無念之届ケ以役

人申上可然旨差図ニ付、米良亘差出シ、一先相済候形

ニ御座候、

一 於相良米良亘江別段達之趣、

此度調練之稽古被

仰付候間、仕舞次第罷出候様、越前守様より被

出候段、御家老中より相達候由、

外家老菊池七郎左衛門母方之叔父より別段申渡ス趣、

此節之儀は、御直ニ被仰出候間、難有事故早速罷出候

様可相心得旨、親類故申含め候趣申聞候、

右之通、亘帰着届ケ申出候、

一 十一月五日、在所発足、調練為稽古罷出候、同六日人

吉着、釜鳴屋瀬兵衛宅、早速用達方江及届候処、用達

杉田市右衛門罷越面会仕候処、幸明日調練稽古有之候

間、勝手次第参り候様申事之由申聞候、町宅ニ而茂如

何數候間、七地と申屋敷江都合次第引移候旨申付候ニ

付、彼方江参候事、

供方扣

浜 砂 兵 衛

川 野 幾 藏

那 須 磐 治

佐 藤 芳 善

甲 斐 友 三 郎

河 野 俊 藏

浜 砂 平 次 右 衛 門

小 川 寿 八 郎

浜 砂 頼 母

黒 木 理 兵 衛

右之通ニ御座候事、

一七地屋鋪江引移り申候処、至而龜末成ル処、何茂不自

由勝ニ而、只々何事も無之日ヲ送り逗留致し候処、椎

葉山江浪人入込候ニ付、大人數被差向候様之風聞杯御

座候処、在所より急飛脚馳参り、相良表より大勢罷越、

米良要人・甲斐豊前・同大藏・米良秀市郎召捕ニ相成

米良山大混雜、如何相成候哉茂難計と注進仕、夫より

甚驚入候事ニ御座候、乍然此場ニ相成候而は無致方、
落付相扣罷在申候、

一私儀は七地屋鋪江罷在候処、十日前後ニ茂相成り候時

分、菊池七郎左衛門・杉田市右衛門参候而、悴龜之助

儀、是非々々帰山不致候而は不叶儀有之候間、此段書翰

差遣候様申付、無致方迫而相認め、直ニ相渡候処、小

川表取締役榎木官平・松本了一郎方江差越シ、家来浜

砂伊三太と申者江申付、薩州江差出申候よし、残念至

極ニ奉存候、

又杉田市右衛門より以書付申渡候趣、

米良 要人

甲斐 豊前

同 大藏

米良秀一郎

右御吟味之筋有之、当地江被召呼候、此段米良主膳

殿江可被申上候、

十一月十日

右之通御達而申渡し候事、
又十一月十一日、以用達申聞趣、

覚

米良 要人

右片岡七郎右衛門江御預ケ

十一月十一日

米良秀一郎

右中村友輔江御預ケ

右通り私家来江申越候由、用達申聞候、

甲斐 豊前

右日野佐市江御預ケ

同 大蔵

右山北彦治江御預ケ

右之通於西村以上使申渡候、

十一月十一日

米良ニ而取締方

米良 亘

浜砂五八郎

那須七郎兵衛

浜砂伊三太

那須 祐助

右之通申付差越候間、此段米良主膳殿江可申上候、

一 菊池七郎左衛門宅江兩度召呼、上京一条且疑ひ之筋色々尋問仕、是非々々渋谷氏申候様ニ相成候よふ申責め

一々書付申候、何共残念至極ニ奉存候、是は家老中申合せ親類故七郎左衛門ヲ以吟味仕候儀と相察し申候、

一 十二月廿四日、杉田市右衛門参り、只今之内役場江参上候様ニ家老中より申越、早速罷出候処、万江長右衛門・那須四方助・菊池七郎左衛門・渋谷三郎左衛門列

座、前文之趣少々尋問仕候而後、先ッ申候得は、上京之儀は、全ク豊前より相進め候儀と被存候、薩州稽古は如何之訳合ニ候哉と被申候計ニ御座候、私此此場ニ相成候而は、迎茂申開キ仕而も不用立事と相考、

返答而已仕罷在申候、

一四方助より先比は薩州江參候処、亀之助殿は不帰杯と申候故、亀之助は越前守が甥ニ而御座候、何そ別条之儀無之候と挨拶致候と笑ひ被申聞候、

一此節之儀は、公武ニ対し不宜鋪事大切之儀故、以来何事も念入候様被申論、奉恐入候段申述置候事、

一七郎左衛門より此節之儀、不容易御難題差上候ニ付、亀之助事茂早々帰着次第差扣、無念不申上候而不成候間、此段心得候様申聞候、

一其後最早何日より罷帰候而茂不苦、勝手ニ引取候様申聞候、乍然明日は越前守様より龜末之御料理被下候間、罷出候様ニ四方助被申聞候、

一其翌日願就寺江罷出候処、御目通被仰付、御料理等頂戴仕、明廿六日より早々帰国仕候事、

一四人之者共召捕候扣

十一月九日卯之上刻

小川方林田量平・田代甚兵衛・林田森衛上下式拾人余

小原方豊永団内・築地四郎兵衛・鎌田雄太郎上下式拾五人余、尾八重方東津之助・赤坂静衛・瀧川俊藏・恒松量助上下三拾人余罷越、召捕ニ相成候人数は沢山参りニ付、委數不存、

一十日前、愛甲義春と申者佐藤芳善宅江自分用向之体ニ仕立参り候、小原方江茂参詣仕候よし、

一七日比、新宮半七と申者、人參調之様子ニ而、尾八重・中尾八重辺相通り、又小原・小川ニ而は、延岡江飛脚之由ニ而封箱杯首ニ掛ケ、私宅勝手口、玄関迄茂参り候由、全ク様子見と被存候、

一秀一郎勤番之由聞及、私宅江大勢引包ニ相成候、乍然小原稻荷祭礼ニ付、秀一郎事名代江参り居、夫ヲ直様召捕候由、外三人之者茂同刻召捕、早速引取被申候、

一小川表取締役樫木官平・松本了一郎、滞在ニ相成居候、

一尾八重方田宮庄左衛門・有瀬甚藏・菊池何某、

一尾八重方江団右衛門・高松本右衛門、

右之人數取締方として参り居、万事取計仕候、

一右四人之者召捕之時分、人吉米良領境江家老那須四方

助・郡奉行片岡一二・下役西次左衛門、大人数召連れ

出張ニ相成候、表立吹聴は椎葉山江浪人入込候ニ付

張と申事ニ御座候、

右四人之者召捕之儀、私一向不存申事ニ御座候、七地

屋敷と申処は惣体片はしニ而、人家茂遠く、人杯茂不

参処ニ而御座候、

一林田量平私宅上京一条書付茂有之哉ニ而、家さがし仕

候得共、何茂無御座候由、

御内 勅書杯吟味仕候事、

一小原尾八重秀一郎宅、同断吟味、松本了一郎致し候得

共、是又紛敷物無之、其仮引取候由、

右荒方如斯御座候、

留主居之者江達し、

甲斐 豊前

同 大藏

右之者御吟味之筋有之、人吉江被召寄度、則被召捕候、

右ニ付山中取騒不申静謐ニ罷有候様相達し候由、主膳

殿ニ茂何そ別条無之候間、此段茂心得候様被申達候よ

し

一正月七日、家老中より書翰到来、早速談合致度儀有之

候ニ付、櫻木官平差遣候間、村所迄出合呉候様被申越

候ニ付出張面会仕候処、薩州表造士館中より龜之助殿

出精中、一日茂難捨置、依之今暫く逗留可相成旨、相

良表江御願ニ相成り候、右ニ付私江は相良表より相談

申呉候様申事之由ニ御座候、何れ御相談通り御頼被成

方宜敷、乍然存寄次第挨拶致候様被申聞候、扱又

越前守より茂別段御頼被越候間、此段茂承知仕候旨、

被申聞候ニ付、相応挨拶仕相濟而被引取申候、

一三月之比、以村次便申来ル、

米良 要人

米良秀一郎

米良 要人

甲斐 豊前

右之通兵衛方江相達シ有之相濟候由、

其方共長州三田尻江相越、京都脱走之堂上方江付添罷

在候浮浪人共江令面会候儀、被対

所存

公武不相濟事ニ付、吟味中揚屋江被留置候、

一私儀は、対相良表意趣恨ミと申儀は決而無御座候間、

別紙之通相達候間、

何卒先年之通、和合致候様念願ニ罷有候、此段御承知

此段米良主膳方江可被相達候、

奉願候、

米良用達江

何分程能相片付、相和シ候様偏ニ奉希上、以上、

三月

右之通申来候事、

私従先祖

一六月十六日、家老中より書翰来ル、訳は甲斐豊前於揚

屋縊死致候間、役人差出候様申来り、浜砂兵衛差越候

薩州様奉蒙御厚恩、段々御手厚被成下、私代ニ至而、

事、

別而難有、悴亀之助稽古御免被成下、山中為御助産物

一同廿四日、帰着届之趣、

迄御仕法御立被下、去年来相良表と混雜之儀、首尾能

御取濟シ被成下、御仁恵之段、重疊難有仕合、乍恐

御厚恩之程死ス共不忘脚奉存候、乍微力万一之節は、

右、御吟味中於揚屋致縊死候ニ付、御裁許迄之処、役

所境内ニ致仮理置候、此段主膳殿江可被申上候、

上、

甲斐 豊前

米良 主膳

所境内ニ致仮理置候、此段主膳殿江可被申上候、

子七月

米良 主膳

冊子原寸 縦三九種 横一三・四種 一四枚

藤原

則忠



三三 伊達伊予守より島津久光公へ

禁門ノ戦長州征伐ノ件

(包紙ウツ書)

松大隅守様
拝呈
密要

伊々子守

(朱印)



(封筒ウツ書)
島津中将明公閣下
密用

宗城

(封筒ウツ)



一 翰拝呈仕候、照統秋暑難凌処、先以御全家様愈御清安御揃可被成御與居奉遙賀候、何ハ閣、十九日
神京長賊之挙動終に本心呈露、可惡之極無論ニ御座候、尊藩勇憤之兵威ヲ以、日之御門前危急ヲ奉救、其他戦功

今にはしめぬ事ながら、感歎難尽筆紙、畢竟今日征伐ニ

至候も根本此ニ帰着と奉存候、扱又征伐廿一藩ニ被

仰付、豚兒も在選中、右ニ付、兼々御同志之義ニ付、何か

運策御申談為仕度、微臣井関斎右衛門なる者差出候条

可然御教示被成下度、挽回之機到来、此度こそ因循之義

ハあるましくと相考候、一寸此段申上度、纏々詫拙价候、

恐々頓首、

仲秋朔日

伊与守

大隅守様

侍史中

二 伸、時下御自愛專一奉存候、乍末

皆々様ニ宜希候、

両公子君も十九日之猛威如何計かと奉想像感激仕候

且又若シ此後もよふニよりてハ、家老松根図書差出

候而、及御相談候義も可有之候、此段御聞置可被下

候、此者ハ先年黄門公御代も出し申候、不備、

文書原寸 縦一七・七種 包紙原寸 縦二八・五種 横三八・七種

横 九八種 封筒原寸 縦二〇・五種 横 五・五種

二三 英仏米蘭下関砲撃計画情報

以急飛脚奉申上候、外国兵勢向長之義、左之次第ニ御座候、

フランスへ参り候使節池田播摩守、^(頼方)フランスニ於て鎖

港談判不相叶、且又長州一事如何取計候哉とフランス帝より被申候ニ付、右池田曰、拙者帰国の後三月にし

て罪すへしと請合、フランスを出帆帰国、其趣我政府水

野和泉守殿江申上候処、水野氏大ニ怒り、なか／＼三

月・四月にてハ相定かたしと申、直様横浜在留のフラ

ンスミニストル江申入候処、仏ミニストル曰、三月に

して定めかたく候ハ、五月にして如何と申せしかと

も、水野氏決然と挨拶難致といふニ付、外国ミニス

トルとも一同談合し、フランス三艘・アメリカ老艘・オ

ランダ四艘・エキリス十二艘、英ハ更ニ長崎より数艘

相廻り候由、陸兵も合して彼地ニ差向申候、但陸兵ハ

千五百人計、一日後れて出帆いたし候、是ハ海軍一同

瀬戸の間ニ往来して、砲台の人心を動かし、其中陸兵

陸より登りて砲台を奪ふの策と申、凡十五・六日ニシ

て伐ち平くといふ、若此の義平和ニ相成候ハ、必ず

京都ニ参り、万代不易の定約を結び、生糸を送らざる

因縁を相正すといふ、右向長の義ニ付、若年寄老人横

浜江参り懸合候処、彼曰、外国兵勢を以此を伐時ハ、

曾て寸地を取らず、只大砲・小銃其余の戦具を分取り

するのミ候、日本政府ハ黙然として傍観するときハ、

自然と太平ニ相成可申抔申之風説御座候、此節天竺兵

多分ニ参り居申候、更ニ数月の後千余人参着致候由、

此の兵京師ニ押入軍勢と申、

猶、後便色々奉申上候、昨日可申上存居候処、外国人一

同留守、今日ハ例の休日にて、一同酔倒いたし候へ共、

先あらまし聞出し申候、余り遅掛ニ御座候へは、飛脚を

以、聞出し候まゝ奉申上候、猶明後日ハ拝顔万艘可申上

候、匆々頓首、

八月四日夜

^(清水)
卯三郎

智識様

座下

文書原寸 縦一五・八種 横六一・五種

二三 園田彦左衛門小倉ヨリノ報告

連合艦隊下関攻撃ノ件

(端裏朱書)

一 甲子八月四日

小倉より
園田

今四日午刻時分、長府領元山崎より夷船相見得候由、当御領田之浦辺より注進有之候付、則同所江馳付候処、半里位相隔候同領太刀之浦地方より三町位沖合江、一町位ツ、間を置、都合拾八艘碇舶いたし、当所役々五六人乗付候付、応接之次第承合候処、英軍艦大小拾式艘・蘭同五艘・仏同老艘都合前之通ニ而、昨年下之関通船之折、無故逢砲発、其段は則於横浜政府江申出、おのつから御所置も可有之、最早一ヶ年余も相待候得共、是迄全無其儀候付、遺恨為可相暗各国申合、先月廿八日横浜出帆、豊後姫島ニ而船揃渡来いたし、明五日早天より下之関江通船、彼方より若不及砲発候ハ、同所人家江夷船より

砲発いたし、其上なから、同断之儀も候ハ、直ニ上陸、諸所台場居付之大砲押取、於横浜政府江可差出所存之由相答候付、長州之儀は於日本も不法之挙動等有之、不日御所置も有之筈候付、夫迄は猶予可致旨、此節被仰出候、長州御征伐之御趣意相合申入候処、於日本もおのつから所置可有之候へ共、夫成難捨置訳筋ニ而、此儀は同様承候而も不致承服旨、口を切相答候付、其引取候由承、右応接之次第を以は、決而明日戦争相開可申哉、尤前田等之台場、田之浦より纔拾五六町相隔、今昼時分より追々多人数張出候向ニ相見得、尚又戦争等之形行、追々可申上候得共、其内襲来之次第迄、此段早々御届申上候、以上、

但太刀之浦夷船碇舶之処より前田台場迄、凡海上一里半位、同所より下之関人家半里位之由御座候、

子八月四日

園田彦左衛門

小倉滞在

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三九九ノ

一号文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一六・五種 横一四三種

二三 近衛忠房卿より島津大隅守殿へ

禁門之戦

(包紙ウツ書②)

「從

内丞相公御書

(包紙ウツ書①)

極内用早々

島津隅州先生

几下

「忠房」

(封紙ウツ書)

内々

島津大隅守殿

几下

「忠房」

尚以 朝廷之御様子実以恐入く候事ニ候、併御別
条不被為在、恐悦之事ニ候也、

残炎難凌覚候、弥勇健候哉承度存候、然ハ去月十九日之
形勢、最早篤ト御承知之事と存候、誠ニ不容易次第ニ而

候、十八日夜、世上騒々數ニ付而は、(二条斎敷) 関白殿初申合セ、

早速參朝致候処、世上追々騒々數、伏見辺ニ而戰爭相始

メ候勢ニ付、小御所へ

出御之上、以 勅言 一橋へ追討被 仰出候事ニ候、最

早其内追々発砲、

宮門外混雜ニ及、鷹司家も焼失大火ニ及、実ニくく

絶言語候、既ニ

宮門打破候勢ヒ

禁中大混乱、実ニく被惱

宸襟恐多事ニ而候、下拙共十九廿日兩日ハ抛身命相動居

候事ニ候、中々筆紙ニ難及次第ニ候、先々

御動座不被為在、恐悦く之事ニ候、十九日より詰切居

聊透無之、先々兩三日前より、夜分計ハ下宅ニ及、少し

ハ休息出来候事ニ候、実ニく

朝廷へ発砲致し候儀ハ、開闢以来古今未曾有之

朝敵ニ而候、防長追討被 仰出候事故、其内ニハ追々相

運候事と存候、先々当方ニハ別条無之、一統無異御安意

可給候、中々実事筆紙細密難認取、真ニ荒々如此候也、

八月五日

追申、十九日廿日兩日、其許藩格別之粉骨尽力、実ニ感佩候、実ニ其藩之力ニ而、朝廷御無難ニ相濟、実ニ恐悦ノ之事ニ候、上京藩士之処、格別御

主人よりも被賞候様存候、扱其許ニも此上ハ御上京之程待入存候、（島津久治） 凶書殿・（島津忠雄） 備後殿格別御精勤感佩候事

ニ候、以上、

三白、

先達而ハ御所望申入候短刀早速ニ恵給深々喜悦候、寸法も至極ノ早速拵申付候事ニ而、不取敢右御礼申入度候事、

文書原寸（折紙） 縦一六種

包紙原寸

①縦二八種

横 三九種

横四五種 二枚

②縦二九種 横二〇・五種

二元 岩下佐次右衛門ヨリ喜入摂津へ

長州征伐并連合艦隊ノ件

（端裏朱書）

江戸より

甲子八月六日

岩下

一筆啓上仕候、残暑却而難凌御座候得共、弥以御喜健克被為入恭悅奉存候、扱於京都茂不容易儀共出来、恐入候儀、乍然即日御退治相成、大慶ニ存候、其後御征伐被仰渡、

大樹公ニも御上洛被仰出候付而ハ、於 御国許大勢御差出ニも可相成、御厚配之筈奉遠察候、爰元事情、式日便折田平八迄申遣置申候間御覽可被下候、筑波之方も勢ひ薄相成候模様、水戸も至極之困窮ニ而迎も長くハ難続、不遠自滅より外有之間敷との評判ニ御座候、

一異船長州江参候ニ付横浜評判、フランス江参候使節池田播摩守、フランスニ於て頻と鎖港談判いたし候処、終ニ不相叶、且又長州一事如何取計候哉トフランス帝相談（申カ）候処、右池田曰、拙者帰国後三月にして罪すへしと受合候ニ付、フランス帝と相別れ、直様帰国仕、其段我政府水野和泉守殿江申上候処、水野氏大に怒りなかく三月四月にてハ不相定趣、直様横浜仏のミニ

ストル江申入候処、仏ミニストル曰、三月にして不相

定候ハ、五月にしてよからんと、曰、いまた決然と

挨拶難致といふニ付、外国ミニストル共一同連合して

フランス三艘・アメリカ老艘・オランダ四艘、英十二

艘、英ハ更に長崎より数艘相廻り申由、陸兵も合して

彼地ニ差向申候、但陸兵ハ千五百人計、一日後れて発

帆いたし候、是ハ海軍一同瀬戸之間を往来して、砲台

の人心を動し、其中ニ陸兵陸より上りて砲台を奪ふの

策と申、凡そ十五六日にして、長州を伐ち平くといふ、

若此の義平和に相成候ハ、京師に押入といふ、而し

て後、生糸一事を止たる因縁を相正すへしといふ、此

節天竺の兵多分参り居申候、更数月の中千余人参着致

候由、此の兵京師押入之軍勢と申、

八月四日

右承得申候間、写差上申候、

右外、差而珍敷事も無御座候、先は時下御起居伺度、

如此御座候、猶後便追々可申上候、

八月六日

撰津様

御側

恐惶謹言、

岩下^(分平)佐次右衛門

文書原寸 縦一八糎 横一五九糎

二言 折田要蔵ノ建言

諏訪数馬任職ノ件

口上

今般逆賊侵

禁闕、夷狄猖獗、天下内外之危急目前ニ相迫、不容易世

態至極恐入奉存候、右ニ付、万卒は易得一将は難求と申

古語を熟考仕、非常之世態ニは、非常之御所置を以人材

を御登用被為在候ハ、寛仁大度之奉蒙

御徳沢、上下猶更一和踊躍感慨、既往之罪状旁深悔悟、

翻而無二之精忠を抽可申事と奉存候間、乍恐敢死献言仕

候、扱諏訪数馬事、当時非常之世態ニ所しなから、家格

ニ応候御奉公茂不仕、抑人臣之分外ニ罷在候同前、誠以
遺憾至極、於其身茂深悔悟慚辱可罷在奉存候、尤子細茂
被為在候御事ニハ奉存候得は、方今不容易世態、殊ニ右
數馬事、自然家格相応之志氣、其任ニ堪可申人材と奉存
候間、今般

太守様

御出馬御祝儀として格外之 御仁愛を被相垂、一要路之
位ニ被復、御召仕被下置候ハ、於其身茂粉骨碎身、一段
之精忠を相励、奉報

御光沢、且一同寛大之御所置を奉仰、人氣奮激、死節之
元神を相補可申事と奉存候、右は臣固招賢進能、拾遺補
闕之職掌ニは無御座候得共、毎々献鄙言

思召之程至極恐入奉存候得共、元来余人ニ異、重大之御
高恩を頂罷在候間、毛厘も御用立候儀茂御座候ハ、生前
之面目と奉存、不奉願恐、古人之格言を熟考仕、謹而献
言敬白仕候、以上、

折田要蔵

子八月六日

文書原寸 縦一八糎 横一二六糎

二三 下之関戦争記

(表紙)
「長戦新聞記」

千八百六十四年九月七日我元治元年甲子八月七日 下関ニ書ス

艦隊ハ提督「クーパー」ノ指揮ニテ、第八月廿九日我七月廿八日

横浜ヲ発シ、第九月二日我八月二日 姫島ニ着シ、示シ合セタ

ル処ニ会シテ投錨ス、此処ニ英官船「ベルシェース」

ハ石炭船ト共ニ早ク着シテ、艦隊ニ石炭ヲ送ラントテ

待テリ、諸艦着シテ、夫々不足ノ船ニハ石炭ヲ積入レ、

総艦ハ第九月四日ニ拳銃シ、下関ニ向フ、総艦発セン

トスルトキ、「コケツト」名船来リテ其隊ニ加ハリタリ、

午后六時ニ汽航シタルニ、九時許リニ下関ニ着シ、最初

ノ砦ヨリ二・三里許ノ処ニ投錨ス、翌日「ターター」

名船ノ長「ヘース」・「パロサ」名船ノ長「ドウエル」・

「レババルド」名長「レッキー」、又仏蘭ノ船「デュブレース」・「メタリス・コロイス」「ヂァムビ」皆舟ニ砦ヲ攻撃スヘシトテ号令ヲ伝フ、此時午后一時ナリ、故ニ其諸船拳鎗シテ、第一ノ砦ニ並ヒ、半規状ニ列シテ投鎗ス、然レトモ此ヨリ先ニ日本士二人「ユラリュス」ニ来リ、提督ニ云フニハ、提督ハ此海峽ヲ通ラン(ト脱カ)欲スルヤ、若シ通ラント望マハ、吾等(ト太)大守ニ乞フテ、提督ヲ撃タサルヨウニセント、然レトモ予按スルニ、此士人等ハ別ニ其用アリテ送ラレタルナリ、且ツ彼方ヨリ発砲セストモ、我方ヨリ撃ント決シ、砦ノ並ラヒニ投鎗シ、少ハ彼ヨリ発セントテ待チタレトモ、斯クテハ終ニ我ヨリ一発ヲナス期ナシトテ、午后三時二十分ニ「ユラリュス」ヨリ発砲ヲ始メタリ、此時砦ヨリモ直ニ発砲シタリ、然レトモ砦ヨリノ彈多クハ達セスシテ海中ニ落ちタリ、我方ヨリハ彈道ノ適宜ニ至リ、空彈ヲ第一ノ三処ノ砦ニ発シタリ、○予按スルニ砦ヨリ発スル間ハ、一時半ヨリ久シカラストス、○第

一ノ台ニ六砲アリ、高キ台ニ六砲アリ、其次ニ稍下閑ニ寄タル低キ処ノ台ニ十七砲アリ、又其次ノ第三ノ台ニ十砲アリ、此台ハ砂囊ノ墩ニシテ海浜ニ近シ、砲ハ大小同シカラス、皆青銅ナリ、予之ヲ詳ニ見ハ後ニ告ソ、

右諸船砦ノ前面ヨリ攻撃セル際ニ、「ベルシェース」メヂュサ」「コケツト」及砲船「ボンセル」ハ其側面ヨリ射テ甚タヨク中レリ、然ルニ前ニ言フカ如ク、一時半可リニシテ、日本人砲ヲ棄テ、逃ケ去レリ、○然ルニ偶々日本人再ヒ其台ニ下リ来リ、一発ヲナセシニ、丁度其時我空彈至リテ、更ニ日本人残ラス退キ去レリ○時トシテ日本人其砲ヲ発セントテ出テ来レトモ、最初我方ノ一発ヲ受テ諸人去リタレハ、其詮ナカリシ、○我方ニテ砲台四処ヲ攻メテ、午后六時前ニ皆發声ナカラシメタリ、○此夜五日「ベルシェース」ノ指揮官ト余ノ数人上陸シテ、砲台ノ十砲ニ釘ヲ打ち、此辺ノ燒クヘキモノニ火ヲ点シタリ、第一ト第二ノ砲台悉ク

焰トナリ、晩頃ニ烈ク裂ケル声ヲ発シ、又人家多ク燒ケタリ、然レトモ、予ニハ甚タ過分ニ燒ケタリトモ思ハレス、但暮ントスル頃、処々ノ砲台ノ焼ル色見事ナリシ、

「ターター」名舟ノ近傍ニテ烈シク破裂セル一空彈及他ノ彈ノ船ニ少シ中リタルニ由テ、五六人創ヲ受タルアリ、○「パロサ」名ハ「ターター」ト略同様ナリ、○「レヲバルド」名舟ノ遣リ出シニ中リタル彈アレトモ、船身ニ中リタルハナシ、但前ノ方ニテ一空彈高ク破裂シ、其大塊甲板ニ落シナリ、又其一方ノ汽輪ニ中リ一撃枋ヲ少シ損シタリ、此船ハ敵ノ目的ニ在リタレトモ一人モ傷者ナシ、○「メタルリス・コロイス」及「ヂャムビ」ハ死傷三四人アリタリ、

戦鬪第二日、即チ六日ニ昨夜中日本人砲座ヲ急ニ整ヘタリト見ヘテ、黎明ニ第三砲台ヨリ「レヲポルト」ニ少シ発砲セリ、第四砲台ヨリ「ターター」ト最モ近ツケル「ヂュブレース」ニ発シタリ、其最初ノ発ノ時、一

空彈裂テ一仏人ヲ殺シ、他人ヲ傷ツケタリ、予之カ為ニ心ヲ痛メリ、○其発砲一時ノ間彼國ノ一時ハ続カザリシナレトモ昨日ヨリモ強カリシ、殊ニ第四ノ砲台強シ、一発「ターター」船中ニ来リ、第一士官一人、舵夫一人、外七人ヲ傷ケタリ、其士官名ハ「プロウン」ナル者股ノ肉ヲ射リ抜カル、予思フニ骨ニモ中リタラン、舵夫ハ脚ニ二処ノ創ヲ得タリ、

然レトモ前ニモ謂フカ如ク、日本人ノ発砲久シカラステ、朝飯ノ頃ニハ其砲ヲ棄テ、去レリ、此時我等ハ朝飯ヲ食セシニ、直ニ号旗ヲ掲ケテ、諸兵ニ上陸ヲ命ス、故ニ「ブリュー・ヂャツク」ト名クル(2)「コムパニー」二三隊、甲必丹「アレキサンドル」ノ号令ニ属シ、水軍卒ハ各々号令ノ士官ニ属セリ、

上陸ノ兵卒ヲ載セタル小艇ヲ岸边ニ引キタル船ハ、「ペルシユース」・「アルギュス」・「メヂュサ」・「タキャン」・「コケット」ナリ、此諸船ハ上陸ノ扶助ヲモナセリ、午前十時許リニ勇々シキ列ニテ上陸セリ、

○仏・蘭・英ノ兵卒其諸士官ノ令ニテ、初日ニ発シタル砲台等ヲ奪ハントテ一時ニ丘ニ登ラントス、○英・蘭ノ兵相接シタレトモ、孰レカ先キナルヲ知ラス、諸兵其旗ヲ建テ、第二第三ノ砲台ヲ事モナク取りタリ、但第四ノ砲台ハ余程離レタレハ、諸兵イロ／＼ノ路ヲ越ヘテ漸ク着セリ、○予思フニ英兵最早ク此砦ニ着タリ、○今此四砲台ヲ取レルヲ以テ、砲ヲ車ヨリ取り、車ヲ焼キカケタリ、○斯ク手暴キ事ヲ為ス間ニ「ロイテ・コロネ^名官シユザア」ナル者ノ令ニテ兵ヲ進メ、此辺ニ敵ノ潜伏ヲ探ス、日本人ハ影ヲモ見セサリシニ、我兵卒日本人ノ陣処及野戦砦ニ往キカ、リタリ、○此砦ヲ奪ハントセシコト、我不幸ナリ、我兵此砦ニ近ク頃彼ノ砲ヲ我兵ノ前面ニ向ケタリ、○幸ニ其砲ノ^ネ覘ヒ方善カラズ、否ザレハ此処ニテ死スル者夥シカラン、○此ノ如クナレハ、数人傷ヲ受ケ或ル者ハ、殺サレタリ、○砲ヨリ葡萄彈ヲ発シ、銃ヲモ発シタリ、○故ニ死者八人・傷者二三十人ナリ、○此戦ハ今日ノ最モ著シキ

モノナリ、○敵ハ「ベルシユース」^名舟ノ砂上ニ触レタルヲ見テ、之ヲ夜中ニ撃ントテ其陣ヲ移シタルカ故ニ終ニ此砦ヲ奪フコトヲ得タリ、○此船ハ兵卒ヲ上陸セシメントテ之ヲ送り、岸辺ニ至ル間ニ水洑テ動キ得サリシナリ、○次日ノ夜ニ「アルギユス」ト「レヲポルド」ノ助ヲ得サルマテハ之ヲ浮バスコト甚タ難カリシナリ、○落日ノ頃、傷者ヲ近辺ノ船ニ乗セタリ、或ル者ハ「アルギユス」、或者ハ「レヲポルド」ニ乗セタリ、○前ニ謂ヘル大戦争ノ陣営・砲台・砲類ハ我等此処ヲ去ル前ニ不^レ残打壞シ、此夜中右陣営ノ焼ル炎ヲ見テ我等愉快ナリシ、○偕、戦終リテ諸兵ハ船ニ還レリ

○此日ハ終日写真家某ト画工某、^{ロント}倫敦ニ送ラン為ニ総テノ景況ヲ絵ケリ、○「タンクレート」^名舟ハ周防^ト云ヘノ一市邑ニ至リ、此処ノ小砲台ヲ撃チ、市邑ニハ火ヲ付ケタリ、此処ハ離レタル処ナレトモ、処々ニ火ノ燃ルヨウニ此方ヨリ見ヘタリ、

七日ニハ艦隊皆休息セリ、然レトモ、午后「ターター」

「デュブレース」・「チャムビ」・「メタルリス、コロイス」錨ヲ挙ケ、海峡ニ進ミ往キ、四十五砲ヲ備ヘタリト謂フ砲台ヲ攻撃セリ、然レトモ砲声ハ甚タ強クハ聞ヘサリシ、○其余ノ船ハ、午后ノ間皆ヨリ砲ヲ積ミ入レントテ事多カリシ、外ニ今日ハ格別緊要ノ事モナカリシナリ、

八日「ベルシウス」ニ砲ヲ取り入ル、ノ繁用アリ、此船ニ二砲ヲ得タルニ長サ十二寸ニテ孔ハ六寸ナリシ、之レニ長門大守ノ紋アリシ、船中ニ支那人在リテ鏤セル字ヲ見テ、重サ四千八百斤ト謂フ、予之ヲ秤量セルニ五千六百斤ナリ、右ニ大抵近シ、○又長サ十四「ヒート」略一尺ハニテ孔ノ大ナルアリ、右ノ砲ハ皆青銅ニテ製ス、

此日ノ午時頃、或ル日本士官「ユラリュス」船中ニ行クト見ヘタリシニ、一時許リニシテ旗船ノ檣頭ニ和平ノ旗ヲ揚ケタリシカ故ニ、諸船ニテ敵対スルヲ止メタリ蓋シ大守モハヤ戦争ヲナサスト乞ヘリ、提督ノ云、吾

ハ海峡ノ砲台ノ砲ヲ得シコトヲ要スト、日本人答云、汝取ント欲セハ残ラス取ルヘシ、我等ハ以来更ニ敵対セシコトヲ欲セス、

諸、此ノ如キ淡薄ノ事ニテ戦終ラハ、我等数月前ヨリ待設ケタル此戦モ実ニ失望ニ堪タリ、○他説ニ云、提督ハ大守自ラ船中ニ来テ謝セサレハ、大守ノ書簡ノ趣ヲ許容セストナリ、然レトモ今ハ何ノ処置アルカ、定マルコトナシ、明日何事カ起ルナラン、

九日朝、予早起シテ見ルニ、「タキアン」名出帆セリ、衆人何ノ所以ヲ知ラス、此船横浜ニ向フト聞テ、予失望セリ、今日ハ終日無事ナリ、

十日英・仏ノ提督其船ヲ海峡ニ進メ、「コンケット」モ此レニ続キ行ケリ、此時午前七時半ナリ、○大守提督ヲ訪フタル説ハ今ニ至ルマテ聞カサレトモ、諸事ヲ整頓セサル前ニ大守ニ逢ント治定セリト聞ク、○或ル砦ニ木製ノ砲アリ、七砲ヲ吾カ船ニ積メリ、○「タキアン」ハ姫島マテ往ケリトテ帰り来レリ、

今日説アツテ云、諸外国船内海ヲ通ルモノハ撃ツヘシト

テ大君ヨリ長州ニ命シタリト云フ書簡アリトナリ、実

ニ其書ヲ大君ヨリ送リタルモノナラハ大君ノ罪逃レ難

シ、

諸船ハ上海ヨリ「ペムブルークスハヤ」ト謂フ船来リ、

此ヨリ石炭ヲ積メリ、故ニ諸船不足スルコトナシ、

十一日「ユラリユス」外七艘尚海峽ニ留レリ、

今マ船横浜ニ向ケ発セントスレハ、更ニ委曲ヲ尽シ難

シ、

文書原寸 縦二五種 横一七種

二三 高橋縫殿熊本ヨリ喜入撰津川上式部へノ

書信

三通及地図一葉

下之関戦争報告

(包紙ウツ書)
一喜入撰津殿

高橋縫殿

川上式部殿

「(朱)
甲子八月七日」

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四〇一号文書ト同文ナリ)
地図原寸 縦二九種 横四二種

